大和近江ノ正稅及ビ大炊寮ノ米ヲ供養料ニ充ツ

經王、必致冥感、其供養料、七大寺用大和國正稅、延曆寺用近江國正稅、東西寺充大炊寮米者、綱所承知、依宣行之、庶幾慧風急扇、霧露之痾早除、嫉氣自消、都鄙之憂無聞、事緣攘災、不可懈緩、但供養粳米、各可運送之狀、仰彼寮國了、

天德四年四月三日　　大史我孫宿禰

中辨藤原朝臣（文範）

〔吉記〕治承五年六月十五日、庚申、〇中略

賴業眞人勘申云、

天德四年四月三日、壬申、左大臣已下著仗座、被定疾疫御祈、七大寺、東西寺、延曆寺大般若御讀經事、

重ネテ延引ス

四日、癸酉、穢ニ依リテ、廣瀨、龍田祭ヲ延引ス、尋デ、之ヲ追行ス、

〔日本紀略〕村上天皇　四月四日、癸酉、廣瀨、龍田祭延引、依穢也、

五月六日、甲辰、〇中略今日廣瀨、龍田祭、去四月四日依穢延引、今月二日欲行、而

依服錫紵、〇本月二十一日ノ條參看、延及今日、內裏雖穢、付所司行之、

〔西宮記〕四月　廣瀨龍田祭　天德四年四月四日廣瀨祭、五月三日（六カ）行、依穢延引、依

陰陽寮勘文、

內裏穢ニ依リテ所司ニ付ス

新年祭ニ准ジテ行フ

〔北山抄〕一年中要抄上　四日廣瀨龍田祭事　四月　天德四年四月、廣瀨、龍田等祭、重延日例、

未勘申間、期日已近、此祈風雨年穀祭也、准祈年祭重延日例、被行可宜云々、依

請、

錢ヲ色紙ニ包ミ削木ニ付ク

〇四月ノ諸祭日ヲ改定スルコト、三月三十日ノ條ニ見ユ、

八日、丁丑、灌佛、

〔日本紀略〕村上天皇　四月八日、丁丑、灌佛、

〔西宮記〕四月　御灌佛事　天德四年四月八日、侍臣錢進終間、忠君取今宮（後平）四親王、料

錢置机、錢五百、裹色紙、付削木、是當代在藩時例云々、

九日、戊寅、天變ニ依リテ、延曆寺大日院ニ於テ、熾盛光法ヲ修ス、

〔日本紀略〕村上天皇　四月四日、癸酉、〇中略今日月與大白合宿、

月太白ト合ス

五日、甲戌、大白晝見、戊刻月犯北河、

太白晝見ハル

七日、丙子、鎭星犯牽牛、

鎭星牽牛ヲ犯ス

九日、戊寅、於大日院修熾盛光法、限五十日、合前〇二月二十一日ノ條參看、一惣百日、竝爲消

除天變之難也、

五十箇日

〔延喜天曆御記抄〕〇柳原家記錄百三十一所收　御修法事付七高山御修法、

勅シテ下手人ヲ勘糺セシム　醫藥ヲ賜フ

（天徳四年）同年四月十日、自今日相續、於大日院修熾盛光法、限五十日、合前惣百日、是爲消除天變也、〇華頂要略所收、天台座主記同ジ、

十三日、壬午、五月節ヲ停メシム、

〔日本紀略〕村上天皇　四月十三日、壬午、令仰可停五月節、

十八日、丁亥、式部大輔橘直幹、美福門前ニ於テ、雜人ノ爲メニ毆傷セラル、尋デ、下手人式部史生奈癸忠雅ヲ捕フ、

〔日本紀略〕村上天皇　四月十八日、丁亥、式部大輔橘直幹朝臣、自省退出之間、於美福門前、爲雜人被毆損、公家令召捕嫌疑者彼省史生奈癸忠雅、

十九日、戊子、捕獲直幹朝臣所指申下手人省史生奈癸忠雅、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　四月十八日、丁亥、式部大輔直幹朝臣、自省退出之間、於美福門前、爲雜人被打損、

十九日、戊子、檢非違使右衞門府生穗積良氏、石生秋鄕等參內、令藏人雅材奏直幹朝臣申詞曰記、又令申損所甚多、辛苦无極、且捕獲所指申下手人等、勅曰、未嘗聞毆傷四位以上、如此之事、早隨直幹申旨可勘糺、又仰雅材、以醫藥下賜

月南斗第二星ヲ犯ス

第二皇女御年十三喪料ヲ賜フ　薨奏　御葬送

〔侍中群要〕臨時急事　追捕官人等給祿事

從追捕歸參、帶弓箭直以參入、若給祿者不拜舞、

天德四年、不論尉、志、府生等、各給祿一疋、

〇侍中群要、月日ヲ缺クト雖モ、姑ク茲ニ收ム、奈癸忠雅ヲ拷訊スルコト、五月二十一日ノ條ニ見ユ、

二十日、己丑、主稅頭十市以忠、天文奏ヲ上ル、

〔日本紀略〕村上天皇　四月廿日、己丑、主稅頭以忠奏、去十八日月犯南斗第二星、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　四月廿日、己丑、主稅頭以忠令奏去十八日寅時、月犯南斗第三（二カ）星狀、

二十一日、庚寅、理子內親王薨ゼラル、

〔日本紀略〕村上天皇　四月廿一日、庚寅、〇中略今日第二理子內親王薨、年十三、

五月二日、庚子、奏理子內親王以去月廿一日薨由、卽垂御簾、申刻於南廊服錫紵、亥二刻除服、有禊、今日葬理子內親王、

〔中右記〕永久二年十月七日、戊申、中略〇故匡房卿、昔年郁芳門院崩給時、勘申云、

御錫紵ヲ著シ給フ

○中略天德四年四月、理子內親王薨、主上服錫紵一日中除御、

〔一代要記〕村上天皇女　理子內親王　天德四年四月二十五日薨、年十三歲、

〔本朝皇胤紹運錄〕

御世系

村上天皇

理子內親王天德四四廿五薨、母庶明女、廣幡御息所、

○理子內親王ノ薨日、一代要記、本朝皇胤紹運錄、竝ニ二十五日ニ作ル、今日本紀略ニ據リテ揭書ス、理子內親王ノ七七日忌法會ヲ園城寺ニ修スルコト、六月九日ノ條ニ見ユ、

二十三日、壬辰、京官除目、

任人九十九人

〔日本紀略〕村上天皇　四月廿一日、庚寅、京官除目、

廿二日、辛卯、除目、所任九十九人、

〔公卿補任〕五

參議正四位下野好古、七十七、四月廿三日任大宰大貳、止辨、(左大辨)弼等、(彈正大弼)

從四位上橘好古、六十八、四月廿三日轉左大辨、備前守如元、

〔公卿補任〕五應和三年　參議從四位上藤賴忠、四十、(天德四年)四月廿二日右大辨、

大宰大貳小野好古赴任ノ由ヲ申ス御前ニ召サズ祿ヲ賜フ

警固

齋院御禊穢ニ依リテ延引ス內藏近衞馬寮等ノ使ヲ停ム齋院社頭ニ參ゼラル解陣

〔公卿補任〕六正曆三年　非參議從三位菅輔正　同廿三(天德四年四月)民部少輔、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　四月廿二日、辛卯、陰陽頭賀茂保憲爲天文博士、

〔濫觴抄〕下　天文博士　同四月廿二日、(天德四年)陰陽頭賀茂保憲任之、

〔敍位除目執筆抄〕天德四四廿二(或廿一日除目始、)京官、廿三日入眼、執筆(實賴)左大臣、

〔西宮記〕臨時八大宰帥大貳赴任事　天德四年九月廿八日、大貳好古朝臣申赴任之由、卽召東庇侍所、令延光朝臣仰之云々、依旅所不召前、給祿云々、

○九月二十八日、大宰大貳小野好古赴任ノコト、便宜合敍ス、

二十八日、丁酉、賀茂祭ヲ追行ス、

〔日本紀略〕村上天皇　四月廿六日、乙未、警固、

廿七日、丙申、齋院禊、先例午日行之、而依滿穢限、今日行之、

廿八日、丁酉、賀茂祭、但停內藏寮、近衞、馬寮等使及典侍、命婦、藏人、國司、春宮坊使等、依理子內親王薨也、齋院依例參社頭、又中宮(安子)使發向、以無其忌也、

廿九日、戊戌、解陣、

〔西宮記〕四月賀茂祭　天德四年四月廿七日御記云、丙申、此日有齋院禊事、例午日行、而依穢今日行之、藏人所陪從、山城、近江牛等、不覽遣彼院也、

理子内親王薨去ニ依リ勅使等ヲ停ム

承和八年ノ例

停止スト云フノ説

〔北山抄〕一年中要抄上四月一日於南殿覽被馬事　天徳四年、○略中賀茂祭、依天暦四年例、○天暦四年四月三十日ノ條參看、以下酉可行云々、廿八日使可發也、而廿五日聞食理子内親王薨由、依承和八年例、件例、官未奏前也、延長五年九月二日停勅使、坊（彼カ）司等、齋王可參祭、○略中廿八日、内藏、近衛府、馬寮及典侍、命婦、藏人、春宮坊使等停止、但中宮（安子）使發向、以無忌也、承和例未日有大祓、而依事急、申日行之、

〔園太暦〕文和四年四月十一日、天晴、今日右府（近衛道嗣）被送消息、○略中又賀茂祭延引、不打任事歟、停止又如何、○略中覺悟分可承云々、

賀茂祭延引例

天徳四四廿八行之、以上内裏、○中略

同祭停止例

天徳四依理子内親王薨穢也、

〔年中行事祕抄〕四月下酉日賀茂祭例　天徳四年四月廿八日、鴨祭、子細見御記、○四月ノ諸祭日ヲ改定スルコト、三月三十日ノ條ニ見ユ、

勅使ヲ遣シテ病ヲ訪ハシメラル

勅シテ出家ヲ止メシメラル

廢務

廢者十五人

五月大己亥朔盡

一日、己亥、日食、

〔日本紀略〕村上天皇　五月一日、己亥、日蝕、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　五月一日、己亥、日蝕、仍廢務、

〔本朝統暦〕六　五大朔己亥、未日蝕十二分弱、午四、申三、

參議右衛門督藤原朝忠上表ス、

〔西宮記〕臨時一裏書新帝表　天徳四年五月一日、令藏人永保、給參議朝忠朝臣請龍右衛門督狀云々、

○朝忠上表ノ日詳ナラズ、姑ク玆ニ揭書ス、

病ニ依リテ、右大臣師輔ニ度者ヲ賜フ、尋デ、師輔、出家ス、

〔日本紀略〕村上天皇　五月一日、己亥、○略中今日依右（師輔）大臣病、賜度者十五人、右大臣正二位藤原朝臣師輔依病落髮、（或云、二日出家、可尋之、）

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　五月二日、庚子、辰刻勅使主殿頭時經問右大臣病、兼訪出家實否、午刻右大臣以春宮大進時柄、令奏云、年來本意之上、依病危急、今日可出家者、報勅云、縱有本意、忽出家事如何、東宮（憲平親王）未成人、又無可訓導人、至

奉答、

于病疹、平否難量、猶暫難許入道之事、右大臣奏云、爲果素懷、令奏出家之由、須待重勅、乃雖行之、依病火急、剃髮已畢、今間恐申者、

〔九曆〕□□日、御出家、法名、

二日、庚子、諸國及ビ十五大寺等ヲシテ、讀經シテ、疾疫ヲ祈禳セシム、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　五月二日、庚子、○中略又天下疾疫夭亡之輩甚繁、給官符諸國幷十五大寺等、讀經祈疫癘事、

三日、辛丑、炎旱及ビ疾疫ニ依リ、諸社ニ奉幣、讀經セシム、

〔祈雨日記〕天德四年五月三日御記云、民部卿藤原朝臣（左衛）令申云、耕種之間、無雨潤、愁申尤多、早被奉祈雨幣、令仰云、依延喜廿三年例、行諸社讀經事可宜、又可有奉幣云々、

〔祈雨記〕天德四年五月三日、辛丑、令雅材仰民部卿藤原朝臣云、近日久不雨、人愁漸多、若可行奉幣歟、又疾疫死亡之輩甚繁、須勘如此之時被行例、藤原朝臣令申云、耕種之間、無雨潤、愁申尤多、早被奉祈雨幣可宜、申刻藤原朝臣令奏少外記正澄勘申疫癘之時、被祈禱之例文、令仰云、依延喜廿三年例、行諸社讀經事可宜、祈雨幣之次、同可祈申歟、○中略已上御記、

疫癘ノ時ニ祈禱ヲ行フ例文ヲ奏ス

延喜二十三年ノ例

死者多シ

六衞府、菖蒲輿ヲ獻ズ、

〔日本紀略〕村上天皇　五月三日、辛丑、六衞府獻菖蒲輿、

四日、壬寅、右大臣正二位藤原師輔薨ズ、

〔日本紀略〕村上天皇　五月四日、壬寅、入道右大臣（師輔）薨于九條第、年五十三、

六日、甲辰、大外記傳說勘申出家大臣不奏不贈位之文、左大臣仲平之例也、○中略其日右大臣葬家給絹百匹、調布二百段、商布五百段、鐵云々、

〔祈雨記〕天德四年五月、○中略四日、丙寅、前右大臣藤原師輔朝臣薨於九條第、年五十三、○中已上御記、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　五月四日、壬寅、前右大臣藤原朝臣師輔、年五十三、薨於九條第、

〔榮華物語〕一月宴　かゝる程に、九條殿なやましうおほされて、御かせなどいひて、おほんゆゝてなどして、くすりきこしめして、すくさせ給ふ程に、まめやかにくるしうせさせ給へは、宮（女子）もさとにいてさせ給ぬ、おとこ君たちあまたおはすれど、またはかゝ〳〵しくおとなしきもさすかにおはせす、なかにおとなしきは、中將（伊尹）なとにてをはするもあり、いかにおはすへきにか

年五十三
出家大臣薨奏贈位ノ有無ヲ勘ヘシムル絹布鐵等ヲ賜フ

風邪
湯治
皇后御退出

師輔ノ爲メニ御修法ヲ行ハシメラル

師輔ノ早世ヲ惜マヌ人ナシ

師輔ノ薨去ニ依リ御讓位ヲ思立タセ給フ

と、うちにもいみしうおほしめしなけきたり、東宮（憲平親王）の御うしろみも、四五宮（爲平親王、守平親王）の御事も、たゝこのおとゝをたのもしきものにおほしめしたるに、いかにいかにと、おほやけよりも御修法なとをこなはせ給ふ、いとめてたき御さいはひによの人も申おもへり、天德四年五月二日、出家せさせ給て、四日にうせさせ給ぬ、御年五十三、たゝいまかくしもおはしますへき程にもあらぬに、くちおしう心うく、おしみ申さぬ人なし、世をしりたまはんにも、いとめてたき御心もちゐをと、返々おほしまとはせ給、宮おはしませは、よろつかきりなくめてたし、一天下の人、いつれかはみやになひきつかうまつらぬかあらん、○中略九條殿のいそきたる御ありさま、返々も口をしういみしき事をそみかとも后（安子）もおほしめしたる、よの中なにことにつけてもかはりゆくを、あはれなることに御門もおほしめして、なをいかてとうおりて、心やすきふるまひにてもありにしかなとのみおほしめしなから、さきさきも位なからうせ給ふみかとは、のち〳〵の御有さま、いと所せき物にこそあれと、おなしくは、いとめてたうこよなき事そかしとまておほしめしつゝそすくさせ給ひける、

出家ニ依リテ薨奏贈位無シ本家給物ヲ辭ス

藤原伊尹等服解

官歷

〔西宮記〕臨時一裏書新帝表　天德四年五月四日、前右大臣師輔薨、有定、依出家不行薨奏贈位事、又依左大臣時平例、有例給物、本家辭不請、

〔公卿補任〕五　參議從四位上藤伊尹、三十七、五月（天德四年）四日服解、六月廿六日復任、

〔公卿補任〕六安和元年　非參議從三位藤兼家、四十、五月（天德四年）四日服解、六月廿六復任、

〔公卿補任〕六安和二年　參議正四位下藤兼通、四十五、五月（天德四年）四日服解、六月廿六復任、

〔公卿補任〕六安和三年　參議從四位上藤爲光、廿九、同（天德）四五四服解、六月廿六復任、

〔公卿補任〕五　參議從四位下藤師輔　左（忠平）大臣第二子、母右大臣正三位能有女、延長元九五從五下、中宮諱穩子、今日自左大臣東三條第遷御主殿寮、爲令家慶所敍也、大臣息也、（五）同二二一侍從、同四年十一月十日昇殿、同六六九右兵佐、同七正七從五上、同九三十三右（右）近權（少）中將（將カ）、承平元閏五十一藏人頭、同二正廿七兼近江介、十一月十六日正五下、大嘗會、悠紀國司、同三正十二任右權中將、同四年正月從（七日脫カ）四下、九日如舊爲頭、同五年二月廿三日任參議、右權中將如元、元藏人頭、同六年正月廿九日兼伊与

權守、天慶元年正月七日從四上、六月廿三日敍從三位、任中納言、超七人、九月三日兼左門督、爲別當、同二年十二月廿七日兼中宮大夫、同五年三月廿九日任大納言、中宮大夫如元、閏三月七日賜兼字、四月勅授劒、同七年四月廿二日兼春宮大夫、止中宮大夫、同八年二月廿八日兼按察使、十一月廿五日右近大將、兄弟相並同九年正月七日正三位、四月廿八日從二位、前坊大夫勞、天曆元年四月廿六日任右大臣、右大將如元、同三年八月十四日服解、十二月二日復任、同九年二月七日正二位、同日上表、辭右大將、天德元年四月賀五十算、五月四日薨、先二日出家、依病也、號九條右相府、又號坊城大臣、生年延喜八年戊辰、

勅授帶劒　兄弟相並ヒデ左右近衛大將ト爲ル　九條右相府又坊城大臣ト號ス　母ハ源昭子

世系

〔尊卑分脈〕藤原氏　冬嗣孫

忠平

師輔　左衛門督、頭、檢非違使別當、按察使、中宮春宮大夫、右大臣、右近大將、正二位、依早世不經攝關職、天德四年五月二日出家、依病、同月四日薨、五十二、號九條殿、又號坊城右丞相、贈太政大臣、正一位、母右大臣源能有公女、正五下昭子、

九條殿傳

延喜八戊辰生、延長元九五從五下、十六、同二年二一侍從、同六年六九右兵佐、同七年正七從五上、同八九昇殿、同九年三十三右近少將、承平元閏五十一補藏人頭、廿四、同二年正廿七近江介、同年十一十六正五下、同三年正廿二右近中將、同四年正七從四下、同五年二廿三任參議、中將如元、同六年正廿九伊与權守、天慶元六廿任中納言、卽敍從三、同年月日兼左衛門督、使別當、同年十二廿七任中宮大夫、同年三廿九任大納言、宮司如元、同年四廿九帶劒、同七年四廿四遷春宮大夫、同六年三廿八兼按察使、右近大將、同九年正七敍正三位、同年四廿八從二位、卽位日、天曆元四廿六任右大臣、同年二大將還宣旨、同九年二七敍正二位、

伊尹　母從四位上武藏守經邦女、○事蹟略ス、

兼通　母同伊尹公、○事蹟略ス、

兼家　母武藏守從五位上藤原經邦女、○事蹟略ス、

遠量　五畿母右馬頭、大藏卿、從四位、母右大臣顯忠女、或常陸介公葛女、

忠君　五畿ヲイ右兵衛督、正四下、爲貞信公子、母同兼家公、安和元｜卒、

遠度　五畿右兵衛督、春宮亮、播磨守、右馬頭、從三位、母常陸介公葛女、永祚元三廿四薨、

遠基　ヲイ左京大夫、從四下、母同遠量、

高光　右少將、從四下、法名如覺、號多武峯少將入道、母雅子內親王、

室 三内親王ヲ室ト爲ス

女子 母、重信公室、通方母、
女子 母、繁子、從三位、典侍、道兼公室、女御尊子母、
女子 母、左大臣高明室、愛、三君之後嫁之、
女子 母同爲光、左大臣高明室、三君、惟賢、俊賢等母、
女子 母、猶子、冷泉院坊時御息所、後圓融院女御、
女子 母同上、左大臣高明室、三君之後嫁之、
女子 母、登子、尙侍、從二位、先重明親王、後村上貞觀殿尙侍、
女子 ○安子、事蹟略ス、母同兼家公、
深覺 ○母同公季公、事蹟略ス、仁
尋禪 ○母同爲光公、事蹟略ス、山
公季 ○母康子內親王、延喜皇女、事蹟略ス、
爲光 ○母雅子內親王、事蹟略ス、五條
女子 母、雅子內親王、

〔本朝皇胤紹運錄〕

醍醐天皇

勤子內親王 四品、配師輔公、母同時明、○衣通姫ノ、更子、(ママ)ニ、(ママ)
雅子內親王 齋宮、配九條殿、恒德公母、

傳記名臣 忠平ノ二男 大臣在職十四年

男子十一人 女子六人 長女安子皇后ト爲ル

次女登子 重明親王ノ室ト爲ル

康子內親王 一品、准三后、配九條殿、仁義(公季)公母、
子、

〔二中歷〕 十三名人歷 名臣

〔大鏡〕 ○中侯爵德川義親氏所藏

大臣 九條殿師輔(マヽ)、五十二、

大臣源能有の御むすめ、いはゆる九條殿におはします、公卿にて廿六年、大臣のくらゐにて十四年おはしましゝ、御むまごにて東宮(憲平親王)、又四宮(盛平親王)、五宮(守平親王)を見をき奉りて、かくれ給けんは、きはめてくちおしき御ことぞや、御としまた六十にもたらせ給はねば、ゆく末はるかに、ゆかしきことおほかるべきほどにてよと、せめてさゝやく物から、てをうちあふく、その殿に御君たち十一人、女五六人そおはしましゝ、第一の御むすめ(安子)は、村上の先帝の御時の女御、おほくの女御、宮す所の中に、すくれてめでたくおはしましき、○中略冷泉院、圓融院、爲平式部卿の宮と女宮四人との御母后にて、又ならひなくおはしき、御門、春宮と申も、おほくはたゝこの九條殿の御ひとすぢなり、○中略まことこの后の宮の御おとゝの中の君(登子)は、重明式部卿の宮の北の方にてそおはしましゝ、○中略さてきさいの宮もうせおはしましてのちにめしとりて、いみしう時めかさせたまふて、貞觀殿のないしの

三女及ビ五女ハ源高明ノ室トナル　六女　男五人太政大臣トナル　百鬼夜行ニ會フ

かみどこそ申しゝかし、よになくおほえおはして、こと女御、宮す所そねみ申しゝかと、かひなかりけり、是につけても九條殿の御さいはいとそ申ける、また三君は、にし(源高明)の宮殿の北の方にておはせしを、御子うみてうせ給にしかは、よそ人は君たちの御ためあしかりなんとて、また御おとうとの五にあたらせ給愛宮と申しゝにうつらせ給にき、六(姫子)の君は、冷泉院の春宮におはしましゝにまいらせ給なんと、をんな君達は、みなかくおはしまさふ、男君たちは、十一人の御なかに、五人は太政大臣(伊尹、兼通、兼家、隆光、公季)にならせ給へり、それあさましくおとろ〳〵しき御さいはひなりかし、その御ほかは、右兵衛督忠君、又北野の三位(遠度)、又大藏卿遠量、多武峯入道少將也(高光)、又法師には、飯室の權僧正(尊師)、いまの禪林寺の僧正(深覺)なとにこそはおはしますめれ、法師といへと、よの中の一の驗者にて、佛のことくにおほやけわたくしたのみあふき申さぬ人なし、○中略この九條殿は、百鬼夜行にもあはせ給へるは、いつれの月といふことはえうけ給はらす、いみしうよふけて、うちよりまかてさせ給に、大宮よりみなみさまへおはしますに、あはののつしの程に、御車のすたれうちたれさせ給て、御車うしかきおろせ〳〵といそき仰らるれは、あやしと思

師輔ト藤原元方　采ニテ中宮ノ御腹ノ御子ヲトフ

へとかきおろしつ、御隨身御前ともゝいかなることのおはしますそと、御車のもとに近くまいりたれは、御したすたれうるはしくひきたれて、御さくとりてうつふさせ給へるけしき、いみしき人にかしこまり申させ給へる御さまにておはします、御車はしちにかくなたゝ隨身ともはなかえのひたり右のくひきのもとにいとちかく候て、さきをたかくをへ、さうしきともゝ聲たえさすな、御前ともゝちかくあれとおほせられて、尊勝陀羅尼をいみしうよみ奉らせ給、うしをは御車のかくれかたにひきたてさせ給へり、さてときなかはかりありてそ御すたれあけさせ給て、いまは御うしかけてやれと仰せられけれと、つゆ御ともの人々は心得さりけり、のちゝにしか〳〵のことのありしなと、さるへき人〳〵にこそはしのひてかたり申させ給けめと、さることは、をのつからちり侍りけるにこそは、元方民部卿の御(雅平親王)むまこ、まうけの君にておはする比、みかとの御庚申せさせ給に、この民部卿まいり給へるさらなり、九條殿候はせ給て、人々あまた候給て、たうたせ給つゐてに、冷泉院のはらまれおはしましたる程にて、さらぬたにによひといかゝとおもひ申たるに、九條殿、いてこよひたつかうまつら

師輔ハ凡人ニアラズトノ評師輔ノ諸願皆成就ス

内裏ヲ抱キテ立ツ夢ヲ見ル

んと、仰らるゝまゝに、このはらまれ給へるみこ、おとこにおはしますへくは、てうろくいてことてうたせ給へりけるに、たゝ一とにいてくるものか、ありとある人、めを見かはしてめて感しもてはやし給、わか御みつからもいみしとおほしたりけるに、この民部卿のけしきいとあしうなりて、いろもいとあをくこそなりたりけれ、さてのちに靈にいてまして、そのよやかてむねにくきはうちてきとこその給けれ、大かた此九條殿、いとたゝ人にはおはしまさぬにや、おほしめしよるゆくすえのことなとも、かなはぬはなくそおはしましける、くちおしかりけることは、いまたいとわかくおはしましける時、ゆめに朱雀門の末(うゑイ)に、左右の足をにしひんかしの大宮にさしやりて、きたむきにて、内裏をいたきてたてりとなんみえつると仰られけるを、御前になまさかしき女ほうのさふらひけるか、いかに御またいたくおはしましつらんと申たりけるに、御ゆめたかひて、かく御子孫はさかへさせ給へと、攝政、關白しおはしまさすなりにしなり、又御すゑも思はすなることのうちましり、帥(伊周)殿の御ことなとも、かれかたかひたるゆへにはへめり(る脱カ)、いみしき吉想のゆめあしさまにあはせつれはたかふと、むかしよ

子孫繁榮ス

師輔ノ靈冷泉天皇ヲ抱キテ守護シ奉ルトノ說

り申つたへてはへることなり、荒凉して心しらさらん人のまへにて夢のかたりな、このきかせ給人々しおはしまさゝれ、いまゆく末も九條殿の御そうのみこそ、とにかくにつけてひろこりさかへさせ給はめ、○中略いにしへよりいまにかきりもなくおはしますとのの、たゝ冷泉院の御有さまのみそ、いと心うくくちおしき事にてはおはしますといへは、されはことの例には、まつ今の御時をこそはひかるめれといへは、それはいかてかさらては侍らん、その御門のいておはしましたれはこそは、なかくこの藤氏の殿はら、いまにさかへおはしませ、さらさらましかは、この比のわつかに我も諸大夫はかりに成いてゝ、ところ〳〵の御前さうやくにつかれありきなましとこそ、入道(清長)殿はおほせらるなれは、源民部卿(俊賢)さるかたちしたるまうち君たち候ましかは、いかに見くるしうとそ、わらひ申させ給なる、かゝれはおほやけわたくし、その御時のことをためしとせしめ給ふことはり也、御物のけこはくていかゝと覺しめしゝに、大嘗會の御禊にこそいとうるはしくてわたらせ給にしか、九條殿なん御うしろをいたき奉りて、御こしのうちに候はせ給けるとそ人申しゝ、けにうつゝにても、いとたゝ人と

心性優美善政ヲ行ノ

性質温和寛大

見えさせ給はさりしかは、ましておはしまさぬあとに、さやうの御まもりにても、そひ申させ給つらん、さらはことに元方卿、桓算とをそおひのけさせ給へきな、それはまたしかるへきさきのよのむくひにこそはおはしましけめ、さるは御心いとうるはしくて、世のまつりことも、かしこくせさせ給ふつへかりしかは、世間にいみしうあたらしきことにそ申すめりし、さてまたいまは故九條殿の御子とものかす、この冷泉院、圓融院の御母、貞觀殿の内侍のかみ、一條殿の攝政、堀川殿、大入道殿、忠君の兵衛のかみと六人は、武藏守從五位上經邦のむすめのはらにおはしまさふ、よの人をんなはといふことは、この御ことにや、おほかた御はらことなれと、おとこ君たち五人は太政大臣、三人は攝政し給へり、〇榊原本ヲ以テ校ス、

〔榮華物語〕一月宴

四郎忠平のおとゝ、〇略中そのおとゝの御子五人そおはしける、〇略中二郎は右大臣にて師輔のおとゝ、九條といふ所に住給ふ、〇略中九條の師輔のおとゝいとたらはしくおはして、あまた北の方の御はらにおとこ十一人、女六人そおはしける、〇略中九條のおとゝは、おいらかに、しるしらぬわかす、心ひろくなとして、月比ありて參りたる人をも、唯今ありつ

父忠平ノ方人師輔ニ追從ス

君寵ヲ蒙ル

忠平師輔ヲ右ノ子ト稱ス

師輔ノ振舞常人ニ異ラズ

るやうに、けにくゝもてなさせ給はすなとして、いと心やすけにおほしをきてためれは、大殿の人々、おほくはこの九條殿にそあつまりける、〇略中東宮やう〳〵およすけさせ給けるまゝに、いみしううつくしうおはしますにつけても、九條殿のおほんおほえいみしうめてたし、又四五の宮さへおはしますそめてたきや、かゝる程に、天德二年十月廿七日にそ、九條殿女御きさきにたゝせ給、藤原の安子と申て、今は中宮と聞えさす、中宮大夫には、みかとの御はらからの高明の親王と聞えさせし、いまは源氏にて、例人になりておはするそなり給にける、つき〳〵のみやつかさとも、心ことにえらひなさせ給、九條殿の御けしき、世にあるかひありてめてたし、

〔榮華物語〕三十九布引の滝

小一條のおとゝ貞信公、左の子、右の子と、小野宮殿、九條殿を申させ給けるを、世に目出度ことに語りつたへたるを、かくこそはとめてたくおはしますことを世人申しけり、

〔富家語談〕

一九條殿ハ、例人ノ樣ニフルマハセ給ケルナリ、賀茂祭ノ使ノ出立所ニ令渡給ケルニ、御車ニ蚰ノ入タリケルヲハ、御笠袋ニ入テ、袱オヽセムトテ遣ケルヲ、道ニテ蚰ニケテケリ、以之案之、如此恠物ハ袱ヲオ

丈高シ

早世ヲ豫知ス

良源ヲ新師トス　ニ楞

横川ニ楞嚴三昧院ヲ建立ス

ヽスヘキ事ナメリ、仍銀花ナト云物ニモ、被ヲオホセテ棄也者、

〔富家語談〕保元三年　仰云、九條殿ハ御長高御座ケレハ、御裝束ナエラカニテ御、小野宮殿長ヒキニ御ケレハ、物ヲハコハク被著云々、

〔愚管抄〕三　コノ貞信公ノ御子ニ、小野宮、九條殿トテヲハスメリ、コノ事トモハ、世ツキノカヽミノ巻ニ、コマ〴〵トカキタレハ、申ニヲヨハ子トモ、ツシ〳〵ノアフトコロヲハ申ヘキニヤ、ヲトヽノ九條ノ右丞相ハ、アニノ小野宮トノニサキタチテ、一定ウセナムストシラセ玉ヒテ、ワカミコソ短祚ニウケタリトモ、我子孫ニ攝籙ヲハツタエンニ、又ワカ子孫ヲ帝ノクワイセキトハナサムトチカイテ、觀音ノ化身ノ叡山ノ慈惠（良源）大師ト、シタンノチキリフカクシテ、横川ノミチニ楞嚴三昧院トイフ寺ヲタテヽ、九條トノヽ御存日ニハ、法花堂ハカリヲマツヽクリテ、ノホリテ大衆ノ内ニテ、火ウチノ火ヲウチテ、ワカコノ願成就スヘクハ、三度カ中ニツケトテ、ウタセ玉ヒケルニ、一番ニ火ウチツケテ、法花堂ノ常燈ニハツケラレタリ、イマニキエスト申ツタヘタリ、〇十八天曆八年十月ノ條參看、サレハソノ御ムスメノハラニ、冷泉、圓融ノ兩帝ヨリハシメテ、後冷泉院マテ、繼躰守文ノキミ、内覽攝籙ノ臣ア

サヤカニサカリナリ、

〔盧山寺文書〕〇山城　天祿三年五月三日初記沒後事、〇中略　眞言堂五間、四面庇、二面孫庇、

延曆寺ニ眞言堂ヲ建立ス

右堂依故九條殿下仰旨、採儲材木之間、殿下薨逝、仍啓事由於前中宮（安子）所造立也、材木料物半分、殿下御存生時被充也、〇下略

〔宇治拾遺物語〕二　清德聖きとくの事

今はむかし、せいとくひしりといふ聖のありけるか、母の死たりけれは、ひつきにうち入て、たゝひとりあたこの山にもちて行て、大なる石を四のすみにをきて、そのうへにこのひつきをうちをきて、千手たら尼を片時やすむ時もなく、うちぬる事もせす、物もくはす湯水ものまて、こはたえもせすうつゝともなく、ほのかに母のこゑにて、此たら尼をかくよるひる誦給へは、我ははやく男子となりて、天にむまれにしかとも、おなしくは佛になりて告申さんとて、今まてはつけ申さゝりつるそ、今は佛になりて告申也と

師輔ト僧清德

いふときこゆるとき、さ思つる事也、今ははやう成給ぬらんとて、とりいてそこにてやきて、骨とりあつめてうつみて、上に石そとはなとたてゝ、例のやうにして、京へ出る道に、西京になきいとおほくおひたる所あり、此聖こうして物いとほしかりければ、道すから折て食ほとに、ぬしの男出きてみれは、いとたうとけなる聖のかくすゝろに折くへは、あさましと思て、いかにかくはめすそといふ、聖こうしてくるしきまゝにくふ也と云時に、さらはまいりぬへくは、いますこしもめさまほしからんほとめせといへは、三十すちはかりむす〳〵と折くふ、このなきは三町はかりそうへたりけるに、かくくへはいとあさましく、くはんやうもみまほしくて、めしつへくは、いくらもめせといへは、あなたうととて、うちいさり〳〵おりつゝ、三町をさなからくひつ、ぬしのおとこあさましう物くひつへき聖かなと思て、しはし居させ給へ、物してめさせんとて、白米壹石とり出て、飯にしてくはせたれは、としころ物もくはて、こうしたるにとて、みなくひて出ていぬ、此男いとあさましと思ひて、これを人にかたりけるを聞つゝ、坊城の右(師輔)の大殿に、人のかたりまいらせけれは、いかてかさはあらん、心えぬ事かな、よひ

清德餓鬼畜生等ヲ從フ

師輔之ヲ見テ白米十石ヲ與フ

糞小路ヲ錦小路ト改メ給フ

て物くはせてみんとおほして、けちえんのために物まいらせてみんとて、よはせ給ひければ、いみしけなる聖あゆみまいる、そのしりに、餓鬼、畜生、虎、狼、犬、からす、萬の鳥獸なと、千万とあゆみつゝきてきけるを、こと人の目に大かたえみす、たゝひしりひとりとのみ見けるに、此おとゝ見付給て、されはこそいみしき聖にこそ有けれ、めてたしとおほえて、白米十石をおものにして、あたらしきむしろこもに、折敷、おけ、ひつなとに入て、いく〳〵とをきてくはせさせ給ふけれは、しりにたちたるもの共にくはすれは、あつまりて手をさゝけみなくひつ、聖はつゆくはてよろこひて出ぬ、されはこそたゝ人にはあらさりけり、佛なとのへんしてありき給にやとおほしけり、こと人の目には、たゝ聖ひとりしてくふとのみみえけれは、いとゝあさましき事におもひけり、さて出て行ほとに、四條の北なる小路にゑとをまる、此しりにくしたるものしちらしたれは、只墨のやうにくろきゑとをひまもなく、はる〳〵としちらしたれは、けすなともきたなかりて、その小路を糞の小路とつけたりけるを、帝(村上)聞せ給て、その四條の南をは、何といふと問せ給けれは、綾の小路となん申と申けれは、さらはこれをは錦の小路とい

師輔ノ靈冷泉天皇ヲ守護シ奉ルトノ說

へかし、あまりきたなきなかなと仰られけるよりしてそ、錦の小路とはいひける、

〔元亨四年具注曆裏書〕寬治七年十月十二日、戊剋大地震云々、昔冷泉院永延地震、早旦被仰云、池中嶋可立幄、爲渡御也、仍立幄、懸御簾、敷筵道、巳剋渡御、暫而大地震、遲出之人皆被厭(壓)伏、人々問申、院被仰云、今夜九條大臣(師輔)來申云、明日午剋可有地震、可御中嶋云々、仍所爲也、聞者涕泣、大臣靈奉守護、不離御身云々、○續古事談異事ナシ、

〔北山抄〕○前田家本

官奏事 北山抄、

南殿奏事　官東廊床子座

申一上事　勘文體

定文體　諸定類　觸穢類

神事類　佛事類　勅書類

件雜事等、訛謬多端、是則視聽之後、數年相隔、今纔所注出、是唯驚奢例許也、豈其爲憚說乎、先後倒措(錯カ)次第失序、努々力々不可披露、又不可施他若不爲事人者早可燒棄、

師輔兄實賴ト公事儀式ヲ互ニ練リ正ス

公事祕說小野宮九條兩流ヨリ出ヅ

兩流ノ口傳故實相異多シ

乘車ノ禮

師輔實賴ニ家禮ノ儀ヲ乘ル

□(作カ)事、小野宮大臣(實賴)、九條大臣兄弟之間、各挑公事儀式□事、遞被正紕謬、是則大閤貞信(忠平)公以上嫡々相傳、其故實觸色(其カ)多、其說至于口哨(マヽ)、大臣者傳而不失、彼大臣薨云之後、無敢傳知之人、只以正爲非、以非爲正々々(云カ)々、

〔江次第抄〕一元日宴會　小野宮流　貞信公一男攝政實賴公、號小野宮、二男右大臣師輔公、號九條殿、公事祕說出此兩流、

〔古今著聞集〕三公事　正朔の節會より、除夜の追儺にいたるまで、公事の禮一にあらず、おこなひきたる儀、まち〳〵にわかれたり、凡恒例臨時の大小事、西宮記、北山抄をもて、其龜鏡に備へたり、小野宮、九條殿の兩流、口傳故實そのかはりめおほく侍とかや、有職の家に習ひ傳へて、今は絕る事なし、

〔續古事談〕二臣節　民部卿大納言(源俊實)ト云人、宰相ニテ堀川(藤原顯光)ノ大臣ニミチニアヒニケリ、宰相小野宮ノ說ナリトテ、車ヲカケハツサス、タヽヲサヘヘリケレハ、大臣九條ノ說トテ、前ヲオロサレサリケリ、其後ハカケハツシケリトソ、

〔左經記〕長元元年五月五日、己亥、○略中又被語云、右(資業)府命云、小野宮殿兼著陣座之日、九條殿從敷政門不入給、是依思家禮云々、而故小一條大將濟時云、敷

實頼ノ子孫滅亡ヲ呪咀スト ノ說

師輔ト勤子內親王

政門是大臣道也、不依上﨟著否、皆從敷政門可參入也云々、

〔小右記〕正暦四年閏十月十四日、戊戌、觀修沙門來云、近書行(曾カ)東宮更衣(嬉子)○註略ス、修法、猛靈忽出來云、我是九條右丞相靈、存生之時、或□(修カ)佛事、或付外術、懇切致子孫繁昌之思、其願成就、就中小野宮(實頼)太相國子族可滅亡之願、彼時極深、施陰陽術欲斷彼子孫、所期先六十年、其驗已新、今依減(滅カ)他之思、受苦極重、拔苦無期、小野宮相國子孫產時、吾必向其所坊(妨カ)、此事依存生心願、先所期六十年、其遺不幾、彼時外術今二年許也、其後可難廻此妨術、又此更衣已有懷任(姙)氣、仍所來煩也、爲斷絕同胤云々、

〔後撰和歌集〕二十賀歌　西四條のみこの家の山にて、女四(勤子內親王)のみこのもとに、○九條右大臣集、詞書ヲにしの宮かはりて、山よりニ作ル、

右大臣

なみたてる松のみとりの枝わかすおりつゝちよをたれとかはみん○九條右大臣集同ジ

〔九條右大臣集〕四宮にまれにかよひ給ふこみ(マヽ)のあをすりをしてたてまつり給ふとて、

山ゐもてすれる衣のかひもなくけふさへみぬやなにの爲也

藤原貴子ト贈答ス

兵庫ト贈答ス

師輔トたひらけいこの內侍

師輔トこみやの內侍

うちの御おもひはてゝ內侍(藤原貴子)のかみに、

侘つゝも消にし宿にすむよりは出てかへり(わかれしイ)し道そかなしき○新千載和歌集同ジ、

返し

白雪のふりにしことをかけていへは袂にのみそ消てなかるゝ

秋のころ、兵庫に、

露ならぬ我身とおもへと秋のよをかくこそあかせおきゐなからに○後撰和歌集同ジ、

返し

秋をあさみまたふかからぬよをさへやたのみ(さ歟)は人のおきあかすらん

たひらけいこの內侍、きよみつなるいかゝのたまはせける、

內侍

忘らるゝつみはかりこそ深からめ清さ(永脫カ)へやはにこりしもせし

したのはかまぬはせ給けるこみやの內侍、

師輔ト内藏内侍

人しれす思ふ心のしるしにはゆふともとけよ君かしたひも（○四句ノ三字、新千載和歌集ヲ以テ補フ、新千載和歌集、三句ヲしるけれはニ作ル、とけよ）

〔續千載和歌集〕十七雑歌中　内藏内侍に遣しける、

大輔ト贈答ス

思ひやるほとのはるけき山里は袖露けくも成まさるかな（○九條右大臣）

集及ビ萬代和歌集同ジ、

〔後撰和歌集〕六秋歌中　大輔か後涼殿に侍けるに、藤つほより女郎花をおりてつかはしける、

右大臣

おりてみる袖さへぬるゝ女郎花露けき物と今やしるらん

大輔

返し

萬よにかゝらん露を女郎花なにおもふとかまたきぬるらん

右大臣

又

をきあかす露のよな〳〵へにけれはまたきぬるとも思はさりけり

大輔

返し

今ははや打ちとけぬへき白露の心をくまてよをやへにける

師輔ト右近

〔後撰和歌集〕九戀歌一　大輔につかはしける、

右大臣

色ふかくそめしたもとのいとゝしく涙にさへもこさまさるかな

〔新勅撰和歌集〕十四戀歌四　后宮の御方にさふらひける時、里に出侍とて、九條右大臣、頭少將に侍けるにつかはしける、

右近

あひみすは契りし程に思ひ出よそへつる玉の身にもはなたて

〔九條右大臣集〕さとへいつとて、右近君、

たましひは君かあたりにとめてきぬわすれぬ程におとろかせとて

右近につかはしける

思ひわひ君かつらきに立よらは雨も人めもゝらさゝらなん（○後撰和歌集同ジ、）

少貳命婦ト贈答ス

〔續後撰和歌集〕十三戀歌三　藏人頭に侍ける時、小貳の命婦につかはしける、

九條右大臣

秋の夜をまてとたのめし言の葉に今も懸れる露のはかなさ

〔九條右大臣集〕少貳のめのとのきこえたる、

影みえておほつかなきは鴎鳥のよふかくかよふほとにそ有ける　○萬代和歌集

同ジ、

返し

よひことにたつぬるものを鴎とりの跡こそみえね音をはきかすや

〔後撰和歌集〕十一戀歌三　院のやまとにあふきつかはすとて、　右大臣

おもひにはわれこそ入てまとはるれあやなく君やすゝしかるへき

〔九條右大臣集〕こゝろかはりたりとみて、衛門、○續後拾遺和歌集、よみ人しらす、萬代和歌集、女に

つかはしける、九條右大臣ニ作ル

うきにおふるあしのねにのみなかれつゝいきてよにふる心ち社せね　○續後拾遺和歌集同ジ、

返し

世のうきにおふるみくりのみかくれてなかるゝことは我もたえせす　○續後拾遺和歌集同ジ、

やまとニ扇ヲ贈ルニ

衛門ト贈答ス

きむきよかむすめたえ給て、女、

衣手のそほつるまてにしきたへの枕のちりをはらひつるかな

返し

人しれすくゆるけふりのたちいてゝはらふはかりはなりもしぬらん

なかつかさの君のもとより、○新勅撰和歌集、梅の花を折りて、中務かもとに遣しける、九條右大臣ニ作リ、中務集、人のひさしくおとつれぬに、正月一日ニ作ル、

いつそやも霜かれしかと我宿の梅をわすれぬ春はきにけり　○新勅撰和歌集、初句、二句ヲいと早も霜にかれにしニ作ル、

返し

かへし

わすらるゝはるゝことに梅花ねをとゝめてし人をゝしへよ

すけなりかむすめに、

秋のよのあけての後にくやしきは浦島か子の箱にや有らん

返し

ふりにける浦島のこにたとふれはかへりこしてよ心なりけり

富小路にゐし給ふ事ありて、さらにこしとて出給ふに、人々いみしく

天徳四年五月四日　七〇五

きむきよノ女ト贈答ス

中務ト贈答ス

すけなりノ女ト贈答ス

女ト贈答ス

なきて、櫻をはこのふたにいれて、殿の女房のもとに、

春風にまかせてもみぬわか袖のぬるゝかすにや花はちるらむ

五葉につけて、かへし、

春風にをしみもあへす散る花の匂ひをいかてまつととゝめぬ

人かよひ給ふときゝて、とみのこうちに、

秋萩の下にかよひし鹿のねも今はかけなくなりやしぬらん〇萬代和歌集

同ジ、續千載和歌集、四句ヲ今はかひなくニ作ル、

また

年毎に立ゆかれにしやまとうりのおなしたねとや名にはたつへき

〔新千載和歌集〕七離別歌　藤原のかね時、陸奥守になりて下けるに、はなむけ給ふとて、　九條右大臣

武隈の松は幾世か經にけると年をかそへて歸りあはなむ

〔九條右大臣集〕美作にくたる人に、御なほしたまふとて、

あはれてふ心には□のしくれて空にも秋の色をぬくかな

藤原兼時ノ陸奥ニ赴任スルヲ餞ス

美作ニ赴ク人ニ直衣ヲ贈ル

かへし

うれしきにあまるなみたのこほるゝは廣き袂もかひなかりけり

〔秦箏相承血脈〕

重明親王

右大臣師輔　貞信公二男、母右大臣能有女、

太政大臣爲光

〔九條右大臣集〕とのふえふき給ひて、

ふくふえのいきつくほとを聲絶て久しくなると恨みさらなん

〔二中歷〕十二倭歌歷　歌人

拾遺抄歌人　九條大臣

〔和歌色葉集〕上二　六名譽歌仙者

集打聞に入たる歌よみは多かれ共、宗と覺たかきは四百五十七人なり、〇中略

大臣四十三人付贈官、

後撰、拾遺、九條右大臣師輔、同二男、（貞信公）

箏ヲ重明親王ニ習フ

歌人

名譽ノ歌仙

歌什

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　九條右大臣正二位師輔公、藤原貞信公男、後撰集秋中、三、戀三、二、雜一、拾遺集賀、一、戀一、新古今集戀三、新勅撰集春上、一、戀二、一、雜三、一、賀、一、哀、大、右大臣、戀四、一、雜三、一、續後撰集戀一、一、戀三、新千載集秋上、一、雜中、戀一、一、戀四、一、哀、一、新續古今集別、一、哀、一、〔古官庫歌書目錄〕勅封五十九番之六〇京都御所東山御文庫記錄甲二百十四所收　古春御擔子　一冊

著書

九條右丞相集

九條右丞相集　一卷　九條師輔撰

年中行事

〔本朝書籍目錄〕公事　年中行事　一、正月甲　九條年中行事　九條右大臣御撰也、按、四方拜次第兩說不同、皆非無據、然近來猶用內裏式、但九條年中行事者、彼式以後出來之書也、定又有勝義歟、

〔河海抄〕十八早厥　かゝる瀨もありける物をとまり居て身を宇治川とおもひけるかな　九條右大臣集、

〔近衛文書〕三（端裏書）目錄

一合（殿○中略）

九條殿口傳二卷（○中略）

永久五年二月十日

〔小右記〕寬仁四年八月十八日、丁酉、（○中略）關白（頼通）使木工頭輔尹被命云、任大臣後、可奉朝服、笏、封等鹿島、香取云々、式云、可奉裝束者、尋入道殿例、無一枚文書、忽無知其事之者、（○中略）令申云、（○中略）但九條殿承貞信公教所被注置之口傳、大略所見也、

〔小野宮故實舊例〕九條殿口傳（如是敎命時々雖承、愚拙之身、自以忘失歟、但至于承覺、略書之、）

節會日、若御簾懸、內辨大臣諸奏事、參進御下（脫カ）令內侍奏之、（御酒勅使、見參、宣命等文類、）但御酒勅使事、堂上巡行三度之後可申行、或依黃昏景傾、一獻、若二獻之後被行、見參等文付內侍後、內辨大臣立東第三柱本、御覽之後返賜、下堂召外記賜、揷書杖見參宣命等文、取副笏參上著座、須召兩參議、給二枚文、（常如此、爲後見參、）前宣命、爲

一節會日、儀未畢前、前皇帝（行カ）若還御本殿、內辨大臣參進御殿、付藏人令奏、（但御使事、不奏而行、）

一節會日、堂上巡行三巡之後、內辨大臣奏事由後、召參議一人、稱唯、進立內辨後、仰云、大夫達御酒給、參議稱唯、下從東階召外記、問爲勅使之人、而後昇自同階、從南簀子西行、立東第二柱西方、召仰事由、著本座、

一節會若旬、臨時宴會、親王召采女獻御酒、其儀、堂(當日歟)上卿先奏事由、親王召采女等、二聲、卽采女擎御盞、參進立御前、(脫アラン)親王座前、跪唱平皇帝御酒聞食了、卽親王經座西妻下、自南階南階頗緣東方拜舞、昇東階座著、事見酒式、

一節會若臨時宴會日、左右大將不參、而有宰相中將者、稱警蹕、雖大臣不得稱、

〔北山抄〕九羽林要抄裏書　左右大將分南階東西事

九條殿大將儀抄云、

行幸日、天皇御南殿、御輿候日華門內橋前之間、左右大將各立南階、〇略下

〔北山抄〕一四月年中要抄上入日灌佛事　膝行灌佛一杓、安杓退、而禮佛一度、把笏左廻、出自初間、〇略中又入自南間、出自北間、是彼九條記爲令劒不當柱云々、而彼年中行事及年々私記無所見、

〔諸家名記〕或九記　九曆　右大臣師輔(實頼)清愼公弟、九條右丞相、又坊城大殿、

〔權記〕長保四年正月廿八日、甲子、〇略中依內府(公季)御消息、持詣九條殿天曆四年御日記上卷、

寬弘六年三月一日、丙辰、〇略中參內、與頭辨同車、奉左(遣ヵ)府故九條殿御日記十二卷、依先日命令書寫也、

〔左經記〕長元元年二月二日、丁卯、〇略中入夜在故大納言(行成)御許九條殿御曆日記廿八卷、從承平元年至于天德四年云々、奉關白殿、是大納言自筆也、誠祕藏者也、

〔後二條師通記〕寬治四年十一月十二日、壬申、天陰、九條殿御日記書寫了、件本書、以人返上之云々、

同六年九月二日、壬午、〇略中秉燭仲實朝臣宮內少輔(頃實)來、殿爲御使、消息云、九條殿御曆記辛櫃二合本書、新書所下給也、新書大納言手跡也、書札進上之、

三日、癸未、〇略中令隆宗朝臣向左大辨許、故右府御許九條殿御曆四卷候由、令啓也、

十月十四日、癸亥、

(頭書)九條殿御日記於燈下一見了、所々有推帋云々、

〔中外抄〕上久安四年五月廿三日、〇略中仰云、〇略中さて日記を不可祕也、小(實錄)野宮關白ハ依密日記無子孫、九條殿ハ依不令密日記ゑせ物也、其事ハ某事のみ有と令書給たる故也、部類抄ハいみしき物也、

行成書寫九條殿日記十二卷
同書寫ノ曆日記二十八卷
師通書寫ノ曆日記
師輔日記ヲ祕セズ
九條大將儀抄
九條記年々私記
九曆

天德四年五月四日

〔中右記〕元永二年八月廿二日、今朝以俊兼、日記四十一卷、返送前兵衛佐顯仲朝臣許也、件日記九條殿部類、十四卷、西宮記、十一卷、北山抄、十卷、此外部類記六卷、合四十一卷也、以此書、小野宮大臣（實資）日記放與之由、以無實披露世間、仍所返送也、

長承三年正月十三日、○略中此曉、夢披見九條殿御記、至和歌所與人（ヤ）も披續（讀カ）由所見也、見先祖御記、定吉夢歟、

〔宇槐記抄〕久安四年正月一日、庚申、○略中勘年々吏部記、九記、部類、正月三節元日、十六日略樂無所見、

〔九條殿記〕（一題德）○家本九條殿御記　部類、年中行事

（内題）年中行事二

（奥書）自校了、

（二題潤）九條殿御記

（奥書）校了、

（三題養）九條殿御記　年中行事

（内題）年中行事

此外題云九條殿別記ト有之、是師輔公乎

（奥書）校了、

此記者前右丞相師輔公御記乎、祕藏々々、

從一位藤原朝臣兼孝

〔記錄異同考〕（キ部之）九曆

九曆（九條右丞相之記）

天曆元（春、四月、五月、七月、七月、閏四月、九月、十一月、）同二（春、夏、秋、冬、）同三（春、四月、六月、秋、冬、）同四（春、四月、）天德元（正月、三月、）同二（春、夏、秋、冬、）同三（春、四月、秋、冬、）同四（春、四月、六月、秋、冬、）

九曆（近衛家本）

承平六（九月一日、廿一日、十月廿一日、）天慶元（二月七日、廿四日、三月廿二日、）同六（三月五日、廿日、四月四日、十六日、）同七（九月十四日、十月三日、九日、十一日、閏十二月九日、）

九條殿記（部類年中行事　九條家本）

一中宮大饗　天曆三（正月五日、）

東宮大饗　天曆七（正月二日、）

三卷

大臣大饗　承平二正月四日、同三正月四日、同四正月四日、同五正月四日、同六正月四日、同七正月十一日、天慶元正月四日、五日、同二正月四日、同三正月四日、同四正月四日、五日、同五正月五日、同六正月十日、同七正月十日、同八正月五日、同九正月五日、天曆二正月四日、五日、同三正月十一日、十二日、同五正月十四日、十五日、同七正月四日、五日、天德元正月五日、十四日、同四正月十一日、十二日、

二五月節　天慶七正月廿四日、廿五日、廿八日、二月四日、五日、七日、八日、廿七日、三月二日、四日、七日、五月三日、五日、六日、

駒牽　承平三九月七日、同七八月廿四日、廿八日、天慶元九月七日、同三九月十三日、同五九月二日、十三日、同七九月十四日、十五日、

菊花宴　天曆四十月八日、同五十月五日、

殿上菊合　天曆七十月廿八日、

三奏成選短冊事

擬階奏　承平六四月七日、

灌佛　承平六四月八日、

奏御曆事　承平五十一月一日、

御躰御卜　延喜十五十二月廿四日、延長二十二月廿六日、同三十二月廿九日、承平五十二月十日、同六六月廿四日、天曆三五月廿七日、六月十日、

大祓　天慶二六月廿八日、

荷前付東宮荷前　承平五十二月廿五日、同六十二月十六日、同七十二月廿三日、同八十二月廿四日、

天慶二十二月十八日、同三十二月廿四日、同四十二月廿一日、同五十二月廿一日、

同六十二月廿六日、同七閏十二月二日、同八十二月廿日、同九十二月廿日、

天曆元十二月十六日、十七日、十三日、十九日、十四日、廿日、同四十二月十二日、

左ニ掲グルハ、前ニ收メタル書ノ年記ト同ジキハ略シ、異レルモノノミヲ擧グ、

九條右丞相日記仁和寺記錄十八所收眞俗雜聞集所載、

延長八八月十七日、

九記、又云九條記、西宮記所載、史籍集覽本ヲ以テ本トナシ、前田家本ヲ以テ補フ、

承平元四月廿一日、閏五月廿七日、廿九日、十一月十二日、同四正月十一日、三月廿一日、同五正月廿四日、七月廿八日、廿九日、

同六七月廿八日、同七正月十八日、十九日、廿二日、廿六日、三月廿八日、四月廿三日、十二月

一日、二日、天慶元正月十八日、廿三日、廿四日、三月六日、四月廿一日、五月七日、廿五日、七月廿一日、同二正月十七日、二月廿一日、

三月廿三日、四月一日、二日、
七日、六月廿日、十二月一日、
八日、十日、

同四年七月十八日、

同五年正月八日、二月十二日、十七日、廿六日、四月八日、廿八日、七月七日、九日、十六日、廿三日、

同二年正月五日、七日、十七日、廿一日、八日、十三日、十六日、廿三日、

同三年二月一日、五月十一日、七月廿一日、十二月一日、

同四年正月七日、十八日、九月三日、十四日、十五日、

同五年正月十七日、八日、十三日、

同六年正月七日、六月十二日、

同七年正月七日、十八日、六月十二日、

同八年正月二日、四日、七日、十三日、四月二日、七日、十三日、十四日、十七日、十二月十四日、二日、

同九年正月二日、八日、十四日、

同十年正月十二日、八日、二月十三日、

同十一年正月十一日、二月十一日、

同十二年正月十一日、二月十一日、

同十三年正月十一日、二月十一日、

同十四年正月十一日、二月十一日、

同十五年正月十一日、二月十一日、

同十六年正月十一日、二月十一日、

同十七年正月十一日、二月十一日、

同十八年正月十一日、二月十一日、

同十九年正月十一日、二月十一日、

同二十年正月十一日、二月十一日、

同廿一年正月十一日、二月十一日、

同廿二年正月十一日、二月十一日、

同廿三年正月十一日、二月十一日、

同廿四年正月十一日、二月十一日、

同廿五年正月十一日、二月十一日、

同廿六年正月十一日、二月十一日、

同廿七年正月十一日、二月十一日、

同廿八年正月十一日、二月十一日、

同廿九年正月十一日、二月十一日、

同三十年正月十一日、二月十一日、

同卅一年正月十一日、二月十一日、

同卅二年正月十一日、二月十一日、

同卅三年正月十一日、二月十一日、

同卅四年正月十一日、二月十一日、

同卅五年正月十一日、二月十一日、

同卅六年正月十一日、二月十一日、

同卅七年正月十一日、二月十一日、

同卅八年正月十一日、二月十一日、

同卅九年正月十一日、二月十一日、

同四十年正月十一日、二月十一日、

同四十一年正月十一日、二月十一日、

同四十二年正月十一日、二月十一日、

同四十三年正月十一日、二月十一日、

同四十四年正月十一日、二月十一日、

同四十五年正月十一日、二月十一日、

同四十六年正月十一日、二月十一日、

同四十七年正月十一日、二月十一日、

同四十八年正月十一日、二月十一日、

同四十九年正月十一日、二月十一日、

同五十年正月十一日、二月十一日、

同五十一年正月十一日、二月十一日、

同五十二年正月十一日、二月十一日、

同五十三年正月十一日、二月十一日、

同五十四年正月十一日、二月十一日、

同五十五年正月十一日、二月十一日、

同五十六年正月十一日、二月十一日、

同五十七年正月十一日、二月十一日、

同五十八年正月十一日、二月十一日、

同五十九年正月十一日、二月十一日、

同六十年正月十一日、二月十一日、

同六十一年正月十一日、二月十一日、

同六十二年正月十一日、二月十一日、

同六十三年正月十一日、二月十一日、

同六十四年正月十一日、二月十一日、

同六十五年正月十一日、二月十一日、

同六十六年正月十一日、二月十一日、

同六十七年正月十一日、二月十一日、

同六十八年正月十一日、二月十一日、

同六十九年正月十一日、二月十一日、

同七十年正月十一日、二月十一日、

同七十一年正月十一日、二月十一日、

同七十二年正月十一日、二月十一日、

同七十三年正月十一日、二月十一日、

同七十四年正月十一日、二月十一日、

同七十五年正月十一日、二月十一日、

同七十六年正月十一日、二月十一日、

同七十七年正月十一日、二月十一日、

同七十八年正月十一日、二月十一日、

同七十九年正月十一日、二月十一日、

同八十年正月十一日、二月十一日、

同八十一年正月十一日、二月十一日、

同八十二年正月十一日、二月十一日、

同八十三年正月十一日、二月十一日、

同八十四年正月十一日、二月十一日、

同八十五年正月十一日、二月十一日、

同八十六年正月十一日、二月十一日、

同八十七年正月十一日、二月十一日、

同八十八年正月十一日、二月十一日、

同八十九年正月十一日、二月十一日、

同九十年正月十一日、二月十一日、

同九十一年正月十一日、二月十一日、

同九十二年正月十一日、二月十一日、

同九十三年正月十一日、二月十一日、

同九十四年正月十一日、二月十一日、

同九十五年正月十一日、二月十一日、

同九十六年正月十一日、二月十一日、

同九十七年正月十一日、二月十一日、

同九十八年正月十一日、二月十一日、

同九十九年正月十一日、二月十一日、

同百年正月十一日、二月十一日、

同百一年正月十一日、二月十一日、

同百二年正月十一日、二月十一日、

同百三年正月十一日、二月十一日、

同百四年正月十一日、二月十一日、

同百五年正月十一日、二月十一日、

同百六年正月十一日、二月十一日、

同百七年正月十一日、二月十一日、

同百八年正月十一日、二月十一日、

同百九年正月十一日、二月十一日、

同百十年正月十一日、二月十一日、

同百十一年正月十一日、二月十一日、

同百十二年正月十一日、二月十一日、

同百十三年正月十一日、二月十一日、

同百十四年正月十一日、二月十一日、

同百十五年正月十一日、二月十一日、

同百十六年正月十一日、二月十一日、

同百十七年正月十一日、二月十一日、

同百十八年正月十一日、二月十一日、

同百十九年正月十一日、二月十一日、

同百二十年正月十一日、二月十一日、

同百廿一年正月十一日、二月十一日、

同百廿二年正月十一日、二月十一日、

同百廿三年正月十一日、二月十一日、

同百廿四年正月十一日、二月十一日、

同百廿五年正月十一日、二月十一日、

同百廿六年正月十一日、二月十一日、

同百廿七年正月十一日、二月十一日、

同百廿八年正月十一日、二月十一日、

同百廿九年正月十一日、二月十一日、

同百三十年正月十一日、二月十一日、

同百三十一年正月十一日、二月十一日、

同百三十二年正月十一日、二月十一日、

同百三十三年正月十一日、二月十一日、

同百三十四年正月十一日、二月十一日、

同百三十五年正月十一日、二月十一日、

同百三十六年正月十一日、二月十一日、

同百三十七年正月十一日、二月十一日、

同百三十八年正月十一日、二月十一日、

同百三十九年正月十一日、二月十一日、

同百四十年正月十一日、二月十一日、

同百四十一年正月十一日、二月十一日、

同百四十二年正月十一日、二月十一日、

同百四十三年正月十一日、二月十一日、

同百四十四年正月十一日、二月十一日、

同百四十五年正月十一日、二月十一日、

同百四十六年正月十一日、二月十一日、

同百四十七年正月十一日、二月十一日、

同百四十八年正月十一日、二月十一日、

同百四十九年正月十一日、二月十一日、

同百五十年正月十一日、二月十一日、

同百五十一年正月十一日、二月十一日、

同百五十二年正月十一日、二月十一日、

同百五十三年正月十一日、二月十一日、

同百五十四年正月十一日、二月十一日、

同百五十五年正月十一日、二月十一日、

同百五十六年正月十一日、二月十一日、

同百五十七年正月十一日、二月十一日、

同百五十八年正月十一日、二月十一日、

同百五十九年正月十一日、二月十一日、

同百六十年正月十一日、二月十一日、

同百六十一年正月十一日、二月十一日、

同百六十二年正月十一日、二月十一日、

同百六十三年正月十一日、二月十一日、

同百六十四年正月十一日、二月十一日、

同百六十五年正月十一日、二月十一日、

同百六十六年正月十一日、二月十一日、

同百六十七年正月十一日、二月十一日、

同百六十八年正月十一日、二月十一日、

同百六十九年正月十一日、二月十一日、

同百七十年正月十一日、二月十一日、

同百七十一年正月十一日、二月十一日、

同百七十二年正月十一日、二月十一日、

同百七十三年正月十一日、二月十一日、

同百七十四年正月十一日、二月十一日、

同百七十五年正月十一日、二月十一日、

同百七十六年正月十一日、二月十一日、

同百七十七年正月十一日、二月十一日、

同百七十八年正月十一日、二月十一日、

同百七十九年正月十一日、二月十一日、

同百八十年正月十一日、二月十一日、

同百八十一年正月十一日、二月十一日、

同百八十二年正月十一日、二月十一日、

同百八十三年正月十一日、二月十一日、

同百八十四年正月十一日、二月十一日、

同百八十五年正月十一日、二月十一日、

同百八十六年正月十一日、二月十一日、

同百八十七年正月十一日、二月十一日、

同百八十八年正月十一日、二月十一日、

同百八十九年正月十一日、二月十一日、

同百九十年正月十一日、二月十一日、

同百九十一年正月十一日、二月十一日、

同百九十二年正月十一日、二月十一日、

同百九十三年正月十一日、二月十一日、

同百九十四年正月十一日、二月十一日、

同百九十五年正月十一日、二月十一日、

同百九十六年正月十一日、二月十一日、

同百九十七年正月十一日、二月十一日、

同百九十八年正月十一日、二月十一日、

同百九十九年正月十一日、二月十一日、

同二百年正月十一日、二月十一日、

同二百一年正月十一日、二月十一日、

同二百二年正月十一日、二月十一日、

同二百三年正月十一日、二月十一日、

同二百四年正月十一日、二月十一日、

同二百五年正月十一日、二月十一日、

同二百六年正月十一日、二月十一日、

同二百七年正月十一日、二月十一日、

同二百八年正月十一日、二月十一日、

同二百九年正月十一日、二月十一日、

同二百十年正月十一日、二月十一日、

同二百十一年正月十一日、二月十一日、

同二百十二年正月十一日、二月十一日、

同二百十三年正月十一日、二月十一日、

同二百十四年正月十一日、二月十一日、

同二百十五年正月十一日、二月十一日、

同二百十六年正月十一日、二月十一日、

同二百十七年正月十一日、二月十一日、

同二百十八年正月十一日、二月十一日、

同二百十九年正月十一日、二月十一日、

同二百二十年正月十一日、二月十一日、

同二百廿一年正月十一日、二月十一日、

同二百廿二年正月十一日、二月十一日、

同二百廿三年正月十一日、二月十一日、

同二百廿四年正月十一日、二月十一日、

同二百廿五年正月十一日、二月十一日、

同二百廿六年正月十一日、二月十一日、

同二百廿七年正月十一日、二月十一日、

同二百廿八年正月十一日、二月十一日、

同二百廿九年正月十一日、二月十一日、

同三百年正月十一日、二月十一日、

同三百一年正月十一日、二月十一日、

同三百二年正月十一日、二月十一日、

同三百三年正月十一日、二月十一日、

同三百四年正月十一日、二月十一日、

同三百五年正月十一日、二月十一日、

同三百六年正月十一日、二月十一日、

同三百七年正月十一日、二月十一日、

同三百八年正月十一日、二月十一日、

同三百九年正月十一日、二月十一日、

同三百十年正月十一日、二月十一日、

同三百十一年正月十一日、二月十一日、

同三百十二年正月十一日、二月十一日、

同三百十三年正月十一日、二月十一日、

同三百十四年正月十一日、二月十一日、

同三百十五年正月十一日、二月十一日、

同三百十六年正月十一日、二月十一日、

同三百十七年正月十一日、二月十一日、

同三百十八年正月十一日、二月十一日、

同三百十九年正月十一日、二月十一日、

同四百年正月十一日、二月十一日、

同四百一年正月十一日、二月十一日、

同四百二年正月十一日、二月十一日、

同四百三年正月十一日、二月十一日、

同四百四年正月十一日、二月十一日、

同四百五年正月十一日、二月十一日、

同四百六年正月十一日、二月十一日、

同四百七年正月十一日、二月十一日、

同四百八年正月十一日、二月十一日、

同四百九年正月十一日、二月十一日、

同四百十年正月十一日、二月十一日、

同四百十一年正月十一日、二月十一日、

同四百十二年正月十一日、二月十一日、

同四百十三年正月十一日、二月十一日、

同四百十四年正月十一日、二月十一日、

同四百十五年正月十一日、二月十一日、

同四百十六年正月十一日、二月十一日、

同四百十七年正月十一日、二月十一日、

同四百十八年正月十一日、二月十一日、

同四百十九年正月十一日、二月十一日、

同五百年正月十一日、二月十一日、

同五百一年正月十一日、二月十一日、

同五百二年正月十一日、二月十一日、

同五百三年正月十一日、二月十一日、

同五百四年正月十一日、二月十一日、

同五百五年正月十一日、二月十一日、

同五百六年正月十一日、二月十一日、

同五百七年正月十一日、二月十一日、

同五百八年正月十一日、二月十一日、

同五百九年正月十一日、二月十一日、

同五百十年正月十一日、二月十一日、

同五百十一年正月十一日、二月十一日、

同五百十二年正月十一日、二月十一日、

同五百十三年正月十一日、二月十一日、

同五百十四年正月十一日、二月十一日、

同五百十五年正月十一日、二月十一日、

同五百十六年正月十一日、二月十一日、

同五百十七年正月十一日、二月十一日、

同五百十八年正月十一日、二月十一日、

同五百十九年正月十一日、二月十一日、

同六百年正月十一日、二月十一日、

同六百一年正月十一日、二月十一日、

同六百二年正月十一日、二月十一日、

同六百三年正月十一日、二月十一日、

同六百四年正月十一日、二月十一日、

同六百五年正月十一日、二月十一日、

同六百六年正月十一日、二月十一日、

同六百七年正月十一日、二月十一日、

同六百八年正月十一日、二月十一日、

同六百九年正月十一日、二月十一日、

同六百十年正月十一日、二月十一日、

同六百十一年正月十一日、二月十一日、

同六百十二年正月十一日、二月十一日、

同六百十三年正月十一日、二月十一日、

同六百十四年正月十一日、二月十一日、

同六百十五年正月十一日、二月十一日、

同六百十六年正月十一日、二月十一日、

同六百十七年正月十一日、二月十一日、

同六百十八年正月十一日、二月十一日、

同六百十九年正月十一日、二月十一日、

同七百年正月十一日、二月十一日、

同七百一年正月十一日、二月十一日、

同七百二年正月十一日、二月十一日、

同七百三年正月十一日、二月十一日、

同七百四年正月十一日、二月十一日、

同七百五年正月十一日、二月十一日、

同七百六年正月十一日、二月十一日、

同七百七年正月十一日、二月十一日、

同七百八年正月十一日、二月十一日、

同七百九年正月十一日、二月十一日、

同七百十年正月十一日、二月十一日、

同七百十一年正月十一日、二月十一日、

同七百十二年正月十一日、二月十一日、

同七百十三年正月十一日、二月十一日、

同七百十四年正月十一日、二月十一日、

同七百十五年正月十一日、二月十一日、

同七百十六年正月十一日、二月十一日、

同七百十七年正月十一日、二月十一日、

同七百十八年正月十一日、二月十一日、

同七百十九年正月十一日、二月十一日、

同八百年正月十一日、二月十一日、

同八百一年正月十一日、二月十一日、

同八百二年正月十一日、二月十一日、

同八百三年正月十一日、二月十一日、

同八百四年正月十一日、二月十一日、

同八百五年正月十一日、二月十一日、

同八百六年正月十一日、二月十一日、

同八百七年正月十一日、二月十一日、

同八百八年正月十一日、二月十一日、

同八百九年正月十一日、二月十一日、

同八百十年正月十一日、二月十一日、

同八百十一年正月十一日、二月十一日、

同八百十二年正月十一日、二月十一日、

同八百十三年正月十一日、二月十一日、

同八百十四年正月十一日、二月十一日、

同八百十五年正月十一日、二月十一日、

同八百十六年正月十一日、二月十一日、

同八百十七年正月十一日、二月十一日、

同八百十八年正月十一日、二月十一日、

同八百十九年正月十一日、二月十一日、

同九百年正月十一日、二月十一日、

同九百一年正月十一日、二月十一日、

同九百二年正月十一日、二月十一日、

同九百三年正月十一日、二月十一日、

同九百四年正月十一日、二月十一日、

同九百五年正月十一日、二月十一日、

同九百六年正月十一日、二月十一日、

同九百七年正月十一日、二月十一日、

同九百八年正月十一日、二月十一日、

同九百九年正月十一日、二月十一日、

同九百十年正月十一日、二月十一日、

同九百十一年正月十一日、二月十一日、

同九百十二年正月十一日、二月十一日、

同九百十三年正月十一日、二月十一日、

同九百十四年正月十一日、二月十一日、

同九百十五年正月十一日、二月十一日、

同九百十六年正月十一日、二月十一日、

同九百十七年正月十一日、二月十一日、

同九百十八年正月十一日、二月十一日、

同九百十九年正月十一日、二月十一日、

同千年正月十一日、二月十一日、

同千一年正月十一日、二月十一日、

同千二年正月十一日、二月十一日、

同千三年正月十一日、二月十一日、

同千四年正月十一日、二月十一日、

同千五年正月十一日、二月十一日、

同千六年正月十一日、二月十一日、

同千七年正月十一日、二月十一日、

同千八年正月十一日、二月十一日、

同千九年正月十一日、二月十一日、

同千十年正月十一日、二月十一日、

同千十一年正月十一日、二月十一日、

同千十二年正月十一日、二月十一日、

同千十三年正月十一日、二月十一日、

同千十四年正月十一日、二月十一日、

同千十五年正月十一日、二月十一日、

同千十六年正月十一日、二月十一日、

同千十七年正月十一日、二月十一日、

同千十八年正月十一日、二月十一日、

同千十九年正月十一日、二月十一日、

同千二十年正月十一日、二月十一日、

同千廿一年正月十一日、二月十一日、

同千廿二年正月十一日、二月十一日、

同千廿三年正月十一日、二月十一日、

同千廿四年正月十一日、二月十一日、

同千廿五年正月十一日、二月十一日、

同千廿六年正月十一日、二月十一日、

同千廿七年正月十一日、二月十一日、

同千廿八年正月十一日、二月十一日、

同千廿九年正月十一日、二月十一日、

同千三十年正月十一日、二月十一日、

同千三十一年正月十一日、二月十一日、

同千三十二年正月十一日、二月十一日、

同千三十三年正月十一日、二月十一日、

同千三十四年正月十一日、二月十一日、

同千三十五年正月十一日、二月十一日、

同千三十六年正月十一日、二月十一日、

同千三十七年正月十一日、二月十一日、

同千三十八年正月十一日、二月十一日、

同千三十九年正月十一日、二月十一日、

同千四十年正月十一日、二月十一日、

同千四十一年正月十一日、二月十一日、

同千四十二年正月十一日、二月十一日、

同千四十三年正月十一日、二月十一日、

同千四十四年正月十一日、二月十一日、

同千四十五年正月十一日、二月十一日、

同千四十六年正月十一日、二月十一日、

同千四十七年正月十一日、二月十一日、

同千四十八年正月十一日、二月十一日、

同千四十九年正月十一日、二月十一日、

同千五十年正月十一日、二月十一日、

同千五十一年正月十一日、二月十一日、

同千五十二年正月十一日、二月十一日、

同千五十三年正月十一日、二月十一日、

同千五十四年正月十一日、二月十一日、

同千五十五年正月十一日、二月十一日、

同千五十六年正月十一日、二月十一日、

同千五十七年正月十一日、二月十一日、

同千五十八年正月十一日、二月十一日、

同千五十九年正月十一日、二月十一日、

同千六十年正月十一日、二月十一日、

同千六十一年正月十一日、二月十一日、

同千六十二年正月十一日、二月十一日、

同千六十三年正月十一日、二月十一日、

同千六十四年正月十一日、二月十一日、

同千六十五年正月十一日、二月十一日、

同千六十六年正月十一日、二月十一日、

同千六十七年正月十一日、二月十一日、

同千六十八年正月十一日、二月十一日、

同千六十九年正月十一日、二月十一日、

同千七十年正月十一日、二月十一日、

同千七十一年正月十一日、二月十一日、

同千七十二年正月十一日、二月十一日、

同千七十三年正月十一日、二月十一日、

同千七十四年正月十一日、二月十一日、

同千七十五年正月十一日、二月十一日、

同千七十六年正月十一日、二月十一日、

同千七十七年正月十一日、二月十一日、

同千七十八年正月十一日、二月十一日、

同千七十九年正月十一日、二月十一日、

同八千年正月十一日、二月十一日、

同八千一年正月十一日、二月十一日、

同八千二年正月十一日、二月十一日、

同八千三年正月十一日、二月十一日、

同八千四年正月十一日、二月十一日、

同八千五年正月十一日、二月十一日、

同八千六年正月十一日、二月十一日、

同八千七年正月十一日、二月十一日、

同八千八年正月十一日、二月十一日、

同八千九年正月十一日、二月十一日、

同八千十年正月十一日、二月十一日、

同八千十一年正月十一日、二月十一日、

同八千十二年正月十一日、二月十一日、

同八千十三年正月十一日、二月十一日、

同八千十四年正月十一日、二月十一日、

同八千十五年正月十一日、二月十一日、

同八千十六年正月十一日、二月十一日、

同八千十七年正月十一日、二月十一日、

同八千十八年正月十一日、二月十一日、

同八千十九年正月十一日、二月十一日、

同九千年正月十一日、二月十一日、

同九千一年正月十一日、二月十一日、

同九千二年正月十一日、二月十一日、

同九千三年正月十一日、二月十一日、

同九千四年正月十一日、二月十一日、

同九千五年正月十一日、二月十一日、

同九千六年正月十一日、二月十一日、

同九千七年正月十一日、二月十一日、

同九千八年正月十一日、二月十一日、

同九千九年正月十一日、二月十一日、

同一万年正月十一日、二月十一日、

同一万一年正月十一日、二月十一日、

同一万二年正月十一日、二月十一日、

同一万三年正月十一日、二月十一日、

同一万四年正月十一日、二月十一日、

同一万五年正月十一日、二月十一日、

同一万六年正月十一日、二月十一日、

同一万七年正月十一日、二月十一日、

同一万八年正月十一日、二月十一日、

同一万九年正月十一日、二月十一日、

同二万年正月十一日、二月十一日、

同二万一年正月十一日、二月十一日、

同二万二年正月十一日、二月十一日、

同二万三年正月十一日、二月十一日、

同二万四年正月十一日、二月十一日、

同二万五年正月十一日、二月十一日、

同二万六年正月十一日、二月十一日、

同二万七年正月十一日、二月十一日、

同二万八年正月十一日、二月十一日、

同二万九年正月十一日、二月十一日、

同三万年正月十一日、二月十一日、

同三万一年正月十一日、二月十一日、

同三万二年正月十一日、二月十一日、

同三万三年正月十一日、二月十一日、

同三万四年正月十一日、二月十一日、

同三万五年正月十一日、二月十一日、

同三万六年正月十一日、二月十一日、

同三万七年正月十一日、二月十一日、

同三万八年正月十一日、二月十一日、

同三万九年正月十一日、二月十一日、

同四万年正月十一日、二月十一日、

同四万一年正月十一日、二月十一日、

同四万二年正月十一日、二月十一日、

同四万三年正月十一日、二月十一日、

同四万四年正月十一日、二月十一日、

同四万五年正月十一日、二月十一日、

同四万六年正月十一日、二月十一日、

同四万七年正月十一日、二月十一日、

同四万八年正月十一日、二月十一日、

同四万九年正月十一日、二月十一日、

同五万年正月十一日、二月十一日、

同五万一年正月十一日、二月十一日、

同五万二年正月十一日、二月十一日、

同五万三年正月十一日、二月十一日、

同五万四年正月十一日、二月十一日、

同五万五年正月十一日、二月十一日、

同五万六年正月十一日、二月十一日、

同五万七年正月十一日、二月十一日、

同五万八年正月十一日、二月十一日、

同五万九年正月十一日、二月十一日、

同六万年正月十一日、二月十一日、

同六万一年正月十一日、二月十一日、

同六万二年正月十一日、二月十一日、

同六万三年正月十一日、二月十一日、

同六万四年正月十一日、二月十一日、

同六万五年正月十一日、二月十一日、

同六万六年正月十一日、二月十一日、

同六万七年正月十一日、二月十一日、

同六万八年正月十一日、二月十一日、

同六万九年正月十一日、二月十一日、

同七万年正月十一日、二月十一日、

同七万一年正月十一日、二月十一日、

同七万二年正月十一日、二月十一日、

同七万三年正月十一日、二月十一日、

同七万四年正月十一日、二月十一日、

同七万五年正月十一日、二月十一日、

同七万六年正月十一日、二月十一日、

同七万七年正月十一日、二月十一日、

同七万八年正月十一日、二月十一日、

同七万九年正月十一日、二月十一日、

同八万年正月十一日、二月十一日、

同八万一年正月十一日、二月十一日、

同八万二年正月十一日、二月十一日、

同八万三年正月十一日、二月十一日、

同八万四年正月十一日、二月十一日、

同八万五年正月十一日、二月十一日、

同八万六年正月十一日、二月十一日、

同八万七年正月十一日、二月十一日、

同八万八年正月十一日、二月十一日、

同八万九年正月十一日、二月十一日、

同九万年正月十一日、二月十一日、

同九万一年正月十一日、二月十一日、

同九万二年正月十一日、二月十一日、

同九万三年正月十一日、二月十一日、

同九万四年正月十一日、二月十一日、

同九万五年正月十一日、二月十一日、

同九万六年正月十一日、二月十一日、

同九万七年正月十一日、二月十一日、

同九万八年正月十一日、二月十一日、

同九万九年正月十一日、二月十一日、

同十万年正月十一日、二月十一日、

同十万一年正月十一日、二月十一日、

同十万二年正月十一日、二月十一日、

同十万三年正月十一日、二月十一日、

同十万四年正月十一日、二月十一日、

同十万五年正月十一日、二月十一日、

同十万六年正月十一日、二月十一日、

同十万七年正月十一日、二月十一日、

同十万八年正月十一日、二月十一日、

同十万九年正月十一日、二月十一日、

同廿万年正月十一日、二月十一日、

同廿万一年正月十一日、二月十一日、

同廿万二年正月十一日、二月十一日、

同廿万三年正月十一日、二月十一日、

同廿万四年正月十一日、二月十一日、

同廿万五年正月十一日、二月十一日、

同廿万六年正月十一日、二月十一日、

同廿万七年正月十一日、二月十一日、

同廿万八年正月十一日、二月十一日、

同廿万九年正月十一日、二月十一日、

同三十万年正月十一日、二月十一日、

同三十万一年正月十一日、二月十一日、

同三十万二年正月十一日、二月十一日、

同三十万三年正月十一日、二月十一日、

同三十万四年正月十一日、二月十一日、

同三十万五年正月十一日、二月十一日、

同三十万六年正月十一日、二月十一日、

同三十万七年正月十一日、二月十一日、

同三十万八年正月十一日、二月十一日、

同三十万九年正月十一日、二月十一日、

同四十万年正月十一日、二月十一日、

同四十万一年正月十一日、二月十一日、

同四十万二年正月十一日、二月十一日、

同四十万三年正月十一日、二月十一日、

同四十万四年正月十一日、二月十一日、

同四十万五年正月十一日、二月十一日、

同四十万六年正月十一日、二月十一日、

同四十万七年正月十一日、二月十一日、

同四十万八年正月十一日、二月十一日、

同四十万九年正月十一日、二月十一日、

同五十万年正月十一日、二月十一日、

同五十万一年正月十一日、二月十一日、

同五十万二年正月十一日、二月十一日、

同五十万三年正月十一日、二月十一日、

同五十万四年正月十一日、二月十一日、

同五十万五年正月十一日、二月十一日、

同五十万六年正月十一日、二月十一日、

同五十万七年正月十一日、二月十一日、

同五十万八年正月十一日、二月十一日、

同五十万九年正月十一日、二月十一日、

同六十万年正月十一日、二月十一日、

同六十万一年正月十一日、二月十一日、

同六十万二年正月十一日、二月十一日、

同六十万三年正月十一日、二月十一日、

同六十万四年正月十一日、二月十一日、

同六十万五年正月十一日、二月十一日、

同六十万六年正月十一日、二月十一日、

同六十万七年正月十一日、二月十一日、

同六十万八年正月十一日、二月十一日、

同六十万九年正月十一日、二月十一日、

同七十万年正月十一日、二月十一日、

同七十万一年正月十一日、二月十一日、

同七十万二年正月十一日、二月十一日、

同七十万三年正月十一日、二月十一日、

同七十万四年正月十一日、二月十一日、

同七十万五年正月十一日、二月十一日、

同七十万六年正月十一日、二月十一日、

同七十万七年正月十一日、二月十一日、

同七十万八年正月十一日、二月十一日、

同七十万九年正月十一日、二月十一日、

同八十万年正月十一日、二月十一日、

同八十万一年正月十一日、二月十一日、

同八十万二年正月十一日、二月十一日、

同八十万三年正月十一日、二月十一日、

同八十万四年正月十一日、二月十一日、

同八十万五年正月十一日、二月十一日、

同八十万六年正月十一日、二月十一日、

同八十万七年正月十一日、二月十一日、

同八十万八年正月十一日、二月十一日、

同八十万九年正月十一日、二月十一日、

同九十万年正月十一日、二月十一日、

同九十万一年正月十一日、二月十一日、

同九十万二年正月十一日、二月十一日、

同九十万三年正月十一日、二月十一日、

同九十万四年正月十一日、二月十一日、

同九十万五年正月十一日、二月十一日、

同九十万六年正月十一日、二月十一日、

同九十万七年正月十一日、二月十一日、

同九十万八年正月十一日、二月十一日、

同九十万九年正月十一日、二月十一日、

同百万年正月十一日、二月十一日、

同百万一年正月十一日、二月十一日、

同百万二年正月十一日、二月十一日、

同百万三年正月十一日、二月十一日、

同百万四年正月十一日、二月十一日、

同百万五年正月十一日、二月十一日、

同百万六年正月十一日、二月十一日、

同百万七年正月十一日、二月十一日、

同百万八年正月十一日、二月十一日、

同百万九年正月十一日、二月十一日、

同千万年正月十一日、二月十一日、

同千万一年正月十一日、二月十一日、

同千万二年正月十一日、二月十一日、

同千万三年正月十一日、二月十一日、

同千万四年正月十一日、二月十一日、

同千万五年正月十一日、二月十一日、

同千万六年正月十一日、二月十一日、

同千万七年正月十一日、二月十一日、

同千万八年正月十一日、二月十一日、

同千万九年正月十一日、二月十一日、

同億年正月十一日、二月十一日、

同億一年正月十一日、二月十一日、

同億二年正月十一日、二月十一日、

同億三年正月十一日、二月十一日、

同億四年正月十一日、二月十一日、

同億五年正月十一日、二月十一日、

同億六年正月十一日、二月十一日、

同億七年正月十一日、二月十一日、

同億八年正月十一日、二月十一日、

同億九年正月十一日、二月十一日、

同十億年正月十一日、二月十一日、

同十億一年正月十一日、二月十一日、

同十億二年正月十一日、二月十一日、

同十億三年正月十一日、二月十一日、

同十億四年正月十一日、二月十一日、

同十億五年正月十一日、二月十一日、

同十億六年正月十一日、二月十一日、

同十億七年正月十一日、二月十一日、

同十億八年正月十一日、二月十一日、

同十億九年正月十一日、二月十一日、

同百億年正月十一日、二月十一日、

同百億一年正月十一日、二月十一日、

同百億二年正月十一日、二月十一日、

同百億三年正月十一日、二月十一日、

同百億四年正月十一日、二月十一日、

同百億五年正月十一日、二月十一日、

同百億六年正月十一日、二月十一日、

同百億七年正月十一日、二月十一日、

同百億八年正月十一日、二月十一日、

同百億九年正月十一日、二月十一日、

同千億年正月十一日、二月十一日、

同千億一年正月十一日、二月十一日、

同千億二年正月十一日、二月十一日、

同千億三年正月十一日、二月十一日、

同千億四年正月十一日、二月十一日、

同千億五年正月十一日、二月十一日、

同千億六年正月十一日、二月十一日、

同千億七年正月十一日、二月十一日、

同千億八年正月十一日、二月十一日、

同千億九年正月十一日、二月十一日、

同兆年正月十一日、二月十一日、

同兆一年正月十一日、二月十一日、

同兆二年正月十一日、二月十一日、

同兆三年正月十一日、二月十一日、

同兆四年正月十一日、二月十一日、

同兆五年正月十一日、二月十一日、

同兆六年正月十一日、二月十一日、

同兆七年正月十一日、二月十一日、

同兆八年正月十一日、二月十一日、

同兆九年正月十一日、二月十一日、

同十兆年正月十一日、二月十一日、

同十兆一年正月十一日、二月十一日、

同十兆二年正月十一日、二月十一日、

同十兆三年正月十一日、二月十一日、

同十兆四年正月十一日、二月十一日、

同十兆五年正月十一日、二月十一日、

同十兆六年正月十一日、二月十一日、

同十兆七年正月十一日、二月十一日、

同十兆八年正月十一日、二月十一日、

同十兆九年正月十一日、二月十一日、

同百兆年正月十一日、二月十一日、

同百兆一年正月十一日、二月十一日、

同百兆二年正月十一日、二月十一日、

同百兆三年正月十一日、二月十一日、

同百兆四年正月十一日、二月十一日、

同百兆五年正月十一日、二月十一日、

同百兆六年正月十一日、二月十一日、

同百兆七年正月十一日、二月十一日、

同百兆八年正月十一日、二月十一日、

同百兆九年正月十一日、二月十一日、

同千兆年正月十一日、二月十一日、

同千兆一年正月十一日、二月十一日、

同千兆二年正月十一日、二月十一日、

同千兆三年正月十一日、二月十一日、

同千兆四年正月十一日、二月十一日、

同千兆五年正月十一日、二月十一日、

同千兆六年正月十一日、二月十一日、

同千兆七年正月十一日、二月十一日、

同千兆八年正月十一日、二月十一日、

同千兆九年正月十一日、二月十一日、

同京年正月十一日、二月十一日、

同京一年正月十一日、二月十一日、

同京二年正月十一日、二月十一日、

同京三年正月十一日、二月十一日、

同京四年正月十一日、二月十一日、

同京五年正月十一日、二月十一日、

同京六年正月十一日、二月十一日、

同京七年正月十一日、二月十一日、

同京八年正月十一日、二月十一日、

同京九年正月十一日、二月十一日、

同十京年正月十一日、二月十一日、

同十京一年正月十一日、二月十一日、

同十京二年正月十一日、二月十一日、

同十京三年正月十一日、二月十一日、

同十京四年正月十一日、二月十一日、

同十京五年正月十一日、二月十一日、

同十京六年正月十一日、二月十一日、

同十京七年正月十一日、二月十一日、

同十京八年正月十一日、二月十一日、

同十京九年正月十一日、二月十一日、

同百京年正月十一日、二月十一日、

同百京一年正月十一日、二月十一日、

同百京二年正月十一日、二月十一日、

同百京三年正月十一日、二月十一日、

同百京四年正月十一日、二月十一日、

同百京五年正月十一日、二月十一日、

同百京六年正月十一日、二月十一日、

同百京七年正月十一日、二月十一日、

同百京八年正月十一日、二月十一日、

同百京九年正月十一日、二月十一日、

同千京年正月十一日、二月十一日、

同千京一年正月十一日、二月十一日、

同千京二年正月十一日、二月十一日、

同千京三年正月十一日、二月十一日、

同千京四年正月十一日、二月十一日、

同千京五年正月十一日、二月十一日、

同千京六年正月十一日、二月十一日、

同千京七年正月十一日、二月十一日、

同千京八年正月十一日、二月十一日、

同千京九年正月十一日、二月十一日、

同垓年正月十一日、二月十一日、

同垓一年正月十一日、二月十一日、

同垓二年正月十一日、二月十一日、

同垓三年正月十一日、二月十一日、

同垓四年正月十一日、二月十一日、

同垓五年正月十一日、二月十一日、

同垓六年正月十一日、二月十一日、

同垓七年正月十一日、二月十一日、

同垓八年正月十一日、二月十一日、

同垓九年正月十一日、二月十一日、

同十垓年正月十一日、二月十一日、

同十垓一年正月十一日、二月十一日、

同十垓二年正月十一日、二月十一日、

同十垓三年正月十一日、二月十一日、

同十垓四年正月十一日、二月十一日、

同十垓五年正月十一日、二月十一日、

同十垓六年正月十一日、二月十一日、

同十垓七年正月十一日、二月十一日、

同十垓八年正月十一日、二月十一日、

同十垓九年正月十一日、二月十一日、

同百垓年正月十一日、二月十一日、

同百垓一年正月十一日、二月十一日、

同百垓二年正月十一日、二月十一日、

同百垓三年正月十一日、二月十一日、

同百垓四年正月十一日、二月十一日、

同百垓五年正月十一日、二月十一日、

同百垓六年正月十一日、二月十一日、

同百垓七年正月十一日、二月十一日、

同百垓八年正月十一日、二月十一日、

同百垓九年正月十一日、二月十一日、

同千垓年正月十一日、二月十一日、

同千垓一年正月十一日、二月十一日、

同千垓二年正月十一日、二月十一日、

同千垓三年正月十一日、二月十一日、

同千垓四年正月十一日、二月十一日、

同千垓五年正月十一日、二月十一日、

同千垓六年正月十一日、二月十一日、

同千垓七年正月十一日、二月十一日、

同千垓八年正月十一日、二月十一日、

同千垓九年正月十一日、二月十一日、

同杼年正月十一日、二月十一日、

同杼一年正月十一日、二月十一日、

同杼二年正月十一日、二月十一日、

同杼三年正月十一日、二月十一日、

同杼四年正月十一日、二月十一日、

同杼五年正月十一日、二月十一日、

同杼六年正月十一日、二月十一日、

同杼七年正月十一日、二月十一日、

同杼八年正月十一日、二月十一日、

同杼九年正月十一日、二月十一日、

同十杼年正月十一日、二月十一日、

同十杼一年正月十一日、二月十一日、

同十杼二年正月十一日、二月十一日、

同十杼三年正月十一日、二月十一日、

同十杼四年正月十一日、二月十一日、

同十杼五年正月十一日、二月十一日、

同十杼六年正月十一日、二月十一日、

同十杼七年正月十一日、二月十一日、

同十杼八年正月十一日、二月十一日、

同十杼九年正月十一日、二月十一日、

同百杼年正月十一日、二月十一日、

同百杼一年正月十一日、二月十一日、

同百杼二年正月十一日、二月十一日、

同百杼三年正月十一日、二月十一日、

同百杼四年正月十一日、二月十一日、

九條殿記　又云九條右丞相記、河海抄所載、

天慶五正月七日、天德元三月廿三日、

九條記　妙音院相國白馬節會次第所載、

天慶五正月六日、十

九條殿御日記　小右記所載、

天慶五正月八日、十　同六七月廿七日、

九記　合記別記所載、

天慶六四月二日、十二月十二日、天德四三月十九日、

九條殿御日記　山本本御即位部類記所載、

天慶九四月八日、廿

九條殿御記　九條家本大嘗會御禊部類記所載、

天慶九十月廿八日、

九記　合記所載、

天曆元四月六日、十

九條殿記　伏見宮御記錄利三十五所收御產部類記所載、

天曆四年五月一日、二日、五日、二十五日、十六日、二十六日、二十八日、二十二日、二十七日、二十三日、二十四日、二十四日、二十五日、二十一日、二十六日、二十五日、六月十日、二十七日、十五日、二十九日、閏五月一日、二日、十四日、十五日、十八日、三十日、八月三日、八日、十日、同五十月二十六日、

〔小右記〕長和五年三月二日、丙午、○略中攝政被取出九條丞相被部類文書、

〔左經記〕長元八年二月六日、辛酉、○略中取在阿波前司許九條殿御處分二卷

獻殿、

〔本朝書籍目錄〕雜々

九條右丞相遺誡

〔九條殿遺誡〕

遺誡并日中行事、造次可服座右、○拾芥抄ノ號ニ九條殿遺誡ト云ヘリ、下同、

先起稱屬星名號、○菊亭家本及ビ拾芥抄ニ作ル、七遍、徹書其名、貪狼者子年、巨門者丑年、祿存者寅年、文曲者卯年、廉貞者辰年、武曲者巳年、未年、破軍者午年、七〇菊亭家本及ビ拾芥抄ニ以下四十字ヲ脫ス、次可張座右、○拾芥抄ノ號ニ九條殿遺誡ト云ヘリ、下同、

次取鏡見面、次見曆知日吉凶、次取楊枝、向西洗手、次誦佛名及可念尋常所尊重神社、次記昨日事、事多日々中可記之、次服粥、次梳頭、三箇日一度可梳之、日々不梳、次除手足甲、丑日除手甲、寅日除足甲、次擇日沐浴、五箇日一度、

凡每月一日沐浴短命、八日沐浴命長、十一日目明、十八日逢盜賊、午日失愛敬、亥日見恥、○菊亭本及ビ拾芥抄ニ以下ノ二十字ヲ脫ス、

天德四年五月四日

言語ヲ戒ムム　年少時ハ先ヅ讀書次ニ手習ヲ學ブベシ　三寶ニ歸依スベシ

次有可出仕事、卽服衣冠不可懈緩、會人言語莫多、○菊亭家本及ビ拾芥抄、多ノ下、語ノ字アリ、又莫言人之行事、唯陳其所思、兼觸事不可言○菊亭家本及ビ拾芥抄、言ノ下、世ノ字アリ、人言○菊亭家本、言ヲ事ニル、作也、人之災出自口、努力愼之愼之、又付公事可見文書、必留情可見、次朝暮膳如常、勿多食○菊亭家本及ビ拾芥抄、食ノ下、勿多ノ二字アリ、飮、又不待時尅不可食之、詩云、戰々慄々日愼一日、如臨深淵、如履薄氷、長久之謀能保天年、凡成長頗知物情之時、朝讀書傳、次學手跡、其後許諸遊戲、但鷹犬、博奕重所禁遏矣、元服之後、未髣○菊亭家本及ビ拾芥抄、髴ヲ髣ニ作ル、官途之前、其所爲亦如此、但早定本尊、盥洗手、唱寶號、若誦眞言、至于多少、可隨人之機根、不信之輩、非常天命、前鑒已近、第三關白○菊亭家本及ビ拾芥抄、第三關白ノ四字ナシ、ノ貞(忠カ)信公語云、延長八年六月二十六日、霹靂清凉殿之時、侍臣失色、吾心中歸依三寶、殊無所懼、大納言清貫、右中辨希世、尋常不尊佛法、此兩人已當其妖、以是謂之、歸眞之力尤逃災殃、又信心貞潔智行之僧、多少隨堪相語之、非唯現世之助、則是後生之因也、頗知書記、便留心於我朝書傳、夙興照鏡先窺形體變、次見曆書可知日之吉凶、年中行事略注付件曆、每日視○拾芥抄、視ノ下、日ノ字アリ、之次、先知其事、兼以用意、又昨日公事若私不得心○菊亭家本及ビ拾芥抄、心ヲ止ニ作ル、事等、爲備忽忘、又聊可注付件曆、但其中要樞公事、及君父所在事等、別以記之可備後

思孝ノ誠ヲ盡スベシ　日々必ズ親ニ謁スベシ　人ニ恭敬ノ誠ヲ致スベシ　身中家内ノ事ヲ語ルベカラ

鑒、凡爲君必盡忠貞之心、爲親必竭孝敬之誠、恭兄如父、愛弟如子、公私大小之事、必以一心○菊亭家本及ビ拾芥抄、心ノ字ナシ、同志、纖芥勿隔、若有不安心之事、常語述其旨、不可結恨、況至于無賴姉妹、慇懃扶持、又所見所聞之事、朝謁夕謁、必白於親、縱爲我有芳情、爲親有惡意、早以絕之、若雖疎於我、有懇於親、必以相親之、凡非有病患、日々必可謁於親、若有故障者、早以消息、可問夜來寧否、文王之爲世子也、尤足欣慕、凡爲人常致恭敬之誠、○菊亭家本及ビ拾芥抄、意ヲ心ニ作ル、用其意○菊亭家本及ビ拾芥抄、意ヲ心ニ作ル、也、或有爲公家及王卿、雖非殊謗、而言不善○菊亭家本及ビ拾芥抄、善ノ下、事ノ字アリ、之輩、如然之間、必避座而却去、若無便避座、守口攝意○菊亭家本及ビ拾芥抄、攝意ヲ隔心ニ作ル、勿預其事、縱人之善不可言之、況乎其惡哉、古人云、使口如鼻、此之謂也、非公若私、無止事之外、輒不可到他家、○菊亭家本及ビ拾芥抄、家ヲ處ニ作ル、又妄勿交契於衆人、交○菊亭家本及ビ拾芥抄、交ノ下、言ノ字アリ、之難、古賢所誡也、縱有人、甲與乙有隙、若好伴乙、則甲結其怨、如此之類、重可愼之、○拾芥抄、之ヲ也ニ作ル、又莫伴高聲惡狂之人、其所言事、輒不可聞驚、三度反覆與人交言、又不可行輒輕事、常貴身重心如是送日、曾莫誤志、○拾芥抄、常以下十三字ナシ、常知聖人之行事、不可爲無跡之事、又以我身富貧之由、曾勿談說、凡身中家內之事、不可輒披○拾芥抄、披ヲ被ニ作ル、談之、始自衣冠及于車馬、隨有

ズ衣冠車馬ハ分ニ應ズベシ

公事ニ恪勤タルベシ

非常ノ時先ヅ親ヲ訪ヒ次ニ參内スベシ

慍色ヲ表ハスベカラズ

用之、勿求美麗、不量己身○菊亭家本及ビ拾芥抄、身ヲ力ニ作ル、好美物、則必招嗜欲之謗、德至力堪、何事之○菊亭家本及ビ拾芥抄、之ノ字ナシ、有哉、不可輙借用他人之物、若公事有限必可借用○菊亭家本及ビ拾芥抄、用ノ字ナシ、者、用畢之後、不可移時日、早以返送之、故老及知公事之者、相遇之時、必問其所知聞、賢者之行則雖難及、必企庶幾之志、多聞多見、是○菊亭家本及ビ拾芥抄、是ノ字ナシ、知往知來之備也、若有官之者、催行僚下、爲一所長之者、整役其下、各全所職、以招幹事之譽、若有故障之時、早奉假文、可申障之由、不申故障、闕公事之時、其謗尤重、愼之誡之努々、○菊亭家本及ビ拾芥抄、時以下ヲ愼之誡之、努力努力其謗尤重ニ作ル、節會若公事之日、欲整衣冠早參入、爲殿上侍臣、若諸衞督佐之者、當直日早參入、必可宿直、但至于文官人○菊亭家本及ビ拾芥抄、人ノ字ナシ、非劇務者、隨有○菊亭家本及ビ拾芥抄、有ヲ公ニ作ル、事而殊能勤之、緩怠之聞○菊亭家本及ビ拾芥抄、聞ヲ間ニ作ル、重可畏者也、凡採用之時、雖有才行、不恪勤之者、無薦擧之力、縱非殊賢、僶俛之輩、尤堪擧達之、大風疾雨雷鳴地震水火之變、非常之時、早訪親、次參朝、隨其所職之官、廻消灾之慮矣、○菊亭家本及ビ拾芥抄、矣ノ字ナシ、在朝也欲珍重矜莊、在私也欲雍容仁愛、以小事輙不可見慍色、若有成過之者、暫雖勘責亦以寬恕、凡不可大怒、勘人之事、心中雖怒○菊亭家本及ビ拾芥抄、怒ノ下、心ノ字アリ、思勿出口、常以恭謹溫イ可爲例事、喜怒之心敢無過餘、以一日之行事、爲

家中所得物ノ十分一ヲ功德物ニ充ツベシ

萬年之鑑誡、凡在宅之間、若道若俗所來之客、縱在梳頭飮食之間、必早可相遇也、○菊亭家本及ビ拾芥抄、也ヲ之ニ作ル、捉○拾芥抄、捉ヲ投ニ作ル、髮吐哺之誡、古賢之所重也、家中所得物、各必先割十分之一、以宛功德用、沒後之事、豫爲格○菊亭家本及ビ拾芥抄、格ヲ終ニ作ル、制、慥令勤行、若不爲此事之時、妻子從僕多招事累、或乞不可乞○菊亭家本及ビ拾芥抄、乞ノ下、之ノ字アリ、人、或失不可失之物、非一家之害、必招諸人○菊亭家本及ビ拾芥抄、人ノ下、之ノ字アリ、謗、仍所得之物、必以割置、始自葬料、盡于諸七追福之備、但淸貧之人、此事尤難、然用意與不用意、何無差別、

以前雜事書記如右、予(師輔)十分未得其一端、然而常蒙先(忠平)公之敎、又訪古賢、今粗知事要、依萬一之勤、雖非才智、已登崇班、爲○菊亭家本及ビ拾芥抄、爲ノ字ナシ、吾後之者、熟存此由、縱非如法、必用意可勤公私之事、

〔江談抄〕一攝關家事　攝政關白賀茂詣共公卿幷子息大臣事

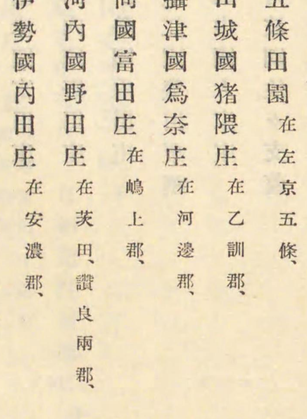
攝政關白賀茂詣共公卿幷子息大臣、御前辨少納言、御後撿非違使等令供奉、始於何世乎、此事不載指舊記如何、江左(齊光)大丞云、天慶以往、凡無父子共大臣之例、見九條殿記、而貞信公御時、小野宮殿、九條殿兩相府被候御共、但彼時必四月御祭之間、不被參詣也云々、○中略治部卿伊房、云、九條殿御遺誡云、爲我後人者、賀

天德四年五月四日

茂、春日御祭日、必可參詣社頭也、但於春日者、路遠有煩、可參大原野已以斷絶也、件事極祕事、不載流布世間之遺誡、若件事在別御記歟、

〔二中歷〕十　名家歷　九條殿　九條坊門南、町尻東、師輔公家、抄云唐橋町、

〔拾芥抄〕中末　東京圖



〔本朝無題詩〕六　亭子院　秋日陶化坊亭卽事　同人（中原廣俊）

一入名區閑思量、亭臺廢盡客來稀、相門昔日稱花廐、故老傳云、九條右相府之居也、其時人稱九條御厨（廚カ）、故有此句、民戶秋風訪竹扉、柳葉墻斜山影近、蓼花岸舊水聲微、可憐首白村中老、高

捧黃鵠贈我歸、

〔九曆〕天德三年二月七日、壞坊城家、移立桃園家事、

〔華頂要略〕五十五上　寺領目錄　妙香院庄園目錄　十一个所事、康平六年五月廿日注之、

一五條田園　在左京五條、
一山城國猪隈庄　在乙訓郡、
一攝津國爲奈庄　在河邊郡、
一同國富田庄　在嶋上郡、
一河內國野田庄　在茨田、讃良兩郡、
一伊勢國內田庄　在安濃郡、
一遠江國豐田栗栖　在豐田郡、
一越中國大家庄　在新河郡、
一丹波國佐々岐園　在天田郡、
一但馬國大濱庄
一備後國堺庄

已上十一个所、載九條右府之應和元年六月五日御處分送文也、

天德四年五月四日

所領十一箇莊ヲ子尋禪ニ讓ル

天德四年五月四日

九條右丞相御讓狀云、

奉送

庄園等拾壹箇所事

五條南園

山城國猪隈庄

攝津國爲奈庄

攝津國富田庄

河內國野田庄

伊勢國內田庄

遠江國豐田栗栖

越中國大家庄

丹波國佐々支薗

但馬國大濱庄

備後國堺庄

右依御處分、副公驗等、奉送禪(尋禪)師君御坊、如件、

岡屋莊ヲ延曆寺法華堂ニ施入ス

宇治別業

應和元年六月五日

散位藤原

中務少丞小野判

別當修理亮上毛野朝臣判

圖書頭百濟王判

春宮大進藤原朝臣判

前令小野判

〔廬山寺文書〕○山城

天祿三年五月三日初記沒後事○中略

岡屋庄一處、田地百六十餘町、載在券文、

右庄、本故九條殿御領、薨逝給之後、依御遺言、被寄法花堂也、田地本數百廿餘町、通納地子一年料三十斛、○中略年料地子分爲三分、○中略一分充八講料、○中略故殿薨給之後、奉廻向彼御菩提、須待得御忌日令行之、而太政殿下已以被修、非可重疊修之、仍須病僧入滅之後、以其忌日、若爲初若爲終、可行之、(伊尹)(良源)

〔法中補任〕平等院執印次第

皇代系記曰、後冷泉院御宇永承七年、於宇治別業、關白賴通公建立平等院、藤原忠文朝臣奉寄附九條右丞相之地也云々、

天德四年五月四日

○師輔ノ室勤子内親王薨去ノコト、天慶元年十一月五日ノ條ニ、師輔、父忠平ノ魚袋ヲ帯シテ參内スルコト及ビ紀貫之ヲシテ、魚袋返上ノ歌ヲ代詠セシムルコト、同六年正月一日ノ條ニ、室藤原盛子薨去ノコト、同年九月十二日ノ條ニ、減封ヲ請フコト、天暦元年閏七月二十九日ノ條ニ、桃園第燒亡ノコト、同二年六月九日及ビ天徳三年八月三日ノ條ニ、父忠平ノ病ヲ祈禳スルコト、天暦三年正月十四日ノ條ニ、朱雀上皇、九條第ニ御幸ノコト、同年二月二十八日ノ條ニ、伊豫介公輔ノ赴任ヲ餞スルコト、同年三月二日ノ條ニ、東宮ノ御爲メニ修法スルコト、同四年閏五月十四日、同年七月二日及ビ同年八月八日ノ條ニ、源庶明ニ袍ヲ贈ルコト、同五年正月三十日ノ條ニ、吳越王ニ書ヲ贈ルコト、同七年七月是月ノ條ニ、女御藤原安子、父師輔ノ五十算ヲ賀スルコト、天徳元年四月二十二日ノ條ニ、室康子内親王薨去ノコト、同年六月六日ノ條ニ、桃園第雜舍燒亡ノコト、同三年八月三日ノ條ニ、春日社ニ參詣スルコト、同年年末雜載、諸家ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

師輔自筆ノ寫經

奉幣ヲ在地國司ニ付ス

〔古經跋語〕一大寶廣博樓閣善住祕密陀羅尼經 中 一卷

多武峯神社

此經一卷、臣師輔手自書寫、以奉納多武峯、祈現當二世、

天徳二戊午三月十八日

屋代弘賢の著道の幸中卷に云、

九條殿師輔公眞跡、いかゝしたるにや、世に散て、京都の書肆中村孫兵衛といふものゝ持傳へしを、正徳元年、ふたゝひ此庫中に納しよし、記文そへてあり、

按スルニ、師輔公眞筆御遺誡幷日中行事ノ如キ、極メテノ能書ニ非ス、イタク劣リタレハ信シ難キモ、屋代翁ハ日中行事ヲ閲セサリシニ哉、不審ナリ、

五日、癸卯神祇官ニ於テ、雨ヲ祈リ、疾疫ヲ禳ハシム、又丹生、貴布禰兩社ニ奉幣シテ、雨ヲ祈ル、

〔日本紀略〕村上天皇 五月五日、癸卯、於神祇官、祈甘雨幷除疾疫事、又付在地國司、奉幣丹、貴等社祈雨、

天徳四年五月五日

奉幣日時定

〔祈雨記〕天德四年五月〇中略五日、癸卯、民部卿藤原朝臣(在衛)令藏人雅材申云、今日將令擇申奉幣日時差其使、而有故右大臣(師輔)穢入交、云雖無見觸穢著座之者、事疑尤深、爲之如何、令仰云、觸穢之事必可相交奉幣事、未定其日、須於神祇官祈甘雨幷除疾疫事、又付在地國司、奉幣馬丹生、貴布禰等社、同祈雨可宜、〇中略已上御記、

神泉苑ニ於テ請雨經法ヲ修ストノ說雨降ラズ寬空卷數ヲ上ル

〇石清水等十五社ニ奉幣ノコト、七月十七日ノ條ニ見ユ、

八日、丙午、炎旱ニ依リ、大僧都寬空ヲシテ、仁壽殿ニ孔雀經法ヲ修セシム、

〔東寺長者補任〕一　長者大僧都寬空　自五月八日、依炎旱、於仁壽殿、修孔雀經法、結願御加持之時降雨、〇仁和寺諸院家記同ジ、

〔祈雨記〕寬空僧正、村上御宇於神泉、(宛脫カ)修請雨經法、不雨、結願雖獻卷數於殿上、忽不奏達、有人、戲稱無効驗之由、僧正使者數剋俳佪、空以歸來、則陳子細於僧正、々々爲憤參內、著法服、擎香爐、立殿上前、數剋觀念、香火細聳、大雨忽降、但雨脚殊霪禁中、不漏墻外、時人珍敬云々、雖爲一宗美談、未見本文、可尋勘之、〇覺禪抄及ビ東寺長者補任應和元年ノ條異事ナシ、

〔古今著聞集〕二釋教　香隆寺僧正寬空は、河內國の人也、神日律師入室、寬平法皇灌頂の御弟子也、天德四年、炎旱のうれへ有けるに、五月九日より、仁壽殿にて孔雀經法を修せられけるに、洛中に雨くたらさりけり、結願の日に成て、卷數を奉る時、殿上に靈驗なきよしをせうして執奏せさりけり、僧正そのよしを聞て、法ふくをちやくし、かうろをさゝけて庭中に立て、ふかくくはんねんの時、かうろのけふりたかくのほりて、大雨すなはちふる、たゝしきん闕はかりふりて、墎外にはくたらさりけり、人あやしみとしけり、

香爐ヲ捧ゲ觀念ノ時雨降ル

九日、丁未、七大寺僧ヲシテ、東大寺ニ祈雨讀經ヲ行ハシム、

〔祈雨日記〕村上天皇　(天德四年五月)九日、於東大寺大佛殿、以七大寺僧被行祈雨御讀經、

〔祈雨記〕天德四年五月〇中略九日、丁未、民部卿藤原朝臣(在衛)令藏人守仁奏陰陽寮擇申七大寺祈雨御讀經日時文云々、令仰云、依前例、集七大寺僧於東大寺大佛殿、讀經祈雨可宜、

陰陽寮日時ヲ撰申ス

十二日、庚戌、今夜白雨、〇中略已上御記、

十日、戊申、皇后、御父師輔ノ服ニ依リテ、右近衞權中將藤原伊尹ノ第ニ遷御アラセラル、

明經博士等中宮職官人著服

〔日本紀略〕村上天皇　五月十日、戊申、令奏明經博士有象等勘申、緣右大臣(師輔)薨、皇(安子)

后出宮、卽素服、其職官人從而可服否事、又戌刻中宮從飛香舍、移右近權中將
伊尹朝臣一條宅、依右大臣薨也、乘牛車、出自玄暉門幷上東門、到彼第、

〔扶桑略記〕二十六 村上天皇下　五月十日、戊申、中宮移御右近權中將伊尹朝臣之
一條第、依親父丞(師輔)相薨也、

〔西宮記〕臨時 中宮　五　天德四年五月四日、召大外記傳說、令藏人爲光仰、可勘申
皇后依服喪出宮否之例云々、八日、令永保仰中宮大夫源朝臣(高明)、大外記傳說勘
申太政大臣忠仁(良房)公薨、皇(明子)太后宮々人服々事文、令仰、所勘申不愷、令明經、明法
勘申、十日、兩道博士勘之云々、令仰、依令條、職官人不令著服、又戌二刻中宮從
飛香舍移伊尹朝臣宅、依父丞相薨、乘牛車出玄暉門幷上東門到彼宅、公卿、侍從、諸衞供奉如常、

〔小右記〕萬壽四年十二月六日、壬申、○中略 左兵衞督(經通)示送云、女院別當依御重
服、院司可著服給者、件事見邑上天德四年御記、九條丞相薨時、中宮職司等不
可著服□在明法勘狀、不可著由被下宣旨了、見遣御記了、

藏人藤原雅材ヲシテ、東宮ノ御病ヲ訪ハシメ給フ、

〔扶桑略記〕二十六 村上天皇下　五月十日、戊申、勅遣藏人雅材、問皇太子(憲平親王)所惱、

ノコトヲ勘申ス

御船傳說ヲシテ皇后服喪ニ依リテ御退出ノ例ヲ勘申セシム

牛車ノ宣旨ナシ

中宮職官人著服セズ

十二日、庚戌、釣殿ニ出御シテ、漁ヲ御覽アラセラル、

〔河海抄〕十二 藤裏葉　御記 天德四年五月十二日、申剋之釣殿、召漁者丹波春助、下網
捕魚、得一二喉鯉鮒、卽放入、々夜還、

十三日、辛亥、炎旱ニ依リ、神祇官及ビ陰陽寮ヲシテ、軒廊御卜ヲ行ハシム、

〔祈雨日記〕村上天皇　十三日(天德四年五月)、辛亥、被行軒廊御卜、
十四日、壬子、重有御卜、神司卜云、理運之上、大神宮幷豐受宮御膳物預人穢惡、
幷鴨御祖別當(雷カ)社供奉神事禰宜等過穢所致者、陰陽寮云、理運之上、巽(乾方脫カ)離神社
不淨云々、仰遣神祇官人於彼宮、又陰陽寮卜申所々、遣檢非違使令實檢者、今
日甘澍滂洽、

〔祈雨記〕天德四年五月○略　中　十三日、辛亥、民部卿藤原朝臣(佐衡)、令文範朝臣奏神
祇官卜申不雨祟文、申云、理運之上、有所致歟、陰陽寮卜申不雨祟文、推之、理運之上、若
事誤所致歟、令仰云、須慥令勘申成祟之趣、兼合其神社等、
十四日、壬子、民部卿藤原朝臣、令藏人重輔奏神祇官重卜申雨不降咎文、推云(之カ)、理運
之上、伊勢大神宮幷豐受宮御膳物預人過穢、幷鴨御社別當(雷カ)社供奉神事禰宜等過穢致歟、陰陽寮勘申同祟云、理運之上、若
依巽離乾方神社不淨、成祟所致歟、又勘申伊勢、春日、大神、大和、廣瀨、平野、稻荷

漁夫ヲ召ス

還御

大神宮御膳物預人等ノ穢アリ

神祇官ノ卜文

陰陽寮ノ占文

重ネテ御卜ヲ行フ

巽離乾方神不淨ニ依リテ

祟ヲ爲ス
檢非違使ヲシテ稻荷等六社ヲ檢セシム
降雨
結願
寬空ニ褂ヲ賜フ

等合者、令仰云、依神祇官勘申、遣神祇官人於伊勢大神宮、賀茂神社尋問、依陰陽寮卜申、遣檢非違使稻荷等六箇社、實檢不淨物有无、今日澍雨霶霈、

十五日、癸卯、此日降雨、〇中略已上御記、

〔江次第〕十八軒廊御卜　天德四年五月十三日、召陰陽寮於陣頭云々、占不雨由、神祇官於左衞門外(陣脫カ)、令外記傳仰之、上卿在衡卿、

大僧都寬空ヲシテ、御息災ノ爲メニ、仁壽殿ニ孔雀經法ヲ修セシム、

〔日本紀略〕村上天皇　五月十三日、辛亥、於仁壽殿、令大僧都寬空修孔雀經法、爲息災也、

廿日、戊午、結願、

〔祈雨日記〕村上天皇　十三日(天德四年五月)、辛亥、〇中略自今日以大僧都寬空、於仁壽殿被行孔雀經法、

〔延喜天曆御記抄〕〇柳原家記錄百三十一所收　御修法事付七高山御修法、

同年(天德四年)五月十三日、辛亥、始從今夜、於仁壽殿、令大僧都寬空修孔雀經法、爲息災也、

同年五月廿日、此日修法了、阿闍梨大僧都寬空、率番僧參上加持、訖令左近少

度者ヲ賜フ
紀在昌呪願文ヲ作ル
官人等觸穢
山城國司ニ付シテ諸社ヲ餝ラシム
內裏觸穢
七位ヲ帶スルニ依リ拷訊スルヲ得ズ
山邊履道ノ例ニ依リ拷訊ス

將伊陟施褂僧都寬空、兼仰法師等賜度者各一人之由、〇東寺長者補任、仁和寺傳異事ナシ、

二十一日、己未、臨時仁王會、

〔日本紀略〕村上天皇　五月廿一日、己未、仁王會、文章博士在昌作呪願文、

〔西宮記〕臨時一臨時仁王會〇前田家大永鈔本　天德(裏書)四年五月十五日、民部卿藤朝臣(在國)令申云、大納言源朝臣(高明)、左衞門督藤朝臣(師氏)、各可餝一堂、而申觸穢由、此穢已遍、若被免者、他人必申同障歟、又左右衞門府申、依例可餝社々一講、而官人等觸穢、若付山城國令餝如何、仰早可付山城國司、又內裏有穢、須不許源朝臣等所申云々、

〔右少辨平時範記〕〇東洋文庫所藏　御讀經御修法日時事　永長元年三月十九日、己酉、早旦召主計頭道言朝臣於藏人所、令勘申御讀經御修法等日時、〇中略內裏觸穢時、被行御息災御祈幷臨時御讀經事　內裏觸穢間、被行御息災法幷修臨時御讀經例

天德四年五月廿一日、被行臨時仁王會、

式部史生奈癸忠雅ヲ拷訊ス、

〔日本紀略〕村上天皇　五月廿一日、己未、〇中略今日令拷訊式部史生忠雅、依帶七位、不可拷訊、然而依式部史生山邊履道之□(別カ)可拷問、件履道摺改試詩也、

九月廿日、丁巳、式部史生忠雅拷問之間、使官人或陳可脫申之由、或申不可脫

申之由仍令法家勘申、

○忠雅、橘直幹ヲ毆傷スルコト、四月十八日ノ條ニ、明法博士等、忠雅ノ赦ニ會フヤ否ヤヲ勘申スルコト、應和二年九月十四日ノ條ニ見ユ、

二十八日、丙寅、直物、〔日本紀略〕村上天皇 五月廿八日、丙寅、○略中今日直物、

疾疫ニ依リテ、相撲人ヲ貢スルヲ停メシム、〔日本紀略〕村上天皇 五月廿八日、丙寅、仰依天下疾疫、可停貢相撲人、〔北山抄〕二年中要抄下 七月 天德四年五月、依疫癘、賜不可點貢相撲人之官符於諸道、

官符ヲ諸道ニ下ス

宮中ニ頓死者アリ

五十箇日

六月大己巳朔盡

一日、己巳、內裏ノ穢ニ依リテ、大祓ヲ行フ、〔日本紀略〕村上天皇 六月一日、己巳、於建禮門大祓、依宮中頓死之穢也、

五日、癸酉、炎旱ニ依リ、延曆寺大日院ニ於テ、大般若經ヲ讀マシム、〔日本紀略〕村上天皇 六月五日、癸酉、於大日院、令讀大般若經、五十箇日、〔僧綱補任〕二○興福寺本(裏書) 村上御記云、今年天下大旱、上卿申云、於大日院、大般若御讀經五十日可被行、但請僧條、或清淨无才、或有才无清契聞、光智律師奏云、於七大寺讀經可被行者、仍被下宣擇清淨、次選智德云々、

○大日院修法ノコト、四月九日ノ條ニ見ユ、

九日、丁丑、理子內親王家、同內親王七七日忌法會ヲ園城寺ニ修ス、〔日本紀略〕村上天皇 六月九日、丁丑、理子內親王家於園城寺、修卅九日法事、〔河海抄〕十四鈴虫 御記云、天德四年六月九日、丁丑、此日理子內親王家、於園城寺修四十九日御法事、其佛經具及七僧法服料物等、預給令調備、使左近少將伊陟、誦經布施調布二百端、又差侍臣五六人宛行香役、

佛具法服等ヲ給ス

侍臣ヲ行香役ニ充ツ

○理子內親王薨去ノコト、四月二十一日ノ條ニ見ユ、

死穢建禮門ニ於テ大祓ヲ修ス

内給所ノコトヲ仰ス

十一日、己卯、内裏ノ穢ニ依リテ、月次、神今食祭ヲ延引ス、

〔日本紀略〕村上天皇　六月十一日、己卯、停月次祭、神今食、以内裏有死穢也、於建禮門大祓、

○月次、神今食祭追行ノコト、七月十日ノ條ニ見ユ、

十三日、辛巳、除目、

〔西宮記〕臨時一裏書　諸宣旨　補所々別當　天德四年六月十二日、遣藏人助信於右大將藤原師尹家、仰可行内給所事、

〔北山抄〕三　拾遺雜抄上　除目　京官除目、先任三省史生、式部、民部、兵部、次院宮御給、○中略所々最(マヽ)者、内侍召内豎、或正月給、文章生一人、候藏人所者、超次任之、見天德四年六月十三日御記、漏外國召者等任之、

〔江次第〕四　秋除目　文章生　天德四年御記、藤斯生任彈正忠、候藏人所者超次、

〔權記〕寛弘五年六月廿一日參内、今日可被行直物云々、然而依天曆(德)四年八(四)月理子内親王薨吃卌九日、只被行直物、過四十九日後、被行小除目、

十四日、壬午、大僧都寛空ヲシテ、御息災ノ爲メ、仁壽殿ニ不動法ヲ修セシメ、僧百口ヲシテ、紫宸、清涼兩殿ニ大般若經ヲ轉讀シテ、疾疫ヲ祈禳セシム、

結願

寛空ニ褂ヲ賜フ

百口御讀經ニ智德淨行ノ僧ヲ召ス

〔日本紀略〕村上天皇　六月十四日、壬午、請百僧於南殿、清涼殿、令轉讀大般若經、爲除天下疾疫也、今日於仁壽殿、令大僧都寛空修不動供、爲息災也、

廿一日、己丑、結願、

〔延喜天曆御記抄〕○柳原家記錄百三十一所收　御修法事　付七高山御修法、

同年(天德四)六月十四日、壬午、始自今夜於仁壽殿、令大僧都寛空修不動法、爲息災也、

同ー同ー廿一日、此日修法了、大僧都寛空率番僧參上加持、了施褂阿闍梨如例、

〔西宮記〕九月季御讀經事　天德四年六月、有百口御讀經、不依寺分已講、召智德淨行、

〔右少辨平時範記〕○東洋文庫所藏　御讀經御修法日時事　永長元年三月十九日、己酉、早旦召主計頭道言朝臣於藏人所、令勘申御讀經御修法等日時、○中略

内裏觸穢時、被行御息災御祈幷臨時御讀經事

内裏觸穢間被行御息災法幷修臨時御讀經例

天德四年六月十四日、大僧都寛空勤修不動息災法、○中略

同六月十四日、於紫(宸)震、清涼兩殿、被行臨時大般若御讀經、

天德四年六月十四日

〔三僧記類聚〕六　孔雀經法廢朝間結願例付穢中御修法例、○中略

內裏觸穢間御修法例

天德四年六月十四日、寬空修同法、(孔雀經法)○仁和寺御傳、修法要抄異事ナシ、

○御息災ノ爲メ、御修法ヲ行フコト、五月十三日及ビ十月二十四日ノ條ニ見ユ、

二十二日、庚寅、皇后、右大臣師輔ノ七七日忌法會ヲ法性寺ニ修セラル、

〔日本紀略〕村上天皇　六月廿二日、庚寅、中宮(安子)於法性寺、修故前右大臣(師輔)卅九日法事、諷誦布施布三百段、

布施アリ

〔榮華物語〕一月宴　かくてのち〳〵の御事とも、あはれ〳〵ときこえさする程に、御法事も六月十(廿カ)よ日にせさせ給、

○師輔薨去ノコト、五月四日ノ條ニ見ユ、

二十八日、丙申、檢非違使ヲ補ス、

〔西宮記〕臨時一裏書檢非違使別當事　天德四年六月廿八日、令右大辨賴忠朝臣仰左(實賴)大臣云、左衞門少尉藤原邦保、(右脫カ)衞門少尉源學等、可爲檢非違使、

七月小己亥朔盡

一日、己亥、施米、

〔江次第〕七六月施米事　米鹽文奏不事

天德四年七月一日御記曰、民部卿藤原朝臣(在衞)、令藏人爲光奏山々施米使勘申僧數等十五卷、副可施米鹽勘文、大膳職申施山々僧料鹽有無事文、仰依請、以率分米鹽令給、

施米使等諸山ノ僧數ヲ勘申ス率分米鹽ヲ給セシム

七日、乙巳、御製アリ、

〔日本紀略〕村上天皇　七月七日、乙巳、御製、月扇動涼風、

御題

樂所預圖書頭從五位下源脩卒ス、

〔西宮記〕臨時六定穢事　天德四七五、(九カ)令仰左(實賴)大臣云、脩從者、來桂芳坊樂所、取置彼所納琵琶譜櫃退出、脩去七日死去者、省定、脩從者甲人也、所取之櫃、可爲乙物、然則宮中可爲丙所云々、御記文、

從者樂所ノ琵琶譜ノ櫃ヲ取出ス死穢宮中ニ及ブ

〔尊卑分脈〕仁明源氏

源覺

脩圖書頭、從五下、母、

世系

〔琵琶血脈〕

天德四年七月一日　七日

琵琶ヲ貞保親王ニ學ブ

弟子源博雅

同高明

内裏丙穢ニ依リ諸司ニ付ス

宣命案ヲ奏ス

式部卿貞保親王

樂所預圖書頭源修

皇太后宮權大夫博雅卿　延喜皇子克明親王子、

西宮左大臣高明公　延喜皇子、

○源脩、九月盡宴ニ列シ、琵琶ヲ彈ズルコト、延長四年九月二十九日ノ條ニ、歌合ノ日、琵琶ヲ彈ズルコト、本年三月三十日ノ條ニ見ユ、

八日、丙午、左大臣實賴、納言ヲシテ、遞ニ官奏ニ勤メシメンコトヲ請フ、

〔西宮記〕七　臨時甲　官奏　○前田家本　天德四年七月八日、左大臣（實賴）令右大辨賴忠朝臣、奏請令納言遞勤官奏狀、納表減、（緘カ）

十日、戊申、月次、神今食祭ヲ追行ス、是日、伊勢臨時奉幣アリ、

〔日本紀略〕村上天皇　七月十日、戊申、月次、神今食也、內裏依丙穢被付諸司、又被副奉伊勢臨時幣帛、

〔西宮記〕臨時一　臨時奉幣　○前田家大永鈔本　天德四年七月十日、於神祇官、行月次及神今食等祭、去月依穢延引、又奉別幣太神宮云々、令文範朝臣仰民部卿藤朝臣（在衡）、可令擇今日奉幣時事、藤原朝臣令藏人守仁奏宣命案、申二點發遣幣使、依內裏爲丙穢、

穢ニ依リ大極殿ニ御セズ

紫宸殿ニ於テ御祈

內裏穢及ビ大臣輕服ニ依リ美濃守所進ノ年料紙ヲ宣命料紙ニ用フ

在外ノ內記宣命ヲ書ス

不參八省、裹調如例、民部卿藤原朝臣、著左衞門陣座、藤原朝臣觸內裏穢、仍著陣座行事、延喜十九年例云々、召使王（忠望王）於陣外、以在外少內記時文書宣命、內裏穢時、或召大臣家紙、或令進圖書紙、而大臣輕服也、其室物有（家カ）疑慮、又圖書忽不進、于時美乃守眞材在京、仍令進年料內紙宛此料、於一本御書所書之、更不奏、便授使者云々了、於南殿祈伊勢大神也、

〔北山抄〕六　備忘略記　奉幣諸社事　天德四年七月十日、行月次祭、奉別幣於太神宮云云、民部卿藤原朝臣令奏奉幣時文、申二刻、藤原朝臣令奏宣命案、依內裏穢、不御八省、藤原朝臣著左衞門陣、藤原朝臣觸內裏穢、他納言或服或穢假、故依延喜十九年等例、行事、召忠望王於陣外、以在外內記、書宣命、先例、或召大臣家紙、或令進圖書寮紙、而大臣輕服、寮不能忽進、于時美濃守眞材在京、仍令進年料之內、於一本御書所書之、更不奏、便授使者、

〔北山抄〕二　年中要抄下　六月　十一日神今食事　戌刻、御腰輿、幸中和院、內侍司印櫃、以此稱契櫃之由、見天德四年御記、

〔菊亭文書〕一　勘例　一觸穢上卿行奉幣例

天德四年七月十日奉幣、依內裏丙穢、於左衞門陣發遣、上卿民部卿觸內裏穢間、依無他上卿、依延喜十九年例、著左衞門陣行之、

十七日、乙卯、炎旱ニ依リテ、石淸水等十五社ニ奉幣使ヲ發遣ス、

内裏穢アリ　延喜十五年ノ例

〔日本紀略〕村上天皇　七月十七日、乙卯、奉幣諸社、石、賀、栢、平、稻、春、原、神、上、和、廣、龍、住、丹、貴、內裏有穢之間、依延喜十五年九月七日例、於左近衛陣發遣之、

〔祈雨記〕七月又炎旱、諸社奉幣○略中如常、

山城國神泉苑ノ水ヲ請フ　炎旱久シキニ亙ル

十九日、丁巳、大和室生龍穴ニ於テ、讀經ヲ行ヒ、雨ヲ祈ル、

〔日本紀略〕村上天皇　七月十九日、丁巳、爲祈雨、有龍穴讀經、

〔祈雨記〕七月又炎旱、○略中龍穴御讀經等如常、

○炎旱ニ依リテ、御卜ヲ行ハシムルコト、五月十三日ノ條ニ見ユ、

二十三日、辛酉、山城國ヲシテ、神泉苑ノ水ヲ汲マシム、

〔日本紀略〕村上天皇　七月廿三日、辛酉、山城國申請神泉池水、自今日三箇日給之、

三箇日

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　七月廿三日、辛酉、勅云、炎旱既久、依例遣少納言、放給神泉苑池水、

二十五日、癸亥、陰陽寮ヲシテ、神泉苑ニ雩祭ヲ修セシム、

〔日本紀略〕村上天皇　七月廿五日、癸亥、自今日三箇日之間、陰陽寮於神泉苑有雩祭、

作者菅原文時　少ニシテ大學ニ入ルル　寮試ニ及第ス　散位ノ勞七年　王道ノ偏頗ナキヲ仰グ

二十六日、甲子、炎旱ニ依リテ、山陵使ヲ發遣ス、

〔日本紀略〕村上天皇　七月廿六日、甲子、依炎旱、發遣山陵使、山階（天智）、柏原（桓武）、深草（仁明）、後田邑（文德）、後山階等也、

前越前權守平兼盛、勘解由次官等ノ闕ニ任ゼラレンコトヲ請フ、

〔本朝文粹〕六申官僚奏狀中　請殊蒙鴻恩、被拜勘解由次官幷圖書頭等闕狀　菅三品（文時）

右兼盛少日入學、多年編蒲、適奉寮試、已以及第、於是龍門浪峻、鱗飛年遙、俄變本望、纔關氏爵、天曆四年、拜任越前權守、秩滿解任、進放還畢、任中之間、所成功課、具錄事狀、上奏先畢、爾來散位之勞、七年于茲、同時拜官之人、後年預爵之輩、或踏青雲之色、或振玉佩之聲、兼盛獨漏明時之恩、徒老白屋之睡、寔雖知天運之有限、何不仰王道之無偏、以職試臣者君恩也、依恩致功者臣職也、拔良將於卒伍、擇賢佐於民黎、謀略應機而存、績行當事而見、其志合者、風雲之感忽至、其節立者、虎鼠之用自分、兼盛備非文吏、守乖武官、鳳闕曉星、長失秉燭之志、龍庭夜月、空忘鳴絃之勤、忠依何而顯、恩依何以加、徒抱勁草之節、多送疾風之秋、爰

暗室燈滅、漏屋風寒、欲卜頭陀於山林、則人臣未見任意之禮、擬思遊蕩於江湖、則王法重存出關之禁、只有籠鳥戀雲之思、未免轍魚近肆之悲、方今聖日雲暖、鳥雀高翥飛揚之翅、恩波涯遙、鱗甲皆逞踊躍之情、兼盛同遇一聖之化、何抱多年之愁、望請殊蒙鴻恩、被拜件闕、將盡奉公之節、兼盛誠惶誠恐謹言、

天德四年七月廿六日　　從五位上平朝臣兼盛（上脫カ）

二十七日、乙丑、中納言藤原師尹ヲ冷泉院別當ニ補ス、

〔西宮記〕臨時二後院司事　或上卿奉勅仰預、預書下宣旨、（○略）（中）天德、或奉大臣仰、別當宣旨事、天曆、天德、

天德四年七月廿七日、左大史我孫有杪奉、右中辨菅原文時傳宣、（左カ）（實弱）右大臣宣、奉勅、中納言藤原師尹、宜爲冷泉院別當者、下藏人平貞行、

二十八日、丙寅、季御讀經、

〔日本紀略〕村上天皇　七月廿八日、丙寅、季御讀經、

二十九日、丁卯、天台座主延昌ヲシテ、延曆寺大日院ニ熾盛光法ヲ修シテ、天變ヲ祈禳セシム、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　七月廿九日、丁卯、於大日院、令僧正延昌修熾盛光法、限以七日、爲除天變也、

〔濫觴抄〕下　熾盛光法　同（天德四年）七月廿九日、丁卯、於大日院、七箇日修之、爲除天變、延昌僧正爲阿闍梨、

〔元亨釋書〕二十五村上　資治表　天德四年○略中七月、大日院修熾盛光法、攘災也、

○和漢合符、異事ナキヲ以テ略ス、大般若經ヲ紫宸、清涼兩殿ニ轉讀シテ、疾疫ヲ祈禳セシムルコト、六月十四日ノ條ニ見ユ、

左近衛中少將障アリ

重服ノ中將ヲシテ御馬ヲ取ラシム

八月大戊辰盡朔

七日、甲戌、甲斐勅旨駒牽、

〔西宮記〕八月駒牽次　御記云、天德四年八月七日、左大將藤原朝臣(顯忠)遣外記、就藏人申云、可迎今日駒、左近中少將(伊尹、伊陟)、或暇、或重服、不迎云々、令雅材仰左中將伊尹、ーー申云、重服者不供此役、加以私鞍具被寮御馬、於事無便、然間御馬牽來、若被免迎役、將供分取事、仰依請云々、侍仁壽殿、令召左(實賴)大臣、ーー參上、次牽御馬、覽了、仰大臣召春宮亮伊尹(延光カ)、取牽分馬一疋、次大臣召左中將伊尹、左馬頭有年、右中將元輔、右馬助國興、分取御馬訖、

天德四年八月七日、左中將伊尹重服、取御馬、依无他將、

〔西宮記〕臨時十駒迎事　雖重服人、無他將者猶可取、天德四年八月七日、於仁壽殿前、取眞衣野御馬、時左中將伊尹例也、

〔北山抄〕二年中要抄下八月七日牽甲斐勅旨御馬事　重服次將取例、天德四年八月七日、眞衣野御馬、於仁壽殿令分取、左中將伊尹令申云、重服者不從此役、加以私鞍具、被寮御馬、於事无便、被免迎役、將供分取事、仰依請、

〔北山抄〕八羽林要裏書　重服人取御馬例

天德四年八月七日、於仁壽殿前、謙(伊尹)德公爲左中將之時、被取眞衣野御馬也云云、

〔江次第〕八月八月信濃御馬　重服次將取例、天德四年八七、

九日、丙子、僧綱召、

〔日本紀略〕村上天皇　八月九日、丙子、以大僧都寬空爲權僧正、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　八月九日、丙子、大僧都寬空爲權僧正、少僧都證蓮爲大僧都、律師智淵爲權少僧都、大法師觀理、昭日、竝爲權律師、

〔僧綱補任〕二〇興福寺本

大僧都寬空　八月九日任權僧正、東寺別當〔法務五十七〕(朱書下同ジ)

少僧都澄蓮(證カ)　同日轉任大僧都〔八十〕

律師智淵　八月九日任權少僧都〔七十六〕

權律師光智　同日轉正〔六十四〕

名祐　同日轉正〔八十三〕

觀理　八月九日任、三論宗、東大寺、已講勞、延敝僧都入室、平氏〔六十六〕

昭日　同日任、天台宗、延曆寺〔七十五〕

大學寮ニ犬死ノ穢アリ

內論義紫宸殿ニ出御

觸穢ノ時中丁ノ日ヲ用フ

仁壽殿出御

御馬ヲ取ラシム

一心房律師ト號ス

十日、丁丑、穢ニ依リテ、釋奠ヲ延引ス、尋デ、之ヲ追行ス、

〔日本紀略〕村上天皇　八月十日、丁丑、釋奠延引、依本寮犬死穢也、

廿日、丁亥、釋奠、

廿一日、戊子、內論議、天皇出御南殿、給祿如常、

〔左經記〕長元七年八月十日、丁卯、○中略隆佐朝臣被仰云、今日釋奠祭如何、有禁中觸穢之中、○中略如此之時、有用中丁之例乎、申云、天德年(四脫カ)有大(內)裏穢、用中丁、依彼例可被行歟者、

十一日、戊寅、定考、

〔日本紀略〕村上天皇　八月十一日、戊寅、定考、

甲斐穗坂駒牽、

〔西宮記〕八月駒牽次　天德四年八月十一日、於仁壽殿覽穗坂御馬、以春宮亮延光、令取御馬一疋、被奉歟、

權律師昭日寂ス、

〔寶幢院撿挍次第〕慈念僧正代昭日阿闍梨　天慶十年二月十三日任、天德四年八月八(九)日任律師、同十一日入滅、七十五、一心房律師、慈念(延昌)僧正弟子、十四年、

官歷

西塔院主

陽生ヲ西塔院主ニ補ス

〔僧綱補任〕二○興福寺本　權律師昭日　同日(八月九日)任、天台宗、延曆寺(朱書)七十五、同廿九日入滅、近江國人、能麻氏、觀久(无カ)大德入室、

〔天台座主記〕一○華頂要略百二十所收　西塔院主　內供奉十禪師阿闍梨昭日、號一心房律師、近江國人、大友氏、圓澄座主、延秀井等孫弟、觀無人法師弟子、延喜七年四月十九日受戒、天慶十年二月廿二日、補任院主、慈念轉座主替、追補之年七十一、萬五十一、天曆元年閏七月廿二日、爲延曆寺惣持院阿闍梨、延昌奏、同八年五月廿日、補內供奉十禪師、天德四年八月九日、任權律師、同月十一日入滅、

〔九曆〕天曆元年閏七月廿二日、以西塔院主照(昭)日、可爲傳法阿闍梨之宣旨被下云々、

〔法家相承次第〕諸門諸寺十西塔院主次第　昭日阿闍梨慈念僧正代、　天慶十二年(十年二月十)十月三日(三日)任、天德四年八月八(九)日任律師、同十一日入滅、七十五、一心房律師、慈念僧正弟子、十四年、

〔天台座主記〕二○華頂要略百二十所收　西塔院主　內供奉十禪師阿闍梨陽生月性房、　天德四年八月十五日補任院主、昭日替、年五十六、萬三十五、

天德四年八月十一日

〔寶幢院撿挍次第〕慈念僧正代、阿闍梨歟、陽生律師　天德四年八月十五日任、

○昭日ノ寂日、僧綱補任二十九日ニ作ル、今寶幢院撿挍次第、天台座主記、法家相承次第ニ據リテ揭書ス、十五日、陽生ヲ西塔院主ニ補スルコト、便宜合敍ス、

内親王ニ蒔繪匣銀器等ノ調度ヲ賜フ

乳母ニ祿ヲ賜フ

十四日、辛巳、緝子内親王、初メテ謁見アラセラル、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　八月十四日、辛巳、勅令藏人永保、賜緝子内親王蒔繪匣調度一具、銀器一具、屏風四帖、亥二刻、件内親王始謁主上、

〔西宮記〕十一臨時戌○前田家本　親王對面　天德(裏書)四年八月十四日御記云云々、令藏人永保、賜緝子(内脫カ)親王蒔繪匣調度一具、銀器一具、屏風四帖、亥二剋緝子内々々始謁見、同剋就帳中倚子、藏人等預撤御座、立倚子、内々々即進東廂、自南第四間板(マヽ)地禮、了典侍灌子相□(朝臣カ)以白褂一重賜之、藏人等以襖子賜乳母三人、々別各一領之、

二十二日、己丑、大納言藤原顯忠ヲ右大臣ニ任ズ、尋デ、左近衞大將ヲ兼ネシム、

〔日本紀略〕村上天皇　八月廿二日、己丑、大納言藤原朝臣顯忠爲右大臣、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　八月廿二日、己丑、大納言從二位藤原顯忠朝臣任右大臣、年六十三、故左大臣時平二男也、

〔公卿補任〕五

右大臣從二位藤顯忠、六十三、八月廿二日任、同廿五日左大將如元、

大納言正三位藤在衡、六十九、八月廿二日任、同廿五日民部卿如元、

權大納言正三位藤師尹、四十一、八月廿二日任、右大將、春宮大夫如元、

中納言從三位藤師氏、四十八、八月廿二日轉正、左衞門督如元、

江維時、七十三、八月廿二日任、

參議從四位上藤朝成、四十四、勘解由長官、備中守、八月九日兼近江守、

源重信、三十九、天德四八廿二任參議、修理大夫如元、

藤伊尹、三十七、八月九日兼伊豫守、八月廿二日參議、左近權中將如元、同廿五日追給左近中將、伊與守等兼字、

藤原伊尹ニ追ツテ兼字ヲ賜フ

雨儀

〔西宮記〕二年中行事正月下大臣召○前田家本　天德四年八月廿二日、以大納言顯忠々々任右大臣勘大臣薨後任替之例、或經三四年、或經一兩年云々、云々、午時降雨、仰裝束司、改雨儀、申一刻坐南殿廂簾内大床子左右近陣階下、依前例、内辨立東軒廊西、自左近陣進來、違例之、昇東階、著南廂東第二間兀子、云々了、大臣授宣命雅信々々、下殿立軒廊下、左大臣(實賴)下殿、就

新任大納言以下拜舞ス
左衛門督藤原師氏兼字無キヲ以テ帶劔ヲ解ク
右大臣奏慶
新任大饗
中納言師氏ニ兼左衛門督ノ宣旨ヲ下ス

宜陽殿西廂列、經東軒廊、更南折、自親王後就列、次雅信〻〻就同殿版云々、如例、新任者不拜、在本列、先是檢先例、仰可立新任者標之由、而改裝束、爲雨儀之時、依宜陽殿庇窄狹、不能立新任標、仍任人等、猶在此列、是天曆元年等例也、訖雅信經親王等後南行、就本列、次親王以下退出、新任大納言藤原〻〻(在衛)、進就大納言標、中納言藤原〻〻(師氏)乍在本位標、解帶劔、以無兼左衛門督字歟、中納言大江〻〻(維時)進就中納言標、共拜舞、了退出、次云々了、右大臣(顯忠)候射庭邊、令右近少將助信申慶賀之由、大臣又令申云、賜御酒公卿事、卽令助信仰左大臣、可聽右大臣新任饗事、宜令仰有司、廿五日云々(加記イ)、又中納言藤原朝臣、自權轉正、若可仰兼左衛門督宣旨否、宜勘申前例、令申云、自權轉正、以宣命任之時、兼字宣旨忽無可准例、令仰云、除目轉正之時兼字例可相准、宜令勘申、暫大臣令奏、大外記傅說勘申權中納言轉正時、付兼字例文、令仰云、此已勘例也、中納言藤原朝臣、宜下兼左衛門督宣旨之、

〔江次第〕十七立后事　大臣給宣命、給之退、於東階下歸向揖、立軒廊西第一間北邊、或二間、○中略、同(天德)四年任大臣日、雅信卿立一間、

〔小右記〕長德二年七月廿日、戊午、○中略是日任大臣、○中略任□(ヘカ)外次第退出、時中卿離中納言標也(加カ)大納□(言カ)標、惟仲加中納言標、余(實資)跪置笏解劔、大納言以下拜舞、次第退出、權轉正之時、解劔儀、見天德故殿御日記、師氏卿轉正之時例也、時被勘代々、恆佐、師尹等例也、

○九日、藤原朝成等ノ任官、便宜合敍ス、

二十七日、甲午、文章生試、

〔類聚符宣抄〕九文章生試

學生二世行正王　蔭子藤原行葛

右大納言源朝臣高明宣、奉勅、件等人宜仰式部省、令奉文章生試者、

天德四年八月廿七日　少外記海正澄奉

二十九日、丙申、諸社ニ奉幣シ、神寶ヲ獻ズ、

〔日本紀略〕村上天皇　八月廿九日、丙申、奉幣諸社、幷獻神寶、

九月小盡戊戌朔

四日、辛丑、除目、

〔日本紀略〕村上天皇　九月四日、辛丑、除目、

〔公卿補任〕六安和二年　參議正四位下藤兼通、四十五、九月四兼春宮亮、(天德四年)(中宮權大夫)權大夫如元、昇殿、

〔公卿補任〕六寬和二年　非參議正三位源時中、四十五、九月四日右近將監、

〔西宮記〕二除目　年中行事　正月下　○前田家本　同年九月四日除目云々、中宮權大夫藤原〻〻兼通、爲兼春宮亮、依(マヽ)故兼兩院之例任之、

供養願文作者藤原後生

九日、丙午、權僧正寬空、蓮臺寺ヲ供養ス、

〔日本紀略〕村上天皇　九月九日、丙午、權僧正觀(寬)空供養北山蓮臺寺、

〔本朝文集〕三十六　蓮臺寺供養願文　代東寺法務寬空、

藤原後生

權僧正法印大和尙位某(寬空)、合十指掌白佛而言、夫赴長途者、必待逐日之蹄、渡巨海者、只用飛雲之力、小僧懇念、唯佛是憑、小僧垂髮(鬱カ)之比、昔倍(陪)禪(字多)定聖主之宮、成人之後、終入釋迦如來之室、三密觀行、奉勅詔而染心、五部眞言、寫法身而窺趣、

北山ニ精舍ヲ建テ五智如來像ヲ造ル

父母ノ爲メニ最勝王經法華經等ヲ書寫ス

自淵水浪驚、法皇遺歸泉之恨、橋山雲去、□隔晏駕之秋、既事二代之聖朝、忝爲諸僧之上首、荷恩微力、如戴山之鼇、飽德孤心、類飮河之鼠、方今齡及月制、位極沙門、瞑目之期、非朝卽夕、因茲北山之脚草創一堂、其名曰蓮臺寺、是則師資相承之精舍也、雕刻五智之妙相、鑄成九乳之洪鍾、粉壁舒光、疑留秋月於苔徑、畫梁有色、如鏁晴虹於松窓、地近皇城、取詣闕之便也、寺遠稱(マヽ)望、表養性之精也、爰抽多年之蓄懷、開一朝之法會、節在重九、折黃菊而代金、志無二三、採赤萸而爲玉、以獻眞山之仙、以施鴈門之師、抑小僧昔延喜之初、爲亡母、奉寫妙□(法)□(華カ)經、未展講席、天德之比、爲先考、奉寫最勝王經、宜揚題名、故勵丹誠共奉供養、但彌陀心經一卷者、同爲先妣所奉寫也、以此一念、將導雙魂、亦別捨十具之梵衣、助龍象之敬禮、唱一部之音樂、備諸天之降臨、鶴琴異絃、不異蔡伯倫之居吳郡、鳳笙傳曲、誰尋王子晋之在洛水、況復貂蟬接膝、朱紫連袖、聞鳧鐸而鴈行、對鵝王而鳩集、蓋小僧生前之長襟也、噫一賢劫後、誰無利生之心、四弘誓中、唯企出世之計、然則今日小善、可謂無遮、仰願之分三、道之有四、俱依平等之本執、悉植菩提之善因、敬白、

天德四年九月九日

〔中右記〕嘉承二年七月二日、乙卯、〇中略抑香隆寺者、本號蓮臺寺、本是寬空僧正私房、村上御時成堂舍、申寄御願之由、寺僧所談也、

本ト寬空ノ私房
舊名香隆寺

〔仁和寺諸院家記〕〇山城　香隆寺（朱書下同ジ）「或云、但非昔香隆寺歟、私云、昔香隆寺改蓮臺寺、中古又號香隆寺之寺別有之歟、廣可考之」

相承次第
御願寺ト爲ス

拾要詮云、香隆寺者、靈巖圓行弟子建立也、次第相承、神日律師傳寬空僧正、僧正改寄天曆御願、名蓮臺寺云々「私云、此寺額號上品蓮臺寺、或云、聖德太子御筆云々、謬說歟」（宗）古德記云、蓮臺寺天德四年九月九日供養願文云、是則師資相傳之精舍也、

蓮臺寺ノ所在

〔參考〕

〔山城名跡巡行志〕一葛野郡　西京寺社名所古跡　上品蓮臺寺　金寶山九品三昧院、一名香隆寺、

在千本通北頭、丹州街道也、總門在南北、門內往還也、眞言宗、本坊東向、本尊地藏、太子作、弘法像自作、額寬平法皇宸筆、在庫藏、開基聖德太子、中興寬平法皇、又寬空寬朝住當寺、香隆寺者舊在松原村、屬仁和寺、荒廢後資財流記入當寺、今復散逸、開基寬空、天德四年建、

〔山城名勝志〕八葛野郡二　香隆寺〇中略按、此寺元在等持院東、松原村地、或說、香隆寺ヲ蓮臺寺ト改ト謂リ、然共、寬和三年、有火災、東宮廳犬死穢內裏及ビ大極殿ニ於テ奉幣使ヲ發遣ス

蓮臺寺ニ二寺アリトノ說

紫宸殿出御

御物忌ニ依リ大極殿ニ御セズ

十日、丁未、駒牽、

〔日本紀略〕村上天皇　九月十日、丁未、駒牽、

十一日、戊申、伊勢例幣、

〔日本紀略〕村上天皇　九月十一日、戊申、伊勢例幣、

〔西宮記〕九月例幣　天德四年九月十一日御記云、依物忌不御八省、藏人雅材申云、東宮廳有犬死穢、而彼所人入交內裏云々、有仰、召左大臣（實賴）家紙、充宣命紙、竝不奏草、淸書等、大臣令申云、昨日令奉犬產、在衛令奉也、云々、民部卿藤原朝臣（在衛）於八省發遣奉幣使云々、

〔北山抄〕二年中要抄下十一日奉幣伊勢太神宮事　當日早旦、遣內侍、女藏人各一人於八省院、令裹御幣、供御湯畢、著神態御服、〇中或云、有別辭者、奏草幷略ス、御南殿、〇略淸書、无者、只奏淸書也云々、

〔菊亭文書〕一勘例　一觸穢上卿行奉幣例

天德四年九月十一日、內裏有穢氣、然而幣物者之置八省院、又供奉人不參內、仍不止奉幣、諸穢（マヽ）卿見著爲始也、

天德四年九月十日　十一日

觸穢ノ中將ヲシテ取ラシム

十三日、庚戌、上野駒牽、

〔北山抄〕二年中要抄下八月七日牽甲斐勅旨御馬事　觸穢次將取例、天德四年九月十三日、牽上野御馬、左中將重光依召參入、而申觸穢由、依例不著座、於陣外令取如何云々、依請、

〔江次第〕八七月信濃御馬　觸穢次將取例（天德四年）同九十三

十六日、癸丑、豐受大神宮神嘗祭、

西寶殿開カズ御鞍ヲ外幣殿ニ納ム

〔伊勢公卿勅使雜例〕寶殿不被開給例

天德四年九月、神嘗祭、豐受御鞍奉納、西寶殿不被開、仍奉納外幣殿

○本書日ヲ闕ク、姑ク恒例ニ據リテ揭書ス、

中納言大江維時等ノ昇殿ヲ聽シ、右兵衞督源延光ヲ藏人頭ニ補ス、

〔公卿補任〕五　中納言從三位江維時、七十三、九月十六日昇殿、

〔公卿補任〕六天延三年　參議從四位上藤爲輔、五十六、天德四九十六昇殿、

〔公卿補任〕六天元四年　參議正四位下大江齊光、四十八、同年（天德四年）九十六昇殿、

〔公卿補任〕五康保三年　參議從四位上源延光、四十、同九月十六日藏人頭、三十四、○職事補任同ジ、

十九日、丙辰、服御常膳ヲ減ジ給フ、

貞元錄一切經五千五百九十六卷忠平書寫セシムル本ヲ大貳小野好古ニ付シテ下ス

〔日本紀略〕村上天皇　九月十九日、丙辰、省減服御常膳、

一切經證本ヲ大宰府ニ下シテ、書寫セシム、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　九月十九日、丙辰、太宰府言、貞元錄一切經五千五百九十六卷、內依無證本、不堪書具、勅云、延命院故太政（忠平）大臣令書本等、暫付大貳好古（小野）朝臣下遣、可令寫者、

二十一日、戊午、參議藤原元名ヲシテ、宮內卿ヲ兼ネシメ、大炊助忠明（姓闕ク）ヲ作物所預ニ補ス、

宣旨ヲ待タズシテ仕フ

〔公卿補任〕五　參議從四位上藤元名、七十六、九月廿一日兼宮內卿、

〔西宮記〕臨時一諸宣旨　天德四九廿一、大炊助忠明、如舊補作物所預、轉助之後宣旨下、而不待宣旨尙仕、仍重下宣旨、

〔西宮記〕臨時五所々事　天德四年九廿一、令藏人爲光仰大炊助忠助（明カ下同ジ）、如元可爲作物所預事、忠助爲大炊允之時、爲此所預、轉助之後、依前例下宣旨云々、

右大臣顯忠、上表シテ職ヲ辭ス、聽サレズ、

〔公卿補任〕五　右大臣從二位藤顯忠、六十三、同（八月）廿五日左大將如元、辭職上表、初度、不許、

初度表
作者菅原文時

〔本朝文粹〕五表下辭左右大臣　爲富小路右(願忠)大臣辭職第一表　菅(文時)三品

臣顯忠言、伏奉去月廿二日詔命、以臣爲右大臣、○其條アリ、忽望寵樹、遐邇眼驚、獨立恩涯、進退股慄、臣某中謝、臣才非越倫、智無周物、謬承餘慶於累葉之下、猥登不次於群英之前、昔見喉舌之星、夜思朝務、今在心膂之地、秋履春冰、夫德碩者、蹤雖隱而名自顯、器俊者、齡雖傾而用不衰、磻溪之風雲暗應也、七年望而廻車、菑川之巖穴盡延也、八旬近而開閣、如臣之老者、有何所堪哉、聲聞本自寂寞、年鬢早以蹉跎、無力之可以致効、無慮之可以立功、世論定應責臣實賓、鬼瞰必不許臣虛受、伏願、陛下廻日月之光、改雲雨之潤、更擇忠信於十室、莫關愚庸於三旌、不任荷懼屏營之至、謹抗表陳讓以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

天德四年九月廿一日　右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣上表

○公卿補任、八月二十五日ニ作ル、今、本朝文粹ニ據リテ揭書ス、

二十二日、己未、僧四十口ヲシテ、清涼殿ニ、大般若經ヲ轉讀セシメ、天台座主延昌ヲシテ、天變消除ノ爲メ、仁壽殿ニ、熾盛光法ヲ修セシム、

内裏燒亡ニ依リ修法ヲ左近府大將曹司ニ移シ行フ

御讀經ヲ大極殿ニ移シ行フ

〔日本紀略〕村上天皇　九月廿二日、己未、於南(中カ)殿讀經、四十僧、廿五日、壬戌、去廿三日御讀經、遷大極殿、今日結願、

〔延喜天曆御記抄〕○柳原家記錄百三十一所收　御修法事付七高山御修法、

同年(天德四年)九月廿二日、己未、始從今夜、於仁壽殿、令僧正延昌修熾盛光法、爲消除天變也、廿四日、遣藏人忠君、仰僧正延昌、於左近府大將曹司、可修了御修法事、僧正避火、在達智門邊人宅、仍遣仰、件曹司與此間相近、故點定之、○續左丞抄所載御記ヲ以テ校ス、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　九月廿二日、己未、請四十口僧於清涼殿、令轉讀大般若經、始自今夜、於仁壽殿令僧正延昌修熾盛光法、爲除天變災也、廿四日、辛酉、令延光朝臣仰云、○中略遣藏人忠尹(君)、仰僧正延昌、於左近衞府大將曹司、可修畢御修法、御讀經於八省修畢、可宜、

〔元亨釋書〕二十五天曆皇帝　資治表六　九月、轉大般若經于清涼殿、昌師修法于仁壽殿、

九月、沙門四十人讀經於清涼殿、及仁壽殿熾盛光修、共攘災也、

二十三日、庚申、内裏燒亡ス、仍リテ、職曹司ニ遷御アラセラル、

宣陽門內北掖陣ヨリ出火

累代ノ珍寶多數燒失ス

紫宸殿ノ庭ニ出御

左近衛中將源重光劍璽筥ヲ持シテ相從フ

火溫明殿ニ移ル

清涼殿ニ還御

火ヲ神嘉殿ニ避ケ給フ

皇太子侍臣ニ抱カレテ御來著

太政官朝所屋ニ幸シ給フ

〔日本紀略〕村上天皇　九月廿三日、庚申、今夜亥三剋、內裏燒亡、火出自宣陽門內方北掖陣、不出中隔外、天皇先御中院、次御朝所、頃之、御職曹司、定行之寮警固使□累代珍寶多以燒失、參議重信朝臣仰焰之間、一豎光、其躰如龍爛々、丑刻火止、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　御日記云、廿三日、庚申、此夜寢殿後、聞侍臣等走叫之聲、驚起問其由緒、少納言兼家奏云、火燒左兵衛陣門、非可消救、走出見之、火焰已盛、卽著衣冠、出南殿庭、左近中將重光朝臣持御劍、璽筥相從、卽遣人召御輿、不能早持來、又令侍臣取內侍所所納太刀契等、令權右中辨國光朝臣行撥殿廊救火事、而雜人甚少、無力救之、侍臣等言、火已著溫明殿、不能出內侍所所納大刀契等、又令召御讀經僧等立願、而火勢彌盛、延政門以南廊漸燒、烟滿承明門東邊、于時知災火不可止、更還清涼殿、經後涼殿及陰明門、微行到中院、留神嘉殿避火、此間心神迷惑、宛如夢裡、主殿官人持腰輿來、皇太子（憲平親王）被抱侍臣來著、左衛門督藤原朝臣（師氏）參入、仰向內裡令行救火事、次右大將藤原朝臣（師尹）參入、仰行取出鈴印鎰櫃事、次右大臣（顯忠）幷公卿等參來、依火勢漸近、右大將藤原朝臣相議、令幸太政官、卽乘腰輿、出中院、到太政官朝所屋、乍乘輦在板敷上、太子相從

更ニ職曹司ニ移御皇太子御同乘

人代以來內裏燒亡三度ナリ

仁壽殿觀音像燒失ス

平安遷都後百六十七年始メテ此災アリ

候同屋內、右大將藤原朝臣言、太政官自內裡當御忌方、又太白在此方、須移御職曹司、仍促御輿、向職曹司、皇太子乘車相從、召右大臣詔、朕以不德久居尊位、遭此災殃、歎憂無極、朝忠朝臣還來奏、火氣漸衰、不可延及八省、火起自亥四點、迄于丑四點、宜陽殿累代寶物、溫明殿神靈鏡、太刀、節刀、契、印、春興（鑰脫カ）、安福兩殿戎具、內記所文書、又仁壽殿太一式盤、皆成灰燼、天下之災无過於斯、後代之譏不知所謝、鈴辛櫃置御所內、印幷鎰辛櫃納外記局、人代以後內裡燒亡三度也、難波宮、藤原宮、今平安宮也、遷都之後、既歷百七十年、始有此災、○歷代編年集成、濫觴抄異事ナシ、

〔延喜天曆御記抄〕○柳原家記錄百三十一所收　十八日觀音供事

應和二年六月十八日、申刻始安置觀音像二躰仁壽殿、○中略去天德四年件堂持佛已燒亡、

〔延喜式〕四十二後附○公爵九條道實氏所藏　內裏燒亡年々

村上天德四年九月廿三日庚申夜、遷都以後始有此災、百六十七年、

〔源平盛衰記〕四十四　宮人曲幷內侍所効驗事

遷都ノ後百六十六年ヲ經テ、村上天皇ノ御宇天德四年九月廿三日子刻ニ、內裏燒亡、火ハ左衛門陣ヨリ出來タリケレハ、內侍所ノオハシマス溫明殿

南殿ノ櫻燒失ス
南殿ノ櫻ハ本ト梅樹明天皇仁改植シ給フトノ説
内裏燒亡ノ原因
玄象鈴鹿ヲ持出ス
直幹申文ハ取出タリヤト仰セラル
左衛門ノ陣ヨリ出火

モ程近カリケル上、如法夜半ノ事ナレハ、内侍モ女官モ參會ハス、内侍所ヲモ出奉ラス、小野宮急參給テ見給ヘハ、溫明殿ハハヤ燒ケリ、

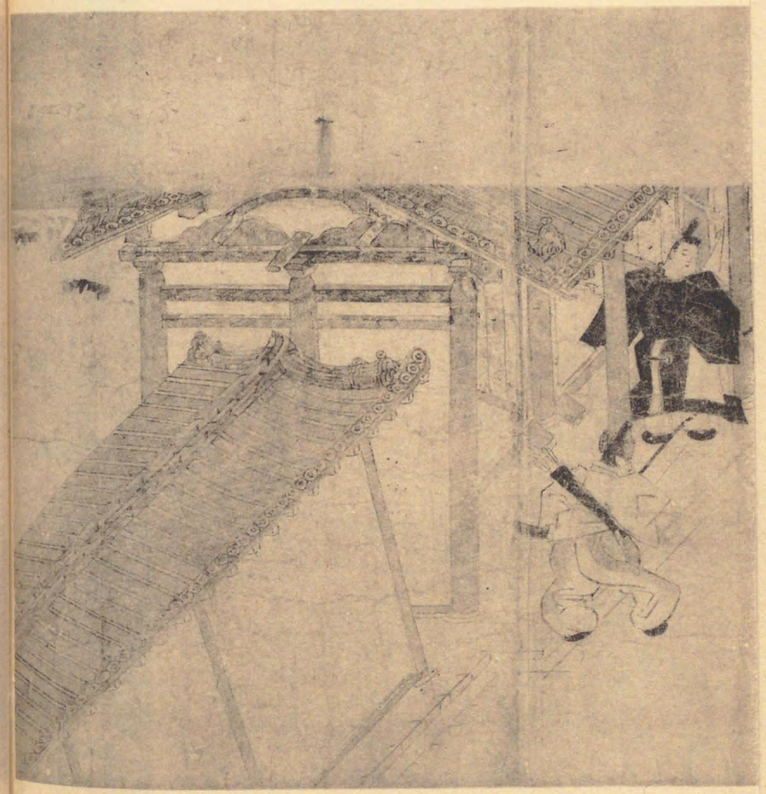
〔禁祕抄〕上草木　南殿櫻、在紫宸殿巽角、是大略自草創樹歟、〇中略天德燒失爲煨燼、

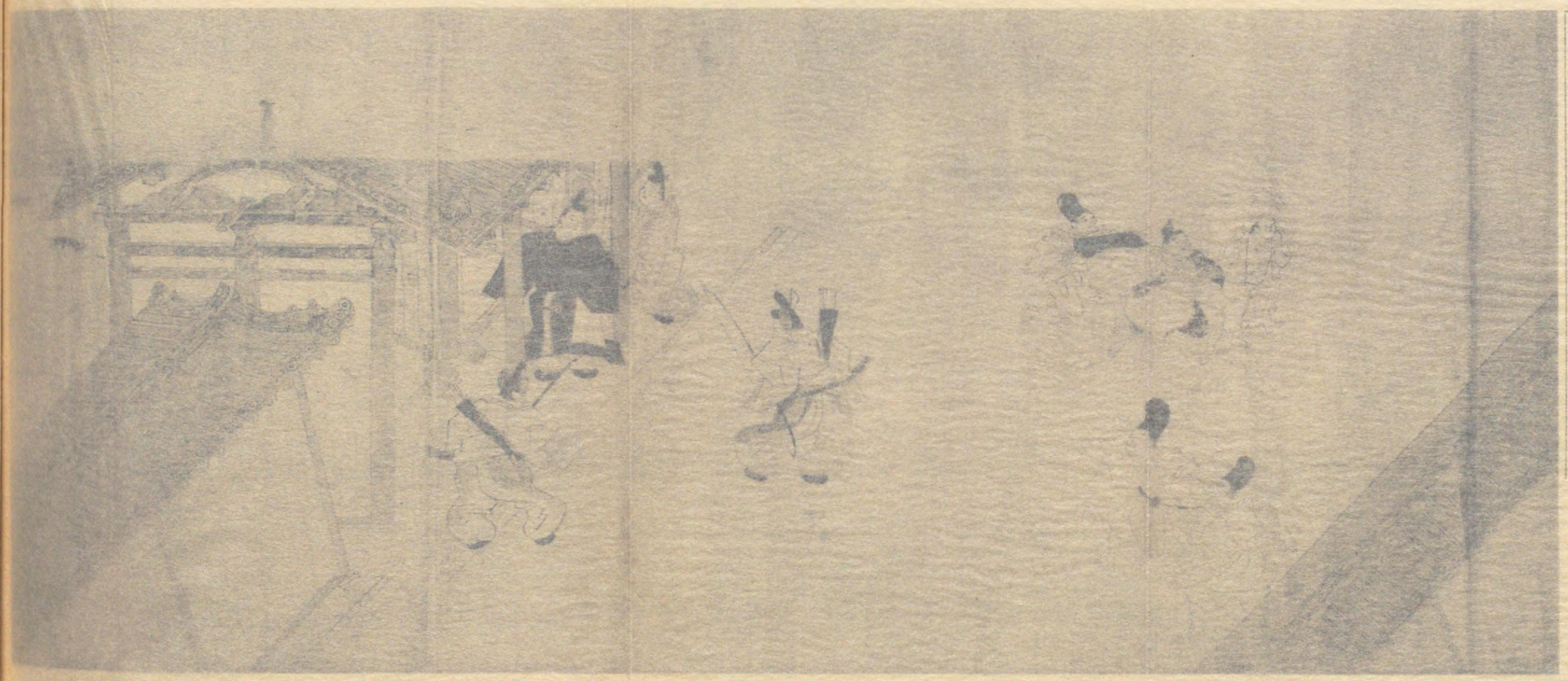
〔古事談〕六宅諸道　南殿櫻樹者、本是梅樹也、桓武天皇遷都之時所被植也、而及承和年中枯失、仍仁明天皇被改植也、其後天德四年九月廿三日、内裏燒亡ニ燒失了、

〔古事談〕三僧行　石山僧都云、村上御時、被修孔雀經法之間、烏入啄御明、差入檜皮之間、仍内裏燒亡云々、内裏燒亡初度歟、故被停止件法、

〔橘直幹申文物語繪〕〇伯爵酒井忠正氏所藏　後天德四年九月廿三日、子刻に大内火いできたりて、俄中院に御ゆきなりたりけるに、朝々代々の御わたりもの、御綺(倚)子、時簡、玄象、鈴鹿以下もちて參そ、先日奏覽の時、御氣色あしかりしかは、人〳〵をそれたりしに、今御尋こそいみしけれとて、よの人ありかたきことになん申あひたりける、其時のことそかし、火は左衛門の陣よりいできたりけれは、内侍所のおはします

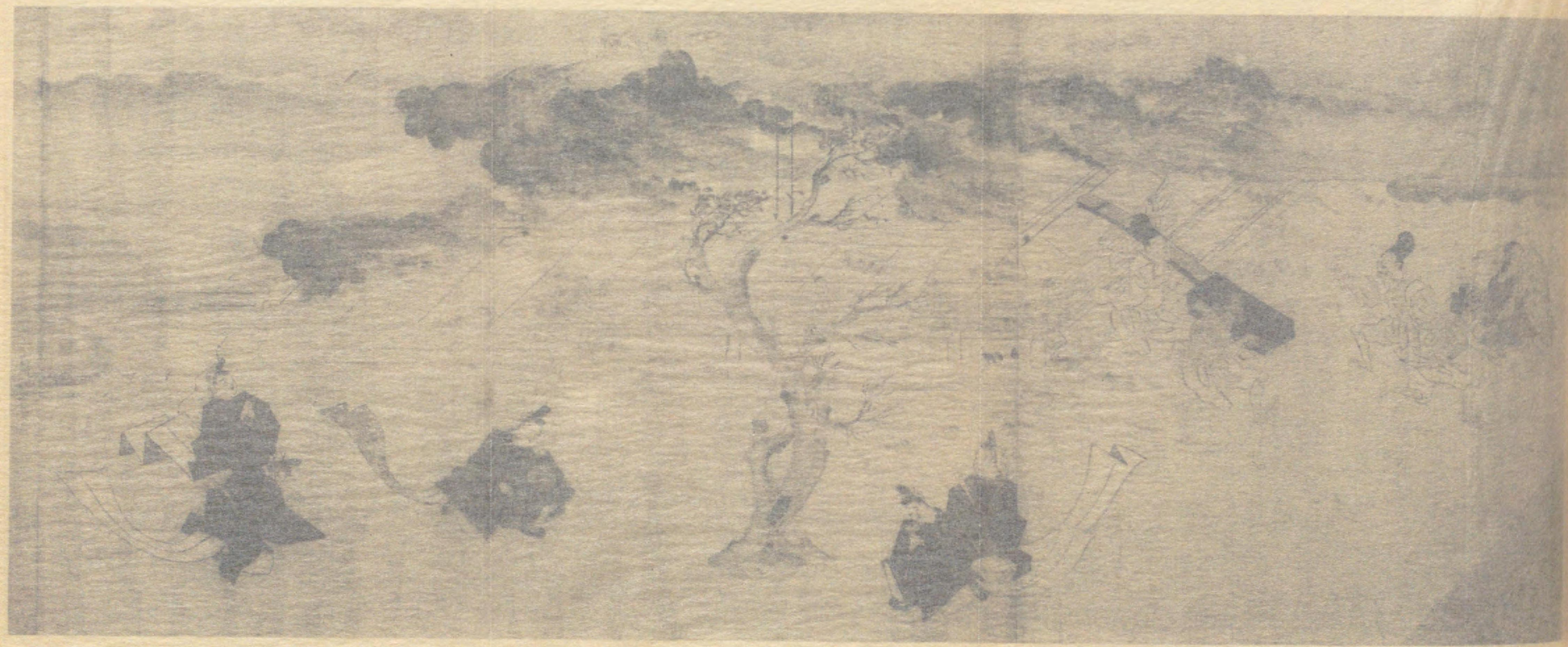
〇上略、橘直幹申文ヲ上ルコトニカ、八年八月九日ノ條ニ收ム、其ノ、天曆





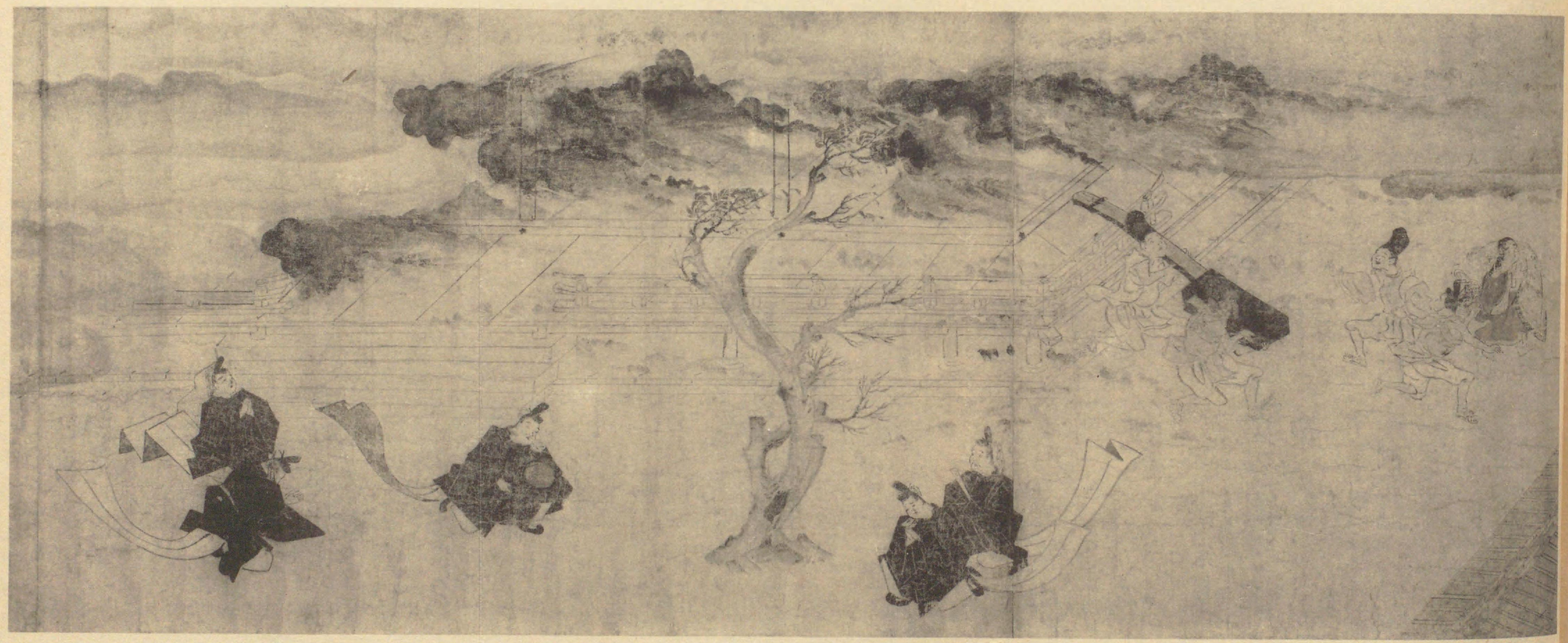
橘直幹申文物語繪　内裏燒亡ノ圖　伯爵　酒井忠正氏所藏

原寸　縦〇・三〇米



橘直幹申文物語繪　内裏燒亡ノ圖　伯爵　酒井忠正氏所藏

原寸　縦　〇・三〇七米



温明殿もほどちかゝりけるうへ、如法夜中の事なりしかは、内侍も女官も參あはすして、賢所をもいたしたてまつらす、少野宮殿（實頼）いそきまいり賜て、内侍所をみたてまつらせたまうに、わたらせ給はす、（下略、神鏡等ヲ灰燼中ニ索メテ獻ズルコトニカヽル、本月二十四日ノ條ニ收ム、）

○修理職、木工寮及ビ諸國ニ課シテ、内裏ヲ造營セシメ、又造内裏所別當ヲ補スルコト、本月二十八日ノ條ニ、源重光等ノ内裏防火ノ功ヲ賞スルコト、十月十八日ノ條ニ、恩詔ノコト、同月十九日ノ條ニ、伊勢、石清水等六社ニ奉幣シテ、内裏燒亡ヲ告ゲラルヽコト、十一月一日ノ條ニ、冷泉院ニ遷御ノコト、同月四日ノ條ニ、内裏燒亡ヲ山科、柏原、後山科ノ三陵ニ告ゲラルヽコト、同月二十三日ノ條ニ、内裏木作始ノコト、同月二十八日ノ條ニ、内裏燒亡ニ依リ、七道諸國ノ諸社ニ奉幣スルコト、十二月五日ノ條ニ、仁壽殿觀音像ヲ開眼供養スルコト、應和二年六月十八日ノ條ニ、紫宸殿ノ前庭ニ櫻樹ヲ植ウルコト、康保元年十一月是月ノ條ニ、橘樹ヲ植ウルコト、同二年三月五日ノ條ニ見ユ、

二十四日、辛酉、勅シテ、神鏡及ビ太刀契等ヲ灰燼中ニ索メシム、尋デ、之ヲ

縫殿寮ニ奉安ス、

〔日本紀略〕村上天皇　九月廿四日、辛酉、廢務三箇日、又昨夜鏡三、（和名加之古止古呂、）并太刀契不能取出、今日依勅令搜求餘燼之上、已得其實、但調度燒損、其眞猶存、形質不變、甚爲神異、卽大藏省（召脫カ）韓櫃令奉納之、

十月三日、己巳、縫殿大允藤文紀參申云、去月廿四日依宣旨、御坐內裏賢所三所、奉遷縫殿寮之間、內記奉納威所三所、一所鏡、件鏡雖在猛火上而不涌損、卽云、伊勢御神云々、一所眞形無破損、長六寸許、一所鏡已涌亂破損、紀伊國御神云々、太刀卅八柄之中、四柄自淸涼殿求出之、卅四柄自溫明殿求出之、其中有節刀、契七十四枚、皆魚形也、自背中別兩、各有銘、併全不損、長各二寸餘許、八枚金、十四枚銀、五十（二脫カ）枚銀塗物、又有金銀涌亂、一斗餘許也、左近少將源伊陟、將監藤原佐理、左（右カ）近少將藤原助信、將監源時中、藏人主殿助藤原爲光、出納雀部有方、女官等同以祓候云々、

八日、甲戌、外記史等見宮中灰燼之上有木印一面、其文有天下太平四字、參議好古云、其蕃客來時所用也、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　御日記云、〇略中九月廿四日、辛酉、令延光朝臣仰云、

寸頭レアドモ圓規并帶ニ露出ス　太刀四柄　清涼殿ヨリ四十四柄自溫明殿ヨリ出ヅ　木印灰中ヨリ出ヅ　印文天下太平

神鏡徑八小　節刀其中ニ在リ　契七十四枚皆魚形　近衛少將藏人女官等祓候ス

廢務三箇日　神鏡三面調度燒損スレドモ眞形變ゼズ

遣左右中少將鑿求溫明殿所納神靈鏡并大刀契等、〇中略、御修法ノコトニ條ニ收ム、重光朝臣來奏云、依火氣頗消、罷到溫明殿所求見、瓦上在鏡一面、徑八寸許、頭雖有小瑕、專無損、圓規并帶（帶カ）等甚以分明露出、俯破瓦上、見之者无不驚感、又求得大刀契等、以神鏡等安置縫殿寮高殿、〇歷代編年集成、濫觴抄異事ナシ、

〔小右記〕寬弘二年十一月十七日、辛酉、〇中略村上御記云、天德四季九月廿四（三）日燒亡云々、廿四日、重光朝臣申云、罷到溫明殿所求見、瓦上在鏡一面、其鏡徑八寸許、頭雖有一瑕、專無損、圓規并帶等甚以分明露出、緣破瓦之上、見之者無不驚感、（緣カ）又求得太刀契等云々、又以所求得大（金カ）銅魚形二隻、女官等或僞是赤神、只燒失、太刀四柄、室握（遺カ）種々燒（並カ）小調度、金銀銅魚符契合卅九隻、或銘發兵解兵符其國、或銘其官契、皆作魚形、相合如木契、眞偽、云々、廿五日、淸好古云、其蕃客來時所用也、

〔江次第〕（實朝）內侍所御神樂　十一月十二　十一面中、伊勢太神、紀伊國日前國懸（無）神、可有節刀、又加金銀銅等小調度、云々、故殿（實朝）御日記云、恐所雖在火灰燼之中、曾不燒損云々、鏡三面中一面ハ日前國懸神、一面ハ伊勢大神、

小野宮大臣稱警、神鏡下入其袖、內侍所者神鏡也、〇略中天德燒亡飛出著南殿前櫻、神鏡飛ンデ紫宸殿ノ櫻樹ニ懸ルト說ノ說似三面、

〔年中行事祕抄〕〇前田家本　神鏡并大刀契事

大臣以下職曹司ニ參ル

印鎰韓櫃ヲ外記局ニ納ム

威所ノ神鏡三枚

內藏寮奉幣ス

神鏡ハ本ト清涼殿ニ奉安ス後溫明殿ニ移シ奉ル

神鏡奉安ノ御床ヲ御座ヨリ高クス

天德四年九月廿三日、庚申、今夜亥三剋內裏燒亡、翌日廿四日、大臣以下、參職御曹司、又昨夜鏡三（カシコト歟ロコロ）幷大刀契不能取出、今日依勅令搜求餘燼上、得其實、但調度燒損、其眞猶存、形質不變、甚爲神異、卽召大藏省韓櫃令納、又御鎰（印カ）韓櫃三口令納外記局、

〔年中行事祕抄〕賢所雜事　內侍所數日御他所例

天德四年九月〇中略廿四日、威所鏡三枚、自餘燼之中求出、納韓櫃、奉納縫殿寮高殿、

〔愚管抄〕二村上　天德四年九月廿三日、大內燒亡、都遷ノ後、始テ燒亡云々、內侍所ノ溫明殿ノ灰ノ中ニ、御體神鏡少モ損給ハテヲハシマシケレハ、翌日ノ朝ニ、職曹司ニ移シマイラセテ、內藏寮奉幣アリケリ、或ハ大葉（マヽ）椋木ニ飛出テ懸リ給フナトモ（ト脫カ）云ナリ、其日記ハタシカナラヌニヤ、

〔古今著聞集〕一神祇　內侍所は、むかしは清涼殿にさためをきまいらせられけるを、をのつからふれいの事もあらは、そのおそれ有へしとて、溫明殿にうつされにけり、此事いつれの御時のことにかおほつかなし、かの殿清涼殿よりさかりたる便なしとて、內侍所にさためられたる方をは、板敷をたかくしきあけられたりけるとそ、天德內裏燒亡に神鏡みつからとひいて給て、なんてんの櫻の木にかゝらせ給ひたりけるを、をのゝみや（實賴）殿ひさまつきて、御目をふさきて、警蹕をたかくとなへて、御うへのきぬの袖をひろけて、うけまいらせられけれは、すなはちとひかへりて、御袖にいらせ給たりと申つたへて侍り、されとも此事おほつかなし、其日の御記に云、天德四年九月廿四日申刻、重光朝臣來申云、火氣頗消、罷至溫明殿求之、瓦上有鏡一面、其經（原）八寸、頭雖有一瑕、圓規甚以分明露出、俯破瓦上、見之者無不驚感、御記かくのことし、小野宮殿の事みえす、おほつかなき事也、

〔源平盛衰記〕四十四　宮人曲幷內侍所効驗事

〇上略、內裏燒亡ノコトニカヽル、本月二十三日ノ條ニ收ム、內侍所モ燒サセ給ヌルニヤ、代ハ角ニコソト思召、淚ヲ流シ給ケル程ニ、灰燼上ニシテ見出シ奉リタリケルニ、木印一面、其文ニ天下大平ノ四字アリケリ、又南殿ノ櫻ノ梢ニ飛カヽラセ給タリケルカ、光明赫奕トシテ、朝日ノ山端ヲ出ルカ如シ、代ハ猶失サリケリト悅ノ淚セキ敢給ハス、右ノ膝ヲ突、左ノ袖ヲ披テ、昔天照大神百皇ヲ守奉ランカタメニ、移シ留給ヘル御鏡ナリ、御誓イマタ改給ハスハ、神鏡實賴カ袖ニ

神鏡實賴ノ袖ニ入リ給フト

ノ說
實頼神鏡ヲ朝所ニ渡シ奉ルトノ說

宿リ入セ給ヘト仰ラレケル、御言ノイマタ終ラサルニ、高梢ヨリ飛下ラセ給テ、御袖ニ入セ給ヘリ、卽ツヽミ奉テ、御前ヲ進テ、主上ノ御在所太政官ノ朝所ヘソ渡シ進ラセラレケル、猛火ノ中ニシテ損失ナカリケルコソ、靈驗掲焉ト覺ユレ、今ノ代ニハ誰人カ請シ奉ラント思寄ヘキ、神鏡モ飛入セ給ハン事ソモ知ラス、上代ハ目出タカリケリト、身毛竪テ貴カリケリ、

〔橘直幹申文物語繪〕○伯爵酒井忠正氏所藏　○上略、內裏燒亡ノコトニカル、本月二十三日ノ條ニ收ム、世は今はかうにこそありけれとおほして、御なみたをなかさせ給ける程に、南殿のさくらの木のこすゑに、御かゝみかゝらせ給へり、光明奕赫として、朝の日の山のはをいつるかことし、世はいまたうせさりけりとおほしける、感涙をさへかたくて、右の御膝をつきて、左の御袖をひろけて申させ賜けるは、昔天照御神百王をまふりたてまつらむと御ちかひありけり、そのむねあらたまらすは、神鏡實頼かそてにやとり給へと申給ける御詞、いまたをはらさるにとひいり賜へり、御袖につゝみて、太政官の朝所へそわたしたてまつられける、この世にはうけたてまつらんと思よる人もありかたく、御鏡も入給まし、上代こそめてたく侍けれ、抑皇居には、難波、藤原の兩宮は

神鏡ヲ捧持セル衣ノ袖ニテ瘧病ヲ癒ストノ說

衣ノ傳來

八咫鏡ノ說

むかしの事也、此京に遷都のゝちは、これそはしめにて侍ける、○繪略ス、

〔撰集抄〕九　內侍所御事

○上略、上ノ橘直幹申文物語繪ト異事ナシ、扨も九條殿(師輔)のわらは病にとりこめられ給ひて、さはかりの有智德行の人々、おとしかね給へりけるに、小野の宮の、內侍所のうつらせ給へりし御袖をときて、是にておとし給へとてまいらせられけるを、御枕におかせ給ひて、それにてやかて落いまそかりけるとそ、實もいかなる怨靈なりとも、なしか落さるへきと覺えて、かたしけなく侍り、其御衣公任の大納言にまいれりけるか、大二條殿(教通)へ傳て侍りけるを、御跡の御事、京極(師實)の大殿に申おかせ給ひける中に、一の筆にしるされて、其御方にまいれりけるか、今の世には、近衞殿にありとそ聞え侍る、

○內侍所ヲ縫殿寮ヨリ冷泉院ニ移シ奉ルコト、十一月七日ノ條ニ、內藏屬實行ヲシテ、節刀ヲ作ラシムルコト、十二月十二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔釋日本紀〕七　述義三　八咫鏡

私記曰、問、謂之八咫、有何意哉、答、未詳、但延喜公望私記云、于時戶部藤(有穆)卿進曰、

嘗聞、或說、八咫烏者、凡讀咫爲阿多者、手之義也、一手之廣四寸、兩手相加正是八寸也、故書傳、謂咫爲八寸也、〇略中私問、咫者手之義、兩手相加爲八寸、今謂八咫、〇略中天德內裏燒亡之時、內侍所神鏡在灰燼之中、不燒損云云、其鏡徑八寸許、頭雖有小瑕、事無損之由、見御記文、然則徑八寸鏡歟、八咫之義相違之條、疑殆多端、又頭小瑕如何、兩事欲披蒙霧矣、答、如御記文者、八咫之義已以相違、加八字之條、若古人之誤歟、輒以淺才難決奧旨、又案、此紀一書文、日神方開磐戶而出焉、是時以鏡入其石窟者、觸戶小瑕、其瑕於今猶存云云、以之思之、今內侍所神鏡者、崇神天皇御時、更所鑄也、然則本鏡有瑕、所摸之新鏡、不違本樣鑄付其瑕歟、又問、天德御記文、鏡頭云云、頭字此カシラ止讀者、其義不叶、如何、答、此記第五卷、領巾頭ヒレノハシ止訓之、以之案之、鏡頭カヽミノハタ止可讀也、是先師說耳、

〔桃花藥葉〕可覺悟條々　太刀契事

太刀四柄者、累代之靈劒也、國家殊被重之、如天德記者、雖燒損、形質猶存、仍或琢磨刃、或造加飾、其時更不被出宮城、是貴重之至也、契者、親王、大臣及諸衞契符也、天德同以修補之、魚符七十四候(隻)、分入三囊、被加納太刀韓櫃中、行

太刀契ノ說　太刀ハ累代ノ靈劒ナリ　契ハ魚符ナリ　三囊ニ分チ入レ太刀韓櫃中ニ加ヘ納ム

幸時左右近衞將監持候是也、以納內侍司印稱契櫃、以納兩種稱太刀櫃、古典所載已以分明、然則有二合也、

節刀事

節刀者、雜劒也、其中靈劒有二柄、是卽百濟國所貢進、日月護身劒、破敵將軍劒等也、納辛櫃一合、行幸之時、相副賢所被奉遷也、靈劒、雜劒合卅四柄之由、見天德記、以上見建武四年玉葉、建武太刀契幷節刀、建武度紛失、被新造之、

〔塵袋〕八雜物　一行幸ノ時具セラルヽ大刀契ハ、何テイノ物ソ、大刀契ト云フハ、モノ一カ名ニハ非ス、二ノ物也、大刀ト契ト各別ナルヲ、一ニイヒナシタリ、大刀ト云フハ劒也、タチ也、ソレニ取テ、大刀ト、節刀トオナシ物ト云フ說アリ、別ノ物ト云フ說アリ、江師(匡房)ハ大刀ノ外ニ、別ニ節刀アルヘシト云ヘリ、大刀ノ中ニ靈劒二ツアリ、コレヲ節刀ト云トモ云ヘリ、其ノ說マチ〳〵也、契ト云フハ魚符也、長サ二寸餘ニシテ魚ノ形ヲツクレリ、セナカノトヲリヲタヽサマニ二ニワリ、アハセテ銘ヲカキ、キサミメヲツケテ、國々ニワカチツカハシ、ツハモノニタヒナトシテ、シルシニセラルヽモノナリ、カタ〳〵ツヽ別ニワカチ、サシアハセテミルニ、

大江匡房ノ說　太刀中靈劒ニ柄ヲ太刀二ト云フ　節刀ト云フ

天德四年九月二十四日

天德四年九月二十四日

タカハヲハ、イツハリニ非ストシルヘキシルシ也、魚符ノ銘ニハ、發兵符、ソレカシノ國トモ、ソレ節刀四十餘柄トシルサヘキ様ニ見エタルニコソ、天德四年內裏燒亡以後ノ御記也、同キ十月三日、綴(マヽ)殿大允藤文ノ記ニハ、大刀四十八柄、魚符七十四枚、內金ノ八、銀ノ十四、銀塗物ノ五十二、オサムルヨシミエタリ、劍ハ內裏燒亡ノ後、溫明殿ヨリ四十四柄、清涼殿ヨリ四柄モトメイタストシルス、キリサキノ劍、ナマツヲノ劍、イツレモアマタアリ、ナカキ定二尺五寸ニハスキス、其ノ外ハ或ハ二尺四寸、二尺二寸等也、軍防令云、大將出征皆授節刀、注云、凡節者以髦牛尾爲之、(使書脫カ)所擁也、今以刀劍代之、故同節(曰カ)刀ナリト云ヘリ、大刀ノ中ニ靈劍二アリ、百濟國ヨリタテマツル所也、一(殿アラン)ヲハ三公戰鬪ノ劍ト名ク、又將軍ノ劍トモ破敵ノ劍トモ云フ、護身ノ劍ハ、疾病邪氣ヲノソク、劍ノ左ニハ日形、南斗ノ六星、朱雀ノ形、青龍ノ形ヲ圖ス、右ニハ月形、北斗七星、玄武形、白虎ノ形ヲ圖ス、破敵ノ劍ニハ、左ニハ三皇五帝ノ形、南斗ノ六星、青龍ノ形、西王母カ兵刃符ヲ圖ス、右ニハ北極ノ五星、北斗七星、白虎ノ形、老子破敵ノ符ヲ圖ス、

太刀四十八柄 魚符七十四枚

靈劍二柄 ハ百濟ヨリ獻ズ

護身劍ノ圖

破敵劍ノ圖

護身劍ノ銘

又護身ノ劍ノ銘アリ、カノ銘ニ云ク、

歲在庚申正月、百濟所造、三七練刀、南斗北斗、左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、避(除カ)深不祥、百福會就、年齡延長、万歲無極、

造宮定

二十八日、乙丑、修理職、木工寮及ビ諸國ニ課シテ、內裏ヲ造營セシメ、大納言藤原在衡ヲ造內裏所別當ニ補ス、

〔日本紀略〕村上天皇 九月廿八日、乙丑、支配修理職、木工寮、諸國等、可造內裏殿舍門廊、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下 御日記云、○中略廿(九月)八日、乙丑、定造宮、參議雅信朝臣書之、紫宸殿、仁壽殿、承明門、修理職、常寧殿、清涼殿、木工寮、承香殿、淑景舍北一宇、美濃國、貞觀殿、周防、春興殿、山城、宜陽殿、襲芳舍、播磨、綾綺殿、淑景舍南一宇、近江、麗景殿、大和、宣耀殿、安藝、溫明殿、伊賀、安福殿、攝津、校書殿、丹波、弘徽殿、河內、登華殿、備前、後涼殿、紀伊、昭陽舍南一宇、美作、同舍北一宇、淡路、飛香舍、阿波、凝華舍、和泉、建春門、若狹、宣陽門、尾張、陰明門、長門、玄輝門、土左、四面廊、東面伊勢、越前、南面伊豫、西面備中、備後、北面讚岐、進物所、作物所、御輿宿屋、及殿々間軒廊、直廬屋等可分宛近國帶(マヽ)杣、以來年爲造畢期耳、

來年ヲ造畢ノ期トス

天德四年九月二十八日

〔公卿補任〕五　大納言正三位藤在衡、六十九、九月廿七日補造宮別當、

〔朝野群載〕十七　施入帳　佛事下

弟子在衡敬白、○略　中

弟子在衡、○略　中天德四年、禁中有災、宮殿屋舍、盡爲灰燼、卽逐便所、暫以駐蹕、忽始造宮之事、令監土木之勤、應和元年所司諸國、不日成功、○略　中

安和二年十月廿八日　弟子右大臣從二位藤原朝臣在衡

〔園太曆〕七　造內裏事始與造畢問年紀御琴事付例　貞和二年七月廿一日、天晴、抑先日禁裏仰、造內裏事始與造畢、其間年記(紀)延縮有御不審、相尋可注進云々、○略　中

造內裏被行例

天德四年九月廿八日、(實綱)左大臣召左中辨文範、被仰下可造殿舍門廊宣旨、又被仰造內裏所別當、行事等、大納言藤原在衡、參議藤原朝忠、藤(源カ)原重信、左中辨藤原文範、左(右カ)少辨平善理、右大史秦衆賴、左少史佐伯是海、○下略、藤原在衡等、始メテ造內裏行事所ニ著スルコトカヽル、十月七日ノ條ニ收ム、

○造內裏所課ヲ改ムルコト、十月七日ノ條ニ見ユ、

二十九日、內寅勸學院廳舍燒亡ス、

造內裏所行事ヲ補ス

倉及ビ政所屋燒亡

〔日本紀略〕村上天皇　九月廿九日、丙寅、亥刻勸學院廳燒亡、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　御日記云、○略　中　廿(九月)九日、丙寅、勸學院倉一宇、政所板屋二宇燒亡、已上、

十月大　丁卯朔盡

一日、丁卯、旬平座、

〔日本紀略〕村上天皇　十月一日、丁卯、(實頼、謂忠)左右大臣已下參職曹司、

〔西宮記〕十月還宮後旬儀　天德四年十月一日、左大臣令申、二孟日不御出之時、於宜陽殿取見參、而今無可行所、爲之如何、令仰云、於侍從所令取見參、入夜左大臣令奏公卿侍從見參目錄等、

〔西宮記〕十月平座旬　南殿事　天德四年十月一日、依內裏燒亡、御職曹司、諸卿候殿上、取侍從見參奏、卽下目錄辨、

〔兵範記〕二十　仁安二年十月一日、乙未、○中略

今日平座事、兼有沙汰議定、

天德四年九月、大內火事、天皇移御職御曹司、十月一日、平座被行之、

二日、戊辰、檢非違使及ビ源滿仲等ヲシテ、平將門ノ子ヲ搜索セシム、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　十月二日、戊辰、右大將藤原朝臣(師尹)奏云、近日人々曰、故平將門男入京事、勅右衞門督朝忠朝臣、仰檢非違使令搜求、又令延光仰滿仲、義忠、春實等、同令伺求者、

左右大臣以下職曹司ニ參入

見參目錄等ヲ奏ス

平將門ノ男入京ノ由ヲ奏ス

藤原純友追討ノ時追捕使主典トナル

○押領使藤原忠舒等、下總ニ入リテ、平將門ノ殘黨ヲ搜索スルコト、天慶三年四月八日ノ條ニ見エ、大藏春實ノ事蹟、便宜左ニ附載ス、

〔大藏氏系圖〕

村主

春實對馬守、從五位下、

天慶三年五月三日、賜錦御旗、天國刀、追(討脫カ)藤原純友、其時大將四人、所謂大藏春實、小野好古、橘遠保、藤原正衡也、

種光太宰大貳、主、

種材從五位下、壹岐守、

號岩門將軍、○中略　寬仁二年自異賊襲來、○中略　其時大藏種材蒙院宣而馳向、西將軍宣、管領九州、依祖父例賜錦御旗、

〔古事談〕四勇士　純友追討記云、伊與掾藤原純友、居住彼國爲海賊之首、○中略　令退治西戎、蒙征西將軍宣、于時公家遣追捕使左近衞少將小野好古爲長官、以源經基爲次官、以右衞門尉藤原慶幸爲判官、以左(右カ)衞門志大藏春實爲主典、卽向播磨、讃岐等二个國、作二百餘艘船、指賊地伊與國讃向、○中略　賊徒到大宰府、○中略　寇賊郡(部カ)內之間、官使

春實挺身奮戰シテ賊ヲ破ル

五體不具ノ穢ノ大祓ヲ修ス

算堂燒失

好古引卒武勇、自陸地行向、慶幸、春實等鼓棹自海上、赴向筑前國博多津、賊卽待戰、一擧欲決死生、春實戰酣、裸袒亂髮、取短兵、振呼入賊中、恆利、遠保等亦相隨、遂入截得數多賊、々陣更乘船戰之時、官軍入賊船、著火燒船、凶黨遂破、悉就擒殺、

四日、庚午、內裏穢アリ、是日、大神宮ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕村上天皇　十月四日、庚午、奉幣伊勢大神宮、而今夜左近衞府有死人頭、仍有大祓、外記勘申、五躰不具穢七日云々、

殿上賭射、

〔西宮記〕正月下殿上賭弓　○前田家大永鈔本　天德四十四有瀧口、（射脫カ）

五日、辛未、大學寮南堂東曹司等燒亡ス、

〔日本紀略〕村上天皇　十月五日、辛未、戌刻大學寮南堂東曹司、幷算堂東三間燒亡、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　十月五日、辛未、大學南堂廊燒亡、

七日、癸酉、大納言藤原在衡等、始メテ造內裏行事所ニ著シ、造內裏所課ヲ改ム、

〔日本紀略〕村上天皇　十月七日、癸酉、大納言在衡以下、始著造內裏行事所、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下造內裏事始與造畢間年紀御尋事付例　十月七日、癸酉、改定宛諸國門舍四面廊等、

〔園太曆〕七　貞和二年七月廿一日、天晴、抑先日禁裏仰、造內裏事始與造畢、其間年記（紀）延縮有御不審、相尋可注進云々、○略中

造內裏被行例

天德四年○略中十月七日、大納言在衡始著內裏行事所、修理職大夫曹司爲其所、造宮國々官符陣覽請印、

○修理職、木工寮及ビ諸國ニ內裏造營ヲ課シ、藤原在衡ヲ造內裏所別當ニ補スルコト、九月二十八日ノ條ニ、伊勢、石清水等ノ諸社ニ奉幣シテ、造內裏ノ由ヲ告グルコト、十一月十九日ノ條ニ見ユ、

修理職大夫曹司ヲ造內裏行事所ト爲ス

木工頭小野道風病ミ言語通ゼズ其替ヲ任ズ

九日、乙亥、直物、小除目、

〔日本紀略〕村上天皇　十月九日、乙亥、○略中又直物、除目、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　十月九日、乙亥、木工寮頭小野朝臣道風爲內藏權頭、以散位藤原滋望爲木工頭、道風朝臣病後、言語不通、無便急作行事、仍任其替也、

菅原文時詔ヲ作ル

〔公卿補任〕五康保三年　參議從四位上源延光、四十四、十月九日(天德四年)(十九イ)右近權中將、

〔小右記〕長元五年十二月十四日、辛亥、大外記文義云、不見直物他上卿被行之事、仍令申其由了者、故(實賴)殿天德四年十月九日御記云、直物之次、有小除目云云、(實賴)下官有所煩參入無期、仍觸事由於右(顯忠)府所令行也云々、

大索、

〔日本紀略〕村上天皇　十月九日、乙亥、有大索事、

十日、丙子、興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學竪義次第〕(天德)四年庚申、講師法藏(年五十三、(朱書)去年十月十七日宣、廿五日請)、藤原法相宗、兼眞言宗、東大寺、

氏、左京人、寬救大法師弟子、又延儆僧都弟子、研學常晴(年卅九、)(藤原)(年廿五、)

〔三會定一記〕一(天德)同四年去年十月廿七日宣、講師法藏(五十三)(十カ)東大寺、法相宗、竪義常晴、次安延、

十八日、甲申、左近衞中將源重光等ノ、內裏防火ノ功ヲ賞ス、

〔日本紀略〕村上天皇　十月十八日、甲申、左中將重光朝臣、少納言兼家等已下給祿有差、依內裏火事○九月二十三日ノ條參看、之間致功也、

十九日、乙酉、恩詔アリ、

〔日本紀略〕村上天皇　十月十九日、乙酉、有恩詔事、右中辨文時草之、

調庸未進ヲ免ジ百姓ノ半徭ヲ復ス

內侍候セザルニ依リテ內案奏ヲ延引ス

內侍代ヲシテ奏セシム

〔柱史抄〕下臨時帝王部　造宮事

天德四年十月十九日詔書、調庸未進在民身者、悉以免除之、又復天下百姓當年半徭、

○詔書覆奏ノコト、十一月四日ノ條ニ見ユ、

二十一日、丁亥、內印ノコトアリ、

〔西宮記〕臨時一○前田家內印大永鈔本　(裏書)天德四年十月十日、大納言源朝臣(高明)令延光朝臣申云、今日可奏內案、而侍(內脫カ)不候、令代官奏如何、令仰云、內侍傳仰上卿、侍從所便宜定申、令申云、少納言就內侍候所授內案、內侍臨殿上侍、仰公卿可宜、令仰云、內侍不候云々、如前日、猶奏征符(マヽ)、以後日、以內侍令奏內案之、

同廿一日、少納言文相來此屋、北女房付內侍代命婦橘恭子奏內案、恭子向西庇南頭、仰大納言源朝臣□之後、右近陣座行捺印事、此間御式御曹司、

二十二日、戊子、天文博士賀茂保憲等ヲシテ、職曹司ヨリ冷泉院ニ遷御ノ可否ヲ勘申セシム、

〔西宮鈔〕天皇移新殿○九條家本　天德四年十一廿二、延光朝臣申云、依仰召保憲、具瞻、道光等、問自職御曹司指冷泉院、可當大將軍方、不滿卅五日、遷御猶可忌否事、

賀茂保憲忌ムベカラズト勘申ス
秦具瞻賀茂道光等忌ムベシト勘申ス
御出ノ日時勘申

保憲申不可忌、大將軍爲年忌也、具瞻、道光等申可忌、須當日御他所、以彼院當吉方遷御、忌猶留內裏也、道光申云御忌可隨身、然則自此指彼院、可當大將軍方云々、有定、猶自可移彼院、宜令申、保憲申云、遷御職御曹司之後、不滿卅五日、依御忌猶留內裏也云々、道光申云、御忌可隨身、然則自此指彼院、可當大將軍方云々、有定、猶自可移彼院、宜令勘申可出門、廿六日、

〔陰陽新書〕○塙史料所收　天曆御記云、天德四年九月廿三日夜內裏燒亡、仍移御職曹司、召天文博士保憲等、令定申遷御冷泉院自內裏當御忌方否事、保憲等申云、依一方分法計之、件院當巽方也、今年大將軍在午、可領南、卽己丙午丁未五辰、至巽方是維地、不可忌之、

〔水左記〕承保四年十一月廿一日、戊辰、○中略陰陽助道榮申云、○中略但卅五日御忌之條、見天德四年十月御記、彼時自式御曹司、遷御冷泉院之間、不滿卅五日、不可有御忌之由、先祖保憲朝臣所定申也、

○冷泉院ニ遷御ノコト、十一月四日ノ條ニ見ユ、

二十三日、己丑、內裏穢アリ、

綾綺殿ノ壇ノ南ヨリ骸骨出ヅ
穢疑ノ札ヲ立ツ日
發見ノ日穢ヲ以テ始ト爲ノス七日ノ穢
番僧二十口七箇日

〔日本紀略〕村上天皇　十月廿三日、己丑、去廿一日、綾綺殿壇南出骸骨、准五躰不具、有七日穢、

〔西宮記〕○臨時一定穢事前田家大永鈔本　天德（英泰）四年十月廿二日、延光朝臣云々、得死人骨、疑內裏失火之夜燒死歟、仰令立穢疑札云々、後日相定、以見著之日爲始、可忌七日云々、

二十四日、庚寅、御息災ノ爲メ、權僧正寬空ヲシテ、眞言院ニ孔雀經法ヲ修セシム、

〔延喜天曆御記抄〕○柳原家記錄百三十一所收　天德四年十月廿四日、庚寅、始自此日、於眞言院、令權僧正寬空修孔雀經法、奉番僧廿口、限七日竟、爲息災也、遣藏人修理亮珍材仰事由、

〔後七日御修法阿闍梨名帳〕村上天皇　四年（天德）、庚申、大僧都寬空　十月廿四日、於眞言院修孔雀經法、伴僧廿口、限七个日、爲息災也、房記云、延鑒修之云々、可尋之、

○東寺長者補任、仁和寺御傳、異事ナキヲ以テ略ス、御息災ノ爲メ、仁壽殿ニ不動法ヲ修スルコト、六月十四日ノ條ニ見ユ、

二十八日、甲午、冷泉院ニ遷御アルベキニ依リ、僧六十口ヲシテ、同院ニ、御讀

結願

鎭謝ノコトヲ行フ

喜慶火天供ヲ修ス

賀靜毗沙門天法ヲ修ス

並ニ七箇日

經ヲ修セシム、

〔日本紀略〕村上天皇　十月廿八日、甲午、於冷泉院請六十僧讀經、

卅日、丙申、結願、

〔新儀式〕四臨時上天皇遷御事　天皇暫避本宮、欲遷御於他、先定其便所、〇中略天德四年、從職曹司遷御冷泉院等是也、〇中略又若可御後院、前十八日、修御讀經、行鎭謝事、天德四年、御冷泉院例也、

〇冷泉院ニ遷御ノコト、十一月四日ノ條ニ見ユ、

延曆寺ニ於テ、火天供及ビ毗沙門天法ヲ修シテ、天下ノ火災及ビ未然ノ兵革ヲ禳ハシム、

〔延喜天曆御記抄〕〇柳原家記錄百三十一所收　天供事、付星供事、

天德四年十月廿八日、午、(日脫カ)於天台山、令權律師喜慶、率十口僧、供火天供、限七个日、爲攘天下火災也、自內藏寮令(下カ)行料物、又於同山、以內供十禪師賀靜、率十五口番僧、修毗沙門天法、限七个日、爲攘天下未然兵革也、自大藏幷所司下行料物、

大極殿出御

累代寶物燒損ノ由ヲ奉告ス

宣命ノ草ヲ奏ス

內裏火災及ビ祟ヲ謝スル由ヲ奉告ス

內膳司忌火膳ヲ供ズ

廢務

十一月小盡丁酉朔

一日、丁酉、伊勢、石淸水等ノ六社ニ奉幣シテ、內裏燒亡ヲ告グ、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月一日、丁酉、天皇自職曹司幸八省院、發遣伊勢以下諸社奉幣使、伊、賀、平、松、石、上、被(衍カ)申去九月廿三日內裏燒亡、累代寶物燒損之由、被告申之、

〔西宮記〕臨時五諸社行幸　御記云、天德四年十月卅日、民部卿藤原朝臣(在衡)、令奏明日奉幣宣命草四枚、仰令改案伊勢告文、自餘依案云々、

十一月一日、奉幣伊勢、石淸水、賀茂、松尾、平野、石上等、告內裏火災兼謝祟由、伊勢、石淸水、告火災兼謝祟、賀茂、松尾、平野、只告火災、石上唯謝祟由、云々、辰剋內膳司供忌火膳云々、民部卿令延光朝臣奏諸社告文、同四剋乘輦、掌侍置御劍等、皆如常、持候內侍司印櫃及鈴韓櫃等如常、舊例以內侍印稱契櫃、行幸之時必令持候、仍新鑄燒亡代之印、令內匠寮造赤漆小韓櫃、納之令持、又侍臣以太刀櫃同欲持候、而右大將藤原朝臣(師尹)、仰依神事行幸不可候之由、令留置之、

〔西宮記〕六十一月〇前田家本　御曆奏　天德四年十一月二日、(裏書)〇中略昨日廢務、

二日、戊戌、御曆奏、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月二日、戊戌、奏御曆、

女房前ノ小庭ニ於テ奏ス

〔西宮記〕六十一月〇前田家本　御暦奏　天德四年十一月二日、中務省率陰陽寮、於女房前小庭、獻明年御暦、昨日廢務、今日奏、又依无内侍所、於此獻歟、

三日、己亥、近江國檢交替使ヲ停メ、前司國司ヲシテ、交替ノコトヲ行ハシム、

伊豫國ノ例

〔西宮記〕臨時一定使檢交替使事〇前田家大永鈔本　天德四年十一月三日、近江國司定檢交替使事、諸卿定申云、不可遣檢交替使、宣旨之後、更停使、令前司國司行交替政事、已有前例、須准伊與國例、官物之數、依前司彥眞受領數、令任用吏分付可宜、仰依定申云々、

反閉院内鎭法ヲ行フ

穀倉院饗饌ヲ設ク

四日、庚子、冷泉院ニ遷御アラセラル、是日、東宮モ亦同院ニ遷ラセラル、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月四日、庚子、天皇自職曹司遷御冷泉院、但不警蹕、天文博士賀茂保憲反閉、陰陽頭秦具瞻勤院内鎭法、有所々饗膳屯食等、東宮自職御曹司、遷御同院東南對屋、

童女二人各黃牛ヲ牽ク

五日、辛丑、穀倉院設饗饌、諸陣所々分屯食、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　十一月四日、庚子、自職曹司移幸冷泉院、儀式如常、

〔西宮記〕臨時五遷殿事　十一月四日、移冷泉院云々、入自西門、陰陽頭具瞻前行、次童女四人、一人脂燭、一人橡、二人牽黃牛、各一頭、牛左大臣所獻、童女、仰御匣殿内侍乳母等、所令獻也、入西中門、具瞻先到南殿及中殿、施呪術退出、又水火童女二人、昇自南殿西到中殿、以脂燭炷殿内燈、三日夜不滅、牽牛童女經南庭、繫牛於中殿前庭、云々如常、内藏給酒肴碁手等於王卿侍臣等云々、

秦具瞻南殿等ニ呪術ヲ施ス王卿ニ酒肴等ヲ給フ

〔西宮記〕十一〇前田家本　天皇移新殿　天德四年十一月四日、庚子、遷冷泉院、御輿留西門、神祇官奉御麻、入御自西門、陰陽頭具瞻前行、次童女四人、一人執脂燭、一人執橡水、二人牽黃牛各一頭、兩々相竝在輿前、當左右大將之前立行、此元慶遷御内裏之時例也、牛是左大臣家所獻、卅女等預仰御匣殿別當典侍灌子、掌侍鮮木子、乳母和子等所貢、云々、有五菓、

神祇官御麻ヲ上ル元慶遷御ノ例

〔新儀式〕四天皇臨時上遷御事　吉時行幸、天德於職御曹司寄御輿之間、有返閇之事、大駕入於宮門、到中門前、暫留乘輿、〇註略ス、陰陽寮供奉、獻厭法之事、陰陽頭率僚下、以五穀行供、童女二人各牽黃牛、左右近衞府生役之、次童女二人、一人持橡水、一人乘脂燭、皆悉前行於乘輿前、御座定後、以水給御厨子所、以燭付御寢内四角燈臺三箇日夜不銷之、黃牛繫御殿前庭左右馬寮從飼水草、〇中略仍天德四年、遷御冷泉院之日、依天文博士賀茂保憲勘文行之、但冷泉院者點定後院、造作之後、初依遷御、有此厭法、〇中略（脫アラン）第四日、大臣奉勅、解諸衞警固、天德四年、冷泉院例也、彼年九月廿三日、從遷御職御曹司、諸衞皆固陣衞、公卿幷侍臣帶衞府者、皆帶弓箭候於殿上、今日初解嚴固也、從此已下、他儀皆是天德例也、

諸衞警固公卿等弓箭ヲ帶シテ殿上ニ候ス警固ヲ解ク

〔左經記〕長元五年四月四日、甲辰、天晴、晚景參殿、被仰云、今夜欲度堀河家、依爲舊家、不用渡新宅之禮、而人々於示可牽黃牛之由、爲之如何、申云、村上御時、

令渡冷泉院之時、依爲舊所、不可用新宅儀之由有議、而保憲申云、雖舊宅有犯土造作、何無其禮乎、就中牽黄牛、是厭土公之意、尤可備禮儀云々、仍被用渡新宅之禮、

黄牛ヲ牽ク、土公ヲ厭スル意

〔陰陽博士安倍孝重勘進記〕上移徙吉日　白虎足日例

天徳四年十一月四日、庚子、白虎足日、天皇自職曹司、遷幸冷泉院、有水火作法、

○小右記長和五年六月二日ノ條及ビ年中行事祕抄、異事ナキヲ以テ略ス、職曹司ニ遷御ノコト、九月二十三日ノ條ニ、賀茂保憲等ヲシテ、冷泉院移御ノ可否ヲ勘申セシムルコト、十月二十二日ノ條ニ、同院御讀經ノコト、同月二十八日ノ條ニ、新造內裏ニ遷御ノコト、應和元年十一月二十日ノ條ニ見ユ、

水火ノ作法アリ

詔書覆奏、

〔北山抄〕六儲忘略記詔書事　天徳四年十一月四日、外記候覆奏之由申左(實頼)大臣、仰云、申大納言、大納言在衛卿披見、參上令奏云々、

○恩詔ノコト、十月十九日ノ條ニ見ユ、

七日、癸卯、冷泉院遷御ノ後、初メテ旬儀ヲ行フ、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月七日、癸卯、遷宮之後有旬事、天皇出御南殿、

〔小右記〕寛弘二年十二月十七日、辛卯、○略中見天徳四年例、於冷泉院、初出御南殿之日、被奏見參、

南殿ニ出御

見參ヲ奏ス

內侍所ヲ、縫殿寮ヨリ冷泉院ニ遷シ奉ル、

〔年中行事祕抄〕賢所雜事　內侍所數日御他所例

天徳四年十一月○略中七日、威所自縫殿寮、奉遷冷泉院、

〔小右記〕寛弘二年十一月廿七日、辛未、○略中內侍所、依穢間不可奉渡、撰吉日後日可奉渡者、天徳燒亡時、蹔奉安置縫殿、左右近衛幷寮官奉護、移御冷泉院之後、撰吉日更奉渡、

燒亡後縫殿ニ奉安シテ左右兵衛等守護シ奉ル

○神鏡ヲ縫殿寮ニ奉安スルコト、九月二十四日ノ條ニ見ユ、

十二日、戊申、平野祭、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月十二日、戊申、平野祭、

十三日、己酉、遷御ノ後、初メテ政アリ、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月十三日、己酉、始有政、

十四日、庚戌、盜起ルニ依リテ、檢非違使及ビ諸衛ヲシテ、京中夜行ヲ勤メシム、

天徳四年十一月十二日　十三日　十四日

諸衛武ニ堪ヘタル者ヲ選ブ馬寮ノ馬ヲ給ヒテ巡行セシム

初メ公節補任ノ時大中臣氏ノ愁訴アリ

ム、

〔西宮記〕臨時十搜盜事　天德四年十一月十四日、仰左(實賴)大臣云、近來京中盜起云々、須檢非違使之外、差副諸衛堪武官人、勤夜巡事云々、申云、除檢非違使、馬寮官人等之外、宜給寮馬巡行、仰依請、

十六日、壬子、大原野祭、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月十六日、壬子、大原野祭、

十七日、癸丑、園、韓神祭、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月十七日、癸丑、園、韓神祭、

是ヨリ先、大中臣氏氏人等、祭主大中臣公節異姓ノ由ヲ訴ヘ、改補セラレンコトヲ請フ、是日、公卿ヲシテ、其理非ヲ定メシム、

〔祭主補任集〕祭主次第○神宮文庫所藏　祭主從五位下行神祇大副大中臣朝臣公節　天曆御記第十一卷云、齋主事、天德四年十一月十七日、令延光朝臣給大納言源朝臣(高明)、氏(歟イ)民申改定祭主公節文、令仰前年補祭主闕之時、雖有大中臣氏愁、公節所進計帳、其名已在、仍補任畢、而今依伊勢太神宮祟、更愁此由、須定申改補否、源朝臣令延光朝臣申云、諸卿定申云、大中臣氏申公節異姓事、始補祭主

慥ナル文書ヲ進メシム

公節申文ヲ上ル

重ネテ公卿定ヲ行フ

氏文

氏文ハ官印ヲ踏シテ證驗ト爲ス

之時、雖有此愁、依文書分明、被定補畢○天曆十年五月十一日ノ條參看、今所愁申、與彼時愁無殊辭署、又可進公節非氏人慥文書之時、隨可改定歟、含(令カ)仰云、大中臣氏愁、以此由可示傳奏人、天德四年十月廿(一脫カ)六日、左大(實賴)臣召前語、可定依大中臣氏愁、改替祭主否事、大臣退下、可令文範朝臣給大卜(臣カ)文之中、大中臣氏請重蒙天裁、改替祭主公節職文、仰云、前日公節(稱カ)定申云、氏人訴申、與前年愁旨不異、依此何忽改替乎、以此由令仰知、自外猶有所申、隨其狀可定、而今重進此愁狀、宜定申文、副給公節申文一枚、須相合定申理非、天德四年十二月一日、入夜左大臣令文範朝臣奏、大中臣氏申改替伊勢太神宮祭主公節、副公節申文、申云、令諸卿定申、參議伊尹朝臣申云、大中臣氏申公節異姓之由、無明(分脫カ)文書、不可改替、好古朝臣申云、氏文、故利世注成興、成眞、計帳改名注公葛、公節須先申公家、告知氏人改名者也、然而不經申請、幷不觸氏人、改名之輩已巨多、又公葛同改其名、注計帳文、利世加署顯然、今就此不可謂非中臣氏、朝忠朝臣申云、氏文、是爲絕如此之疑所作也、卽踏官印爲證驗、而不申改名之由、不令觸知於氏人、偏改注計帳、無其理、然而公節爲他姓之由、全爲(無カ)證據、捐(猶カ)難申被改替之由、若比校利世署計帳名字何、左衛門督藤原朝臣(師氏)申云、不改氏人(文カ)、改計帳、尤有事疑、不可然、但其計帳、已加

公節ノ弟橘氏僧春勸ハ利世ノ養子ト爲ル

公節ノ母ハ橘氏

所傳兩端慥ナル證據ナシ

神明ノ祟尤モ恐思食ス所ナリ

內裏燒亡ニ依リ御トヲ行フ

祠官異姓ノ祟アリ

宣旨ヲ下シテ公節ノ釐務ヲ

利世之名、同改兄弟之名、今大中臣氏人時用等、所引證人故淑光朝臣後家令申、雖聞故利世有養子之由、不知公節歟他男歟、而公節弟春勸法師、已自稱利世養子、姓橘氏也、然則以公節難爲橘氏非大中臣氏、民部卿藤原朝臣(在衡)所申如此、左大臣申云、如文書遞有所陳、忽難一定、式部大輔直幹之(所カ)申、公節母橘氏、金(今カ)利世之妻也、或云、公節母々(ツカ)兄子也、所傳又各縱橫、依神祇官、陰陽寮卜申伊勢太神宮有御祟之由、猶慥可定事也、以非正(氏カ)人之人、供奉祭主、以其息男爲造宮使、竝有所恐、仍難申不改替、彼此所申不同、仍令奏各旨、令仰云、不改氏書、又不申公家、不觸氏人、暗改注計帳、理不可然、但同兄公葛、又不改書(氏脫カ)、注計帳、然則可非今所搆作之文書歟、又春勸自稱爲利世養子、橘氏僧護仲之男也、而時用申云、公節是護仲之子也、或人所傳此如兄子也、所傳已兩端、無慥證據(驗)、難爲他氏人、但神明之祟、尤所恐思也、以非實氏人、猶令供奉、又甚可恐懼、抑比校利世署計帳名字、定實否宜(可脫カ)、大臣等令申云、尤可然、宜令比校利世署名、

裏書云、件公節者、

或云、○中略四年(天德)九月廿二日(三)、庚申、夜內裏燒亡、延曆遷都以後始有此、具被行御卜之處、有祠官異姓之祟、于時中臣氏申云、祭主公節橘氏、宮司氏高清原氏人者、公節自筆之消息之名所、書橘姓云々、仍十月三日、被下宣旨、停止公

停ム

內裏燒亡天下旱疾ニ依リ官ト寮占ヲ行ハシム

宮司氏高ハ清原氏

節□務、

〔太神宮諸雜事記〕一同三年(天德)(四)九月廿三日、亥時內裏燒亡、同年十月、中務宮燒亡、天下旱魃、疾癘熾也、仍公家驚御天、下宣旨於神祇官、陰陽寮、被卜食之處、勘申云、若異姓人供奉神事咎歟、因之巽方大神、依其違例御祟歟者、而間本官幷大中臣氏人等奏狀云、祭主公節朝臣既橘氏人也、卽付公節之自筆消息具也、又宮司氏高、是清原氏豐之男子也、氏高之母前宮司邦光之女子也、仍請母方姓、號大中臣氏之由也、以如此異姓之輩、被補任祭主、宮司之故、天下不靜也、被始置祭主職之後、於大中臣氏之外、以他姓者、未被補任之例乎者、依件奏聞、以天德四年十月三日、公節、宮司氏高等之釐務停止之後、以同十一月十日、永停止了、

○十二月一日ノ公卿定、便宜合敍ス、大中臣公節ノ祭主ヲ停メ、大中臣元房ヲ祭主ト爲スコト、應和二年正月二十六日ノ條ニ見ユ、

十八日、(甲寅)鎭魂祭、

〔日本紀略〕村上天皇十一月十八日、甲寅、鎭魂祭、

五節舞姬御前試、

〔西宮記〕六十一月新嘗祭（裏書）天德四年十一月十八日、甲寅、亥一剋舞姫等參上於中殿南廂、舞歌人候同殿西渡殿下、依當物忌、外宿者不令候、子四刻事了退出、次舞姫退出云々、御記、

十九日、乙卯、神祇官齋院ニ於テ、新嘗祭ヲ行フ、

〔日本紀略〕村上天皇十一月十九日、乙卯、於神祇官有新嘗祭、

〔小右記〕寛仁元年十月十三日、戊寅、○中略大外記文義持來式日神事日臨時奉幣使立例、在曆裏、○中略

裏書天德四年十一月十九日、乙卯、天晴、廢也、此日於神祇官齋院、有新嘗祭、○下略

八省院ニ於テ奉幣使發遣

伊勢、石清水等ノ諸社ニ奉幣シテ、造內裏ノ由ヲ告グ、

〔日本紀略〕村上天皇十一月十九日、乙卯、○中略又於八省院被發遣諸社奉幣使、伊、石、賀、松、平、稻、但式日神事、他社奉幣被勘先例、仁和三年二月四日、祈年祭日、伊勢幷常陸幣帛使、天曆九年六月廿三日、月次祭日、被發遣伊勢幷諸社幣使、

〔西宮記〕臨時一祭使事、御即位後被遣八十島○前田家大永鈔本（裏書）天德四年十一月○中略十九日、昨今物忌也、此日奉幣伊勢、石清水、賀茂、松尾、稻荷等神社、告以可始作內裏之事云々、申剋於南殿、拜祈伊勢太神宮云々、

御物忌南殿ニ於テ皇大神宮ヲ拜シ給フ

〔小右記〕寛仁元年十月十三日、戊寅、○中略大外記文義持來式日神事日臨時奉幣使立例、在曆裏、○中略

裏書天德四年十一月十九日、乙卯、○中略午二點大納言藤原在衡卿著八省北廊、被奉遣伊勢、石清水、賀茂上下、松尾、稻荷臨時（等脫カ）奉幣使、其宣命、去九月二十三日夜內裏燒亡、今月廿八日可始作之由也、昨日大納言在衡仰少外記海正澄云、有式日神事之日、被加行他神事之例、宜勘申者、隨則勘申仁和三年二月四日祈年祭之日、伊勢幷常陸等幣帛使立、延喜十七年七月四日廣瀨龍田祭之日、爲祈雨諸名神十三社奉遣幣使之例、被奏此勘文之次、從殿上被仰云、依件例可准行、

神事ノ式日ニ他ノ神事ヲ行フ例ヲ勘ヘシム

仁和三年延喜十七年ノ例

〔園太曆〕七貞和二年七月廿一日、○中略造內裏事始與造畢間年紀御尋事付例

造內裏被行例

日時定

十一月十三日、左大臣（實賴）參入、陰陽寮勘申、內裏可造由、諸社奉幣使日時、今月廿三日、又被差定六个所神社使、伊勢已下云々、十九日、大納言在衡卿著八省、被立臨時奉幣使伊勢已下七社、也、是內裏今月可始作之由也、

○造內裏所別當藤原在衡、始メテ造內裏行事所ニ著スルコト、十月七

日ノ條ニ、內裏木作始ノコト、本月二十八日ノ條ニ、造內裏御報賽奉幣ノコト、應和二年二月二十七日ノ條ニ見ユ、

內膳司忌火、庭火等ノ竈神ヲ冷泉院內膳ニ移ス、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月十九日、乙卯、○略中今夜坐內膳司忌火、庭火等御神奉遷冷泉院內膳、仍權大納言師尹卿已下奉遷之、平野謂釜二口也、庭火謂錡一口也、各有臺長櫃等、衞士持之、奉移院乾方新屋、庭火、平野別々屋也、安置之後、宮主申祝詞、

〔西宮記〕臨時一祭使事　御即位後被遣八十島前田家大永鈔本天德（裏書）四年十一月○略中十九日、○略西剋右大將藤原朝臣（師尹）令永保申云、向內膳司、以平野御竈納韓櫃、以庭火竈納長櫃、竝令荷擔、奉遷此院、但忌火無其竈、臨其期新設云々、今承左右近、左右衞門可奉供奉之狀、而源朝臣、前日召仰六衞府、仍六衞府共供奉、遷來之後、令官人イ宮文供（主カ）奉御祓已了云々、

〔中右記〕寬治八年十一月十一日、未時許、有臨時祭定、使道時朝臣、時範定申、御竈神奉渡間事等、○中略上卿仰外記令催、昔少納言供奉、近代絕了、天德四年內裏有事、令渡他所給

平野ハ釜二口　庭火ハ錡一口　各臺長櫃アリテ別屋ニ安置ス

忌火ニハ竈ナシ

時、件竈神日時勘文、權大納言源朝臣（雅光）奉行、其由見御記、其後遷宮之時、多於藏人所被勘日時、被下上卿也、今夜依天德例也、

二十日、丙辰、豐明節會、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月廿日、丙辰、節會、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　十一月廿日、丙辰、新嘗會、

〔江次第〕二正月乙七日節會裝束　左右各立置物御机、各垂總、平文劍、天德四年十一月廿日御記、

〔高光集〕（師輔）おとゝうせ給ふてのとし、新嘗會のころ、うちにもまいらで、ないしのもとに、

霜枯の蓬の門にさしこもりけふの日かけをみぬそわびしき　○新勅撰和歌集、結句ヲみぬか、悲しさニ作ル、

內膳司竈神及ビ御殿ノ怪ニ依リテ、御占ヲ行フ、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月廿日、丙辰、○略中此日辰時、御殿鳴、巳時內膳御竈神鳴、召陰陽寮有御占、

二十三日、己未、內裏燒亡ヲ山科、柏原、後山科ノ三陵ニ告グ、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月廿三日、己未、依內裏火事、○九月二十三日ノ條參看、被告山陵、

山陵使

内裏火災等ノ宣命辭別アリ

祭使以下ニ祿ヲ賜フ

建禮門前ニ大祓ヲ修ス

山階(天智)、柏原(桓武)、後山階(陽朝)等也、

〔西宮記〕十二月　班幣　荷前　天

朝臣申、明日柏原山陵使、差中納言源朝臣(雅明)、而申有所勞之由、仍依貞觀十八年例、可差參議、仰依請云々、

○伊勢、石清水等六社ニ奉幣シテ、内裏燒亡ヲ告グルコト、本月一日ノ條ニ、七道諸國ノ諸社ニ奉幣スルコト、十二月五日ノ條ニ見ユ、

二十五日、辛酉、賀茂臨時祭、宣命辭別、内裏火災幷天

〔日本紀略〕村上天皇　十一月廿五日、辛酉、賀茂臨時祭、宣命辭別、内裏火災幷天

變物怪事被載之、

〔西宮記〕六　十一月　臨時祭　天德(眞壽)四年十一月廿五日、臨時祭云々、了奏

〇前田家本

舞間、參議朝忠朝臣乘醉、交立歌人之中歌、事了使等向社頭、亥刻使等還來、令奏神樂、及丑刻賜祿使以下垣下親王、公卿有差、

二十八日、甲子、内裏木作始、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月廿八日、甲子、内裏木作始也、先於建禮門大祓、

〔園太暦〕七　造内裏事始與造畢年紀御尋事付例　貞和二年七月廿一日、〇中略

宣命使

内裏ノ穢ニ依リテ宣旨ヲ給

造内裏被行例

〇上略、諸社奉幣ノコトニ、ル、本月十九日ノ條ニ收ム、廿八日、可始内裏造作雜事、未二點始造宮事、(天德四年十一月)

巳二點於建禮門前有大祓、

〇造内裏所課定及ビ造内裏所別當ヲ補スルコト、九月二十八日ノ條ニ、内裏造營ニ依リテ、建禮門ニ理趣般若經ヲ讀マシムルコト、十二月一日ノ條ニ見ユ、

造内裏ノ由ヲ柏原、後山科ノ二陵ニ告グ、

〔日本紀略〕村上天皇　十一月廿八日、甲子、〇中略　巳刻被告申内裏造作事於柏(桓武)原、後(陽朝)山階也、

〔園太暦〕七　造内裏事始與造畢間年紀御尋事付例　貞和二年七月廿一日、〇中略

造内裏被行例

廿八日、〇中略、建禮門前ニ於テ、大祓ヲ修(巳二刻)スルコトニカ、ル、上ノ條ニ收ム、同刻柏原、後山階兩陵宣命使立、(天德四年十一月)

柏原中納言師氏卿、大納言在衛(雅衛)卿、

後山階參議好古卿、

是月、鹿島使ヲ定ム、

〔北山抄〕二月　年中要抄上　同日(上申日)鹿嶋使立事、長者定氏院學生、下宣旨給内印官符、天德四年十一月、依内

天德四年十一月是月

天德四年十一月是月

裏穢、給宣旨、伊勢使等例也、

檢諸寺全破使ヲ發遣ス、

〔勸修寺文書〕二十一勸修寺古事　勸修寺

一堂舍佛像

西堂在本堂西、三間四面、又有孫庇、檜皮葺、〇中略

天德四年十二月、檢諸寺全破使兵部丞、相視歟ヽ、勸錄文等、件西堂不注入之、

已迷子細、天德稱宮道氏建立、若是堂歟、〇下略

宮道氏建立堂

天德四年十一月、檢諸寺全破使兵部大丞藤ニニニ實錄帳云、故命婦宮

道朝臣烈子建立者、基跡不見、僧正示給云、件堂在西堂坤角云々、〇下略

勸修寺雜事

一別當次第

權律師貞譽

撿按任符、此外所無寺家也、而天德四年損色注文云、撿按少僧都無判署、于時延慶一人爲東寺少僧都、件人歟、云々、

○本書、西堂ノ條、十二月ニ作ル、今宮道氏建立堂ノ條ニ據リテ揭書ス、

天德四年十一月是月

三口僧三箇日

廢務祿ヲ賜フ

著任三日卒ス

奉幣使發遣

十二月大盡丙寅朔

一日、丙寅、內裏造營ニ依リ、建禮門ニ於テ、理趣般若經ヲ讀マシム、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月一日、丙寅、於建禮門、自今日三箇日、以三口僧被讀理趣般若經、依造宮也、

○內裏木作始ノコト、十一月二十八日ノ條ニ見ユ、

三日、戊辰、出羽守在滋、姓闕ク、赴任ノ由ヲ申ス、尋デ、卒ス、

〔西宮記〕臨時八受領赴任事　天德四年十二三、廢務、出羽守在滋申罷由祿給之、著任三日卒、

五日、庚午、內裏燒亡及ビ天變、怪異等ニ依リテ、七道諸國ノ諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月五日、庚午、發遣七道諸國諸社奉幣使、被申內裏火事幷天變恠異事、

○內裏燒亡ヲ山科、柏原、後山科ノ三陵ニ告ゲラルヽコト、十一月二十三日ノ條ニ見ユ、

十一日、丙子、月次、神今食祭、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月十一日、丙子、月次祭、神今食、

神祇官ニ出御

大神宮月次御幣ヲ奉ラズ

〔西宮記〕六月神今食散齋日在穢內行神事例　天德四年十二月十一日、御神祇官、行神今食祭事云々、依當子日、昨日令卜供奉男女房幷駕輿丁等云々、

〔伊勢公卿勅使雜例〕御幣漏忘天不被副進例

天德四年十二月、月次例ニシ天、令副進給不神ト(シ天脫カ)神宮祭乃御幣乎漏シ忘天不副奉、

○伊勢公卿勅使雜例、日ヲ闕ク、姑ク恒例ニ據リテ揭書ス、大神宮ニ祈謝使ヲ發遣セラルヽコト、應和元年閏三月十三日ノ條ニ見ユ、

十二日、丁丑、鍛冶內藏屬實行姓闕ク、ヲシテ、宜陽殿ノ作物所ニ於テ、節刀ヲ作ラシム、

〔中右記〕嘉保元年十一月二日、庚子、○中略

裏書件靈劍二柄圖、權中將顯實朝臣所被持也、彼家相傳也、明經(法)博士允亮所抄政事要略、百卅局云々、中詳見也、爲一本書、不在他家、而件節刀沙汰之卷、隨身直廬、與下官(宗忠)共披閱之處、大略今日所見之古劍二柄相叶也、尤有興、件書中、天德內裏燒亡時、陰陽師晴明奉勅命、作營(鑄カ)之由所見也、○中略

長德三年五月廿四日、藏人信經私記云、遣召主計助安部晴明、召問宜陽

宣旨ニ依リ安倍晴明勘文ヲ上ル

殿御劍等事、申云、件御劍卅(冊カ)四柄也、去天德內裏燒亡之日、皆悉燒損、晴明爲天文得業生之時、奉宣旨進勘文、所令作也、卅(冊カ)四柄之中、二腰名靈刀、一腰破敵、一腰守護、但件劍有鏤、々歲次幷名等、又同鏤十二神、日月、五星等體也、而燒損之後、不見其文、仍所獻勘文也、御劍樣乃本形也、件破敵是遣大將軍之時、所給節刀也、一腰是名守護、候御所是也、去天德以後度々燒亡之後、未被作、件二腰、本是百濟國所獻云々、今日取遣劍身六柄之中、靈刀二腰之實有其眞、件靈刀等國家大寶也、必可被作儲者、天德奉勅、以備前國撰獻假(偽)治白根安生令燒其實於高雄山也者、

〔左大史小槻季繼記〕一大刀契紛失事

安貞二年正月十一日、○中略予卽向納言亭、須臾面謁、申子細返給畢、此次種々雜談、大旨大刀契事也、抑靈劍二尺五寸此寸法見中右記之由、聊有所見之由被語之、又天德燒失、件度晴明鑄之云々、晴明鑄劍之由、依泰長申狀、坊城大丞爲隆、雖載記錄、村上御記殊被盡巨細、而此事不見之間、貽不審如何、予申云、寬弘神鏡燒失之時、可改鑄哉否、有沙汰之時、吉平朝臣引大刀契例、件勘文之中、天德四年秋、被燒失、同五年鑄之云々、○中略維長○中略又談云、今日前右京亮安部季尙

刀身長サ二尺五寸

國家ノ大寶

晴明鑄劍ノ圖

廳ニ町ノ直廬ニテ研ギ磨クテ行事參議朝成朝臣、子、天德晴明鑄劍之圖幷雜事文書等相傳旨語之云々、

近衞將監等監臨ス

賀茂保憲三方五帝ノ祭ヲ神護寺ニ行フ

朝臣、故主計頭孝重朝臣末流云々、○官史記ヲ校ス、

〔塵袋〕八　一行幸ノ時具セラルヽ大刀契ハ、何テイノ物ソ、

一條院ノ御時、寬德(弘歟)二年十一月十五日ノ內裏燒亡ニ、大刀契、オホクヤケ損シニケリ、堀川院ノ御宇、寬治八年十月廿四日ノ燒亡ノトキ、靈劍ヤケ損シテ、護身劍ハ青龍ワツカニノコリ、朱雀ハヲハカリノコレリ、破敵ノ劍ハ、五星ノ中ニ二星ノコル、又王母カ兵刃符ワツカニノコレリ、天德內裏燒亡ニモ、少々燒損シタリケルヲ、晴明ウケタマハリテ、ミカヽセテ修理シタリケリ、天德四年十二月十二日、宜陽殿ノ作物所ニテツクラシム、廳町ノ直廬ニテトキミカク、大臣陣ニ著云、(々脫カ)行事參議朝成朝臣也、權右中辨國光朝臣、左右近衞將監等監臨ス、左右ノ物(モノ)節(フシ)各一人守護、鍛冶ハ內藏屬實行云々、又應和元年七月五日、高雄山ニテ劍ヲツクル、天文博士保憲、六月廿八日、於神護寺、三方五帝ノ祭ヲツトム、劍ヲツクル祈禱ト云々、備前國鍛冶白根安生銀(鍛カ)ヲ造リ進スル由舊記ニ見エタリ、ヤケウセタルカハリニ、新造セラレケルニヤ、

天德四年十二月十二日

○御劔ヲ高雄山ニ於テ作ラシムルコト、便宜合敍ス、節刀、契等ヲ灰燼中ニ索メテ獻ルコト、九月二十四日ノ條ニ見ユ、

十五日、庚辰、皇后、東院ニ遷御アラセラル、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月十五日、庚辰、中宮(安子)遷御東院、

〔左經記〕長元元年正月十九日、乙卯、天晴、宮廿二日可遷御上東門院、而其儀不審、仍奉問右府(實資)可示給之由、聞(觸)右宰相中將、返報云、○略中天德四年十二月十五日、中宮行啓、上達部供奉云々、乘黑漆御車、侍所男等付轅、諸司諸衞供奉如恆、黑漆御車者(檳榔毛也)云々、右府御消息如此、

〔左經記〕類聚雜例　長元九年四月廿二日、庚午、天陰、寅刻中宮乘輦、○註略ス、出宮、於朔平門外、遷御檳榔毛、○略中天德四年、永祚二年、皇后御服間、乘檳榔毛行啓云々、御服ニ依リ黑漆車ニ乘御ス、

十六日、辛巳、臨時仁王會、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月十六日、辛巳、仁王會、文時作呪願文、

〔革曆之事〕勘申辛酉年被行例事

應和元年例

天德四年庚申十二月十七日、壬午、被行臨時仁王會、呪願文云、明年革命、時運相當、呪願文ニ菅原文時呪願文ヲ作ル、

上達部及ビ諸司諸衞供奉ス、

今歲推期、天朔正半云々、○革曆諸道勘文之留ヲ以テ校ス、

〔菊亭文書〕五　勘申辛酉年被行例事

應和元年例

天德四年前年、十二月十七日、壬午、被行臨時仁王會、呪願文被載辛酉之年云云、

○臨時仁王會ノ日、革曆之事、菊亭文書竝ニ十七日ニ作ル、今日本紀略ニ據リテ揭書ス、

十七日、壬午、天變怪異消除ノ爲メ、權僧正寬空ヲシテ、西南對ニ不動法ヲ修セシム、又天台座主延昌ヲシテ、延曆寺總持院ニ熾盛光法ヲ、內供奉十禪師尋眞ヲシテ、神泉苑ニ北斗星法ヲ修セシム、

〔延喜天曆御記抄〕(天德四年)○柳原家記錄三十一所收　御修法事付七高山御修法、

同年十二月十七日、壬午、始自此夜、於西南對、令權僧正寬空修不動法、率番僧廿口、又於比叡山惣持院、令僧正延昌(聰)率番僧廿口、修熾盛光法、又於神泉院、令內供奉十禪師尋眞率番僧六口、修北斗七星法、竝限七日竟之、依天變恠異屢示危厄之由也、○仁和寺御傳、天台座主記異事ナシ、

竝ニ七箇日ヲ限ル、

諸卿參入御物忌

七箇日

十八日癸未、觀音供、

〔延喜天曆御記抄〕〇柳原家記錄百三十一所收　御修法事付七高山御修法、

（天德四年）同年十二月〇中略十八日、此日於西南對、權僧正寬空便供觀音、紅梅ヲ中殿ノ東庭ニ植ウ、

〔禁祕抄〕上草木　天德四年十二月十八日、栽紅梅於中殿艮角、

十九日甲申、冷泉院御佛名、

〔政事要略〕二十八年中行事二十二月上御佛名二十八　西宮記〇中略天德四十二十九、廿、廿一、於冷泉院有御佛名、廿一日夜半諸卿參、丑時候御前、御物忌之中云々、依仰也、

二十一日丙戌、內供奉十禪師賀靜ヲシテ、延曆寺ニ於テ、本命元神供ヲ修セシム、

〔延喜天曆御記抄〕〇柳原家記錄百三十一所收　天供事、付星供事、

（天德四年）同年十二月廿一日、丙戌、始自今日、於天台山、令內供十禪師賀靜修本命元神供、限七个日、

二十五日庚寅、漏刻、金鼓等ヲ冷泉院ニ移ス、

太政官牒　正倉院御物

原寸　縦〇・三四九　横〇・五六四

太政官牒東大寺

應永爲寺家所領停止他至籠并國郡臨時雜役茜部庄事

在美濃國厚見郡

四至　東限[illegible]　南限尾張河

[illegible]　北限朴[illegible]

右太政官今日下美濃國符偁得彼寺別當權律師法橋上

位光智等去三月十六日奏狀偁謹檢案內大伽藍是三代

聖皇之御願一朝叢重之靈跡也堂閣連宇尊像間光

學徒並窓修練積歲是以祈寶祚之久賢尊天下之長

榮愛勤修一邦願召芳法花會設師子嚴床開一乘

奧義調龍駒仙歸通二周穀開恒例無怠薰修有日

作件茜部庄者元是笠原親王所領也而爲酬功德所施入

也則以其所出物充件會僧布施從當初至于今更無他

過今時代推遷人情娘度也或狼号私領或致國郡貢

如此之間田畝荒廢地利無收因茲件會合期難修始可

闕怠矣望請殊蒙天恩被停止國郡臨時雜役并私人牢

籠者法會会修奉祈聖朝天長地久遺教久留將致天下

除災与樂者左大臣宣奉　勅依請者國宜承知依宣行者

寺宜承知條到[illegible]狀故條

天德四年十二月廿七日[illegible]

[illegible]朝臣

內豎候所西壇下ニ片庇ヲ作ル

〔日本紀略〕村上天皇　十二月廿五日、庚寅、〇中略今日冷泉院內々豎候所西壇下、新作片庇、移漏刻、金鼓等也、

二十七日、壬辰、東大寺領美濃茜部莊ヲ永ク寺領ト爲シ、臨時雜役ヲ免ズ、

〔正倉院文書〕東南院文書參櫃第三十六卷

〔外題〕東大寺美濃國茜部莊券第二　宣旨　天德四年

太政官牒　正倉院御物

原寸　縦 〇・三四九米　横 〇・五六四

太政官牒東大寺

應永爲寺家所領停止他半籠并國郡臨時雜役苗部庄事

在美濃國厚見郡

四至　東限交河　南限尾張河

西限平田大路　北限朴垣

右太政官今日下美濃國符偁得彼寺別當權律師法橋上人

位光智等去三月十六日奏狀偁謹檢案内大伽監是三代

聖皇之御願一朝嚴重之靈跡也嘗閣連宇尊像閒光

學徒並窓修練積歲是以祈寶祚之久駆尋天下之長

榮爰勤修一邸願名号法花會設師子嚴床開一乘

奥義調龍駒仙歸通三周穀開恒例無怠薫修有日

柞件苗部庄者亢是笠原親王所領也而爲酬功德所施入

也則以其所出物充件會僧布施從當初至于今更無他

過今時代推遷人情娘慶也或狼号私領或致國郡貢

如此之間田畝荒廢地利無収因茲件會合期難修殆可

闕怠矣望請殊蒙天恩被停止國郡臨時雜役并私人牢

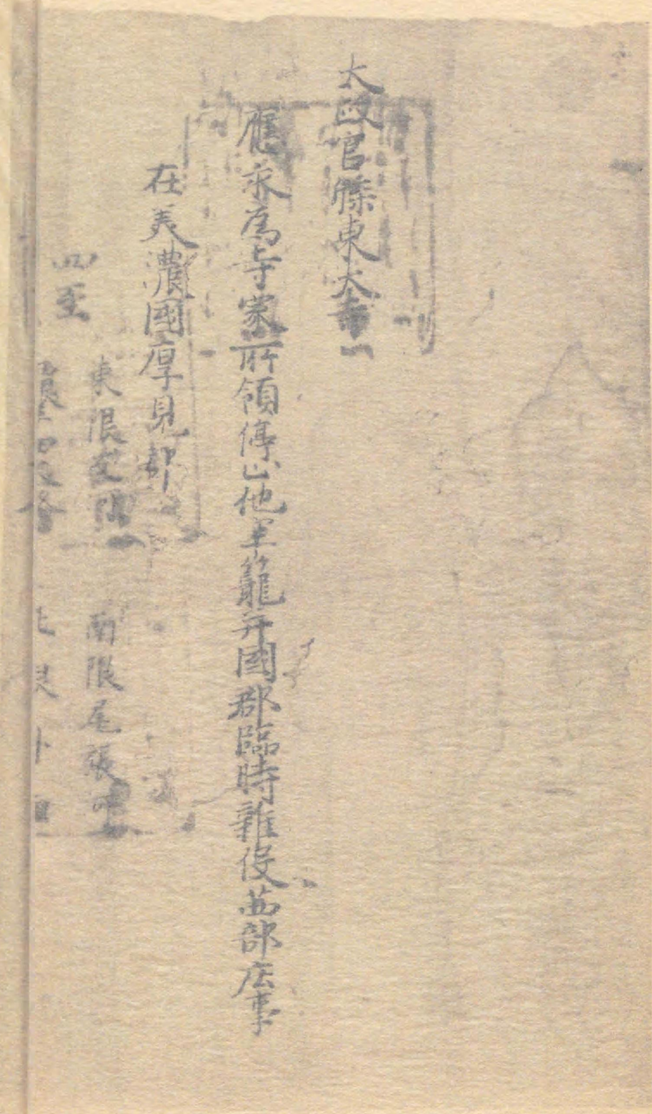
籠者法會会修奉祈聖朝天長地久遺教久留將致天下

除災与樂者左大臣宣奉　勅依請者國宜承知依宣行者

寺宜承知條到准狀故條

天德四年十二月廿七日　正位上行左史秦宿祢公頼

從四位下左中辨兼内藏頭藤朝臣



正倉院御物　原寸　縦〇・三四九　横〇・五八四

内竪候所西壇下ニ片庇ヲ作ル

〔日本紀略〕村上天皇　十二月廿五日、庚寅、〇略中今日冷泉院内々竪候所西壇下、新作片庇、移漏刻、金鼓等也、

二十七日、壬辰、東大寺領美濃茜部荘ヲ永ク寺領ト爲シ、臨時雜役ヲ免ズ、

〔正倉院文書〕東南院文書　參櫃第三十六卷

〔朱墨〕東大寺美濃國茜部庄券第二　宣旨　天徳四年

太政官牒東大寺

應永爲寺家所領停止他牢籠幷國郡臨時雜役茜部庄事

在美濃國厚見郡、

四至　東限友河、南限尾張河、
西限平田大路、北限朴垣、

右太政官今日下美濃國符偁、得彼寺別當權律師法橋上人位光智等、去三月十六日奏狀偁、謹檢案内、大伽藍是三代聖皇之御願、一朝嚴重之靈跡也、堂閣連宇、尊像間光、學徒竝窓修練積歳、是以祈寶祚之久駐、專天下之長榮、爰勤修一御願、名號法花會、設師子嚴床開一乘奥義、調龍駒仙蹄通三周疑關、恒例無怠、薫修有日、抑件茜部庄者、元是笠原親王所領也、而爲酬功徳所施入也、則以其所出物、充件會僧布施、從當初至于今、更無他過、今時代推遷人情娘(狠カ)戻也、或

太政官牒

太政官符

茜部庄ハ舊笠原親王ノ御領法華會布施料ニ充ツ

田畝荒廢シテ地利ナシ

狼號私領、或致國郡責、如此之間、田畝荒廢、地利無收、因茲件會合期難修、殆可闕怠矣、望請殊蒙天恩、被停止國郡臨時雜役幷私人牢籠者、法會全修、奉祈聖朝天長地久、遺教久留、將致天下除灾与樂者、左(實賴)大臣宣、奉勅依請者、國宜承知、依宣行者、寺宜承知、牒到准狀、故牒、

天德四年十二月廿七日　正六位上行左少史秦宿禰「名頼」(自著下同ジ)牒

結申ノ間夜ニ入ル

大臣ノ懈怠ナリ

第九皇子

太政官符

二十九日、(甲午)官奏、

〔西宮記〕七官奏○前田家本　天德四年十二月廿九日、左大臣(實賴)奏官奏、結申之間已入夜、仍令供燈、前例未有如此、臨夜奏之、大臣懈怠也、

皇子昭平ニ源姓ヲ賜フ、

〔日本紀略〕村上天皇　十二月廿五日、庚寅、諸皇子未預封邑者、賜源朝臣姓、第九昭平也、

〔類聚符宣抄〕四皇子賜姓

太政官符民部省

源朝臣昭平年七、

右左(實賴)大臣宣、奉勅、件皇子、宜依去年十二月廿九日勅書賜姓者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

右少辨　左大史

應和元年二月十九日

御衰日ニ依リテ延引ス

〔禁祕抄〕下勅書　天德四年十二月廿六日、皇子給源朝臣姓勅書、明日當御衰日、仍延廿九日、勅書可忌御衰日、

〔西宮記〕臨時一諸宣旨　天德四十二廿六、賜源氏、有勅書、

〔本朝皇胤紹運錄〕

村上天皇皇子

村上天皇

昭平親王天德四十二賜源姓、

○皇子昭平賜姓ノコト、日本紀略、二十五日ニ、西宮記、二十六日ニ作ル、今禁祕抄、類聚符宣抄ニ據リテ揭書ス、昭平ヲ親王ト爲スコト、貞元二年四月二十一日ノ條ニ見ユ、

方相氏西中門ヨリ入ル

三十日、(乙未)追儺、

〔西宮記〕十二月追儺事　天德四年十二月卅日、御冷泉院、云々、方相氏入自西中門立版

陰陽官人呪ヲ讀ム

南、大膳賜饗、陰陽官人讀呪云々、

是月、荷前、

〔北山抄〕二荷前事 年中要抄下 十二月

同四年、立幄西對南庭、天安例、裝束南門及二條大路、而依無便宜、於此設之、○撰集秘記同ジ、

○本書、月日ヲ闕ク、姑ク恒例ニ據リテ、是月ニ掲書ス、

七人ヲ加フ

是歲、權律師觀理ヲ醍醐寺座主ニ補ス、

〔醍醐寺座主次第〕○山城 〔朱筆〕〔朱筆〕村上冷泉圓融ノ本權大僧都〔第八〕權律師觀理 同四年月日任座主、年六十七、薨四十八、

瀧口衆ノ員數ヲ增ス、

〔禁祕抄〕上 瀧口 員數廿人、○略中 天德四年、七人召加、

○始メテ瀧口衆ヲ置クコト、寬平年中ノ條ニ見ユ、

諸國ノ無直交易ヲ申請スル例ヲ定ム、

〔北山抄〕○吏途指南 無直交易事 公卿三條公輝氏所藏 天曆三年、又立臨時色目、不許其外、而天德四年官符云、依公用所下知、依數進納立用稅帳、申請無直交□（歟カ）之日、加先制色目將裁許者、正稅減省之國、例用□（之殘）□□（謹カ）可加擧、又可充臨時用之由、以之可知也、

大風
日光變ズ
清水寺怪アリ
大神宮大宮司大中臣茂生還補
走湯山ニ鐘樓ヲ建ツ
仁和寺櫻會

年末雜載

天文、怪異、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　五月八日、丙午、霜降、尤可爲異、

八月十八日、乙酉、有大風、

十一月十七日、癸丑、日自辰初薄蝕、色赤而無光、至午四刻復、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　十月四日、庚午、夜人々於清水寺見鬼火遍滿京城、

神社、

〔二所太神宮例文〕第九大宮司次第

第五十六茂生　天德四年十二月廿三日任、在任六年、去天曆元年補任宮司、今度還補也、

〔走湯山緣起〕五　天德四年、庚申、始建立鐘樓、又講堂破壞頽毀、

佛寺、

〔日本紀略〕村上天皇　三月九日、戊申、仁和寺櫻會、

〔九曆〕三月七日(九カ)、仁和寺櫻會事、

〔東寺百合文書〕〇三十一之七十山城

珍皇寺堂塔僧房及ビ寶藏等燒亡ス
公驗流記帳燒失
多武峯涅槃會ヲ修ス
中務錄ノ過狀ヲ徵ス
御經裝潢ニ奉仕セル史生ニ上日ヲ給ス

珍皇寺司等解　申請本寺政所裁事〇中略

右謹檢故實、件珍皇寺者、〇中略去寬平二年、又天德四年堂塔僧房幷寶藏等燒亡之次、公驗流記帳悉燒失、〇中略仍勒狀以解、

延久三年十月八日　都維那法師〔慶算〕(自署)〇以下三名略ス、

〔多武峯略記〕上佛事　涅槃會

二月十五日、於講堂修之、後記云、〇中略天德四年、撿挍千滿語上座平祚曰、今月是大恩教主入滅月也、故先年僧都實性、講彼經唱佛名、我等須又興修先業矣、自爾以來講經唱名、每年修之、

公家、

〔西宮記〕二月位祿事　天德四正(二カ)十八、中務錄依智秦時賴、依不申位祿目錄、進過狀云々、

〔類聚符宣抄〕十可賜上日人々候御願所人

中納言藤原在衡卿宣、史生美努眞香奉仕御經裝潢、宜五箇月間准見仕給上日者、

天德四年七月廿五日　少外記海正澄奉

師輔河原ニ出デテ解謝ヲ修ス

諸家、

〔九曆〕三月一日、出河原、依占告先解謝、次供香燒、祈願後、兩段再拜、次心經、

夏季節分

四月三日、向法性寺宿房、違節分忌、明日入夏節歟、

筑前權介藤原善蔭卒ス

死歿、

〔尊卑分脈〕藤原氏 眞作卿孫

恆長

善蔭 太宰少監、筑前權介、正六上、天德四七廿八卒、母、或云、峯人一男云々、又云、峯守子云々、

莊園、

安樂寺領筑原莊施入

〔安樂寺草創日記〕

菩薩裝束 宰府大監紀有賴施入也、

筑後國節原 櫛カ 天德四年丁巳二月廿五日寄進、

東寺伊勢大國莊司ニ下ス符

〔東寺百合文書〕京二十七下 ○山城 〔端書〕〔案文成願寺〕

寺家符 大國庄司

可任理除免田壹町貳段佰八十步狀

成願寺ハ秀良親王ノ御建立同寺田ハ昌泰年中ノ御施入

在多氣郡十四條二兒國里廿四坪一段 廿五坪一段

廿六坪六段 廿七坪一段 廿五坪三段百八十步

右得成願寺牒狀偁、件庄田元是故前々彈正尹二品秀良親王、依去承和二年三月十五日官符領掌、其後以去昌泰年中、御爲國家建立寺家、所被施入析也、而貴寺所領大國庄司等、偏稱四至內障妨、爰靜案事情、寺家所領者多氣郡內也、貴寺所領飯野郡內也、以是謂之、彼庄司等所起妨不可然、得也之狀、任理被判免者、所仰如件、庄司宜承知、行於坪付、任理可免除、莫阿容、故符、

都維那

別當權僧正 在判

權少僧都 在判

大法師 在判

天德四年八月廿五日

東寺領四至內ト稱シテ押妨ス

大國莊司ヲシテ成願寺領ヲ免除セシム

雜、

〔石清水文書〕二 田中家文書

勘申八幡宮寺言上穢物間事

右被仰下偁、八幡宮寺奏狀如此、可爲穢否事、可令注申者、

○上略　天德四年十二月十二日、右大將藤原朝臣（師尹）令延光朝臣申云、十日鳶死兒片頭落宅內、先々式不爲穢、隨仰將進止、仰依前例不爲穢者、○中略　寬喜二年閏正月廿日○下略

鳶死兒ノ頭ヲ藤原師尹ノ第ニ落ス

天德年中

金剛峯寺奥院廟堂落慶ス、

〔高野山奥院興廢記〕一廟塔炎上後、改造于寶形堂事、

村上天皇御宇、天德年中、和泉講師雅眞公、奥院炎上後經五六年、尋塔婆燒失之灰燼、始堂宇建立之土木、今奥院廟堂此其是也、于時當山座主僧正寬空寺務之事也、是則相當大師入定以後一百十九年歟、（可能檢之、猶不分明、後哲稽古、當散其疑、）

〔高野山勸發信心集〕

一奥院　御廟堂一宇（昔者寶塔、今者寶形御堂、）　神殿二社（丹生、高野、）

村上天皇御宇、天慶季中、和泉講師雅眞公所造、今御堂是也、長者寬空僧正之叹也、御入定以後一百十九年、文、

一地形等事、件地尤宜修禪（下、裏書云、○中略）

第四撿挍雅眞、（號和泉講師、亦云天野撿挍、）此雅眞公者、石山普賢院淳祐內供之弟子、醍醐延命院元杲僧都之同門也、逐大師跡、攀高野山、是則天曆七季之比歟、其所由者、奥院廟塔修理供養之後、經廿許年、爲雷火燒失云々、計其季記、當廿年、爰彼雅眞公、始來政所、終向住人、相尋大師御入定廟窟、住人等答云、自修

和泉講師雅眞堂宇ヲ建立ス

寶塔ヲ寶形御堂ニ改ム　丹生高野神殿二宇ヲ再建ス

雅眞廟窟ヲ尋ネテ建立ノ願念ヲ起ス

一間四面ノ廟堂ヲ建ツ

理廣（廢ノ）塔以降、敢无往還之人間、林木滋山頭、道路失人跡、更（不脫カ）知案内、爭可示廟下（所カ）、加之奥院廟塔雷火燒失云々、旁暗子細、何明聖窟、雖然懇語見知山路人、忽企登山、遂臨廟所、卽掃廟塔燒亡灰燼（之脫カ、燼カ）俄起廟塔建立之願念、遍抽匪石之誠、甫營土木之功、天惠之砌、廟堂造畢、念（祈カ）之今之廟、此其是也、抑聞、雅眞公者、依爲无緣之賓客、申請和泉之講師、以其依怙、企此造營云々、亦雨（仁海）僧正者、泉州人也、天曆六季壬子出母胎、天德四庚申入師室、于叱幼稚九歲、來天野撿挍之坊、遙離二親、參和泉講師之室、爰知仁海未到來以前、和泉講師雅眞公殊凝大信、專勵微力、爲報恩謝惠善根、令造營建立之廟堂而已、

〔紀伊續風土記〕高野山部　奥院之一　御廟　興廢

其後天德の始寶形の堂一間四面に造立す、○中略、前揭高野山勸發信心師定觀、和泉講師雅眞、○中略、前揭高野山勸發信心集、此雅信公者以下ニ同ジ、南山要集に、類祕鈔を引て、和泉講師雅眞大法師、御廟堂一間四面造立、大底天德之始比也、其故者小野海僧正者、天曆六年壬子誕生、其人七八歲計比被造立也、僧正九歲之時歟、始被參天野、其已前講師任間、所被造立者、

○金剛峯寺奥院堂舍雷火ニ依リテ燒亡スルコト、天曆六年是歲ノ條

天曆七年廟塔再建ヲ發願ス

廟塔ハ空海入定ノ所ナリ

ニ見ユ、

〔參考〕

〔紀伊續風土記〕高野山部　山主撿挍次第之一　歷代撿挍、第一撿挍、行狀在別、三十二世撿挍雅眞

天曆七年、此山に來り、廟塔再建の念願を起す、これ山事に預る始なり、

〔高野春秋〕四　天德元年丁巳三月廿一日、落慶奥院御廟堂及兩神二社、唱導師執行雅眞師、職衆門徒中皆參、群詣道俗迨還絡繹、六箇年成功、年尙祚記云、入定所、往昔廟塔也、禮堂者、古時拜殿也、坊舍者、山籠僧宿所也、庵室者、昔在河南、後移河東、案今護摩堂御供所等、是蓋其遺範歟、雅眞雖僅再興廣塔、未造立餘堂拜殿等、是世財不足之故也、

應和元年辛酉

正月小 丙申盡 丙申朔

一日、丙申、四方拜、御藥ヲ供ズ、御物忌ニ依リテ、小朝拜ヲ停ム、

〔西宮記〕正月上 四方拜 天德五年正月一日、四方拜、設二个座、仰云、一座拜陵、設二所失也、

〔西宮記〕正月上 供御藥事 天德五年正月一日、无御出、女房著尋常裝束、供御藥、裏書云、天德五年正月一日御記云、供御藥如例、今日尙藥、女藏人等、不著摺衣、纐纈裳、用尋常裝衣等、

〔西宮記〕正月上 小朝拜 天德（廣書）五年正月一日御記云、止小朝拜事、依當御物忌、兼延喜之始、勅停此禮也、

〔權記〕寬弘三年正月一日、甲辰、參內、有小朝拜事、節會如常、○略 中或云、天德五年御冷泉院、無小朝拜、可依彼例云々、而覽御記、依御物忌、無小朝拜云々、

〔公卿補任〕六 天延三年 參議從四位上藤爲輔 同五正一補次侍從、

二日、丁酉、東宮、參覲アラセラル、

〔日本紀略〕村上 天皇 正月二日、丁酉、皇（憲平親王）太子參覲、

東宮大饗、

尙藥等ノ裝束

延喜ノ例

次侍從ヲ補ス

御厩町ニ於テ行ハル

〔西宮記〕正月上二日二宮大饗　天德五年正月二日、東宮（憲平親王）於院巽方御厩町、行大饗事、

年來六日ニ行フ

五日、庚子、敍位議ノ式日ヲ改ム、

〔年中行事抄〕正月五日敍位議事　五六日之間、依日次、　天德五年正月五日御記云、此日有敍位議、年來六日行之、而或及曉更、七日節會自闕、仍如年中行事、以此日行之、

敍位議翌朝ニ及ビ節會自ラ闕クルニ依リテ五日ニ改ム

〔公事根源〕正月　敍位　五日、六日、近代五日、　此敍位、もとは六日にて侍りしを、天德五年より、五日に始めて此の議あり、曉なとに及へは、七日の節會の懈怠なりとて、取りあけられけるにこそ、されは今に至るまて五日に定まれり、主上若しは執柄なとの衰日にあたれは、六日に行はるゝ事も常の事なり、

御衰日ニ當レバ六日ニ行フ

七日、壬寅、節會、敍位、

加敍アリ

〔柱史抄〕上七日正月節會　天德五年正月七日御記云、左（實頼）大臣申送延光朝臣云、讃岐介子高前任之內記可被賞由、昨日諸卿定申畢、而令執奏、宜申此由、仰依公卿定令加敍、大臣令申云々、子高位記、今日可令作加、位記所司已退出、令召之間、日漸欲晚、且始行節會何、令仰云、始節會之後、何作位記乎、須後日令作云々、

中宮御給

八日左大臣令延光朝臣申云、今日可令作子高位記云々、

〔公卿補任〕五　大納言從二位源高明、四十八、中宮大夫、按察、正月七日從二位、

〔公卿補任〕六天延二年　參議從四位上源惟正、四十六、天德五正七從五上、備中功、

〔公卿補任〕六天延三年　參議從四位下藤顯光、三十二、天德五正七從五下、中宮御給、

〔公卿補任〕六貞元二年　參議從四位下源伊陟　同（天德）五正七從五上、

〔公卿補任〕六天元元年　參議正四位下藤佐理、三十五、天德五正七從五下、氏、十八、

〔公卿補任〕六寬和二年　非參議正三位源時中、四十五、同（天德）五正七從五下、六人部是助讓、

〔外記補任〕二　大外記從五位下安倍良明　正月七日敍、

〔三十六人歌仙傳〕從五位上守右近衞少將兼備後介藤原朝臣高光　五年（天德）正月七日敍從五位上、

從五位下行丹波介藤原朝臣元眞　天德五年正月七日敍從五位下、諸司、

〔西宮記〕正月中五日敍位議　受領　自五位至從四位上、天德五年守ゑ依正下敍四位受領、

八日、癸卯、後七日御修法、

〔東寺長者補任〕一　長者權僧正寬空後七日、法務、後事　加持香水

〔御質抄〕宮中眞言院後七日御修法事

二代御記抄第二、年中行事、

天德五年正月十四日、僧綱衆僧等依次參上、權僧正寬空進机下加持散香水、

訖復座、

〔後七日御修法阿闍梨名帳〕村上天皇

應和元年、辛酉、權僧正寬空　于時一長者、

加持香水

御厄年ニ依リ、權律師喜慶ヲシテ、尊勝法ヲ修セシメ、僧正延昌ヲシテ、

延曆寺ニ不動法ヲ修セシム、又僧二十口ヲシテ、大般若經ヲ轉讀セシム、

〔延喜天曆御記抄〕○百三十一柳原家記錄所收　御修法事付七高山御修法、

應和元正八日、從今夜、於西對、令權律師喜慶修尊勝法、番僧十七口、又於天台

山、令僧正延昌、奉修不動法、又別請僧廿口、令轉讀大般若、並限七日竟之、今年

當危、十五日修法了、律師喜慶率番僧參上、訖令左近少將伊陟以紅褂施給喜

慶、訖退下、

寬空加持香水

竝ニ七箇日ヲ限ル尊勝法結願

十四日、己酉、御齋會內論義、

〔御質抄〕宮中眞言院後七日御修法事　加持香水

二代御記抄第二、年中行事、

天德五年正月十四日、僧綱衆僧等依次參上、權僧正寬空進机下加持散香水、

訖復座、權律師觀理起座讀論義、衆僧交名如常、其時主殿供燈炬、講師以下諸

宗法師就兀子論義、了最後者、供隨喜如例云々、

〔台記〕久安六年正月十四日、壬辰、○中略

先灑水後讀奏說

〔李部王記第二卷〕同記同卷、○中略天德五年、已上寬空僧正三度、○中略皆灑水前、奏後、

十七日、壬子、侍所ニ於テ、陸奧國獻ズル所ノ鷹犬ヲ御覽アラセラル、

〔花鳥餘情〕一條桐壺　村上天皇御記、天德五年正月十七日、召陸奧所進鷹犬於

侍所覽之、助信申之、朝忠朝臣令申云、故御春武中遭喪之間、以源敎權爲御鷹飼、以

件例左近府生公用遭喪之間、以源撰被補御鷹飼、仍便令補撰、撰此故濟男也、

十九日、甲寅、冷泉院ニ於テ、競渡ノ負態アリ、

〔西宮記〕臨時八內敎坊舞　天德五年正月十九日、於冷泉院、競渡負態、公卿候獻物、

應和元年正月十四日　十七日　十九日

論義僧名ヲ讀ム

隨喜ヲ供ズ

源撰ヲ御鷹飼ニ補ス

公卿物ヲ獻ズ

付御厨子所、有酒饌、絃歌、鵜船、給祿、

音樂鵜船ノ興アリ

二十五日、庚申、除目、

〔日本紀略〕村上天皇　正月廿二日、丁巳、除目始、

除目始

廿三日、戊午、同、

廿四日、己未、同、

廿五日、庚申、同、

〔公卿補任〕五

參議正四位下源重信、四十、正月廿五日兼備中守、

從四位上藤伊尹、三、十正月廿五日兼伊与守、

〔公卿補任〕六　天延二年　參議從四位上源惟正、四十、（天德五年正月）廿五日信乃守、

〔公卿補任〕六　天延三年　參議從四位上藤爲輔　（天德五年正月）廿五日丹波守、應和元二十八昇殿、

〔外記補任〕二

大外記從五位下安倍良明　（正月）廿五日遷石見守、

小野傅說　正月廿五日任大、六十三、

丹波守藤原爲輔赴任ノ由ヲ申スニ御前ニ召サル

少外記笠朝望　正月廿五日任、

權少外記秦敦光　正月廿五日任、元式部大錄、

〔高光集〕○彰考館所藏　（裏書）高光　應和元年正月廿五日兼備後權介、

〔兼盛集〕○圖書寮所藏　（裏書）平兼盛　應和元年正月廿五日任山城介、

〔敍位除目執筆抄〕應和元年正廿二縣召、廿五日入眼、執筆（左大弁カ）右大臣顯忠公、

〔外記補任〕二　天延二年　權少外記立野有賴　應和元年正月內匠少允、造宮所獻者、

〔禁祕抄〕下　帥大貳諸國受領赴國　應和丹波守高（延カ）輔赴任之時、被召御前、不垂御簾、止昇殿之後不幾故也、在御記、

○立野有賴ノ任官、藤原爲輔ノ昇殿及ビ赴任ノコト、便宜合敍ス、

二十八日、癸亥、藏人ヲ補シ、內藏權頭小野道風、散位藤原佐理ニ昇殿ヲ聽ス、

〔扶桑略記〕二十六　村上天皇下　天德五年辛酉正月廿八日、癸亥、勅內藏權頭小野道風、散位藤原佐理、共聽昇殿、

〔公卿補任〕六　天元元年　參議正四位下藤佐理、三十五、（天德五年正月）廿八日昇殿、

〔公卿補任〕六　天延二年　參議從四位下藤朝光、廿四、應和元ー一昇殿、十一、

〔元亨四年具注曆裏書〕寬治七年六月十六日、壬戌、送消息於顯季朝臣許、○中略送返事曰、新藏人或當日參入、或三日內撰吉日參入、若夜前不參者明日如何、癸亥日、被補藏人之例、天德五年正月廿八日、

○藤原朝光ノ昇殿、便宜合敍ス、

二月小盡乙丑朔

三日丁卯、大原野祭、

〔日本紀略〕村上天皇　二月三日、丁卯、○中略大原野祭、

〔北山抄〕一年中要抄上卯日大原野祭事　二月　天德五年二月、安居令申依傍親喪、不供奉由、仰令差代官、

釋奠、

〔日本紀略〕村上天皇　二月三日、丁卯、釋奠、

〔西宮記〕八月釋奠　御記云、應和元年二月三日、外記令申云、納言等不著釋奠所、只有參議好古一人、仍令檢於先例、去年參議一人就之云々、仰依去年例令行云々、

〔江次第〕五釋奠　二月　參議一人就行例、○中略應和元二、

四日戊辰、祈年祭、

〔日本紀略〕村上天皇　二月四日、戊辰、祈年祭、

〔北山抄〕一年中要抄上四日祈年祭事　二月　天德五年二月、左馬寮申馬十一匹內、不堪牽進狀、仰以野飼馬令充、○年中行事抄、野飼馬ヲ野御馬ニ作ル、

納言等釋奠所ニ著カズ

供奉人代官

野飼ノ馬ヲ牽キ進ム

祭使參內セズ

中行事抄同ジ、

大辨不參

釣殿出御詩ヲ獻ズ

公卿物ヲ獻ズ

皇居炎上幷ニ辛酉革命ノ御

八日、壬申、春日祭、內裏穢アリ、
〔北山抄〕一年中要抄上申日春日祭事
二月　天德五年二月、依禁中穢、祭使不參內、〇年
〔春日祭歷名部類〕應和元年二月八日、壬申、祭、依禁裏有穢、氣、祭使不參內、
十一日、乙亥、列見、
〔日本紀略〕村上天皇　二月十一日、乙亥、列見、
〔西宮記〕二月列見　應和元年、大辨不參、權左中辨國光申行雜事、〇北山抄同ジ、
十二日、丙子、冷泉院ニ於テ、競渡ノ負態アリ、
〔日本紀略〕村上天皇　二月十二日、丙子、天皇御釣殿、有競渡負態之興、黃昏獻詩、
〔西宮記〕臨時入內叡坊舞　天德五年正月十九日、於冷泉院、競渡負態、〇中略同二月、
有此事、獻物公卿候、有管絃、
十五日、己卯、直物、
〔日本紀略〕村上天皇　二月十五日、己卯、直物、
十六日、庚辰、應和ト改元ス、是日、大赦ヲ行フ、
〔日本紀略〕村上天皇　二月十六日、庚辰、〇中略詔改天德五年爲應和元年、依皇居

慎ニ依リテ改元ス

改元詔書ニ恩赦ヲ加フルノ例ヲ勘申セシム

藤原後生ヲシテ改元詔書ヲ作ラシム延喜元年ノ例

菅原文時年號ヲ擇ビ上ル

維時撰進ノ年號字文中ヨリ擇バシム延喜ノ例ニ依リテ赦ヲ行ヒテ物ヲ賜フ

火災十〇天德四年九月三日ノ條參看、二幷辛酉革命之御愼也、大赦天下、

〔改元部類〕自承平至寬治　外記記　天德五年二月十六日、庚辰、〇略中依行今日有
(改)開元、改天德五年爲應和元年詔書、左大臣(實頼)著右近陣座、卽(召カ)中務大輔源忠時朝
臣賜之、先是召大外記御船宿禰傅說仰云、改元詔書、恩赦相加之例、宜勘申者、
天德元年、〇天德元年十月二日ノ條參看、二天慶元年五月二十二日ノ條參看、二延長元年十月七日ノ條參看、二天
延光朝臣、奏聞之後、召文章博士兼大內記藤朝臣後生、仰可作進改天德五年
爲應和元年之詔書、但詔書之趣、可緣延喜元年例者、後生朝臣蒙仰還所、成草
覽大臣、奏聞之後、令淸書、又奏聞之後、召中務大輔源忠時賜之、此度年號、右中
辨兼大學頭文章博士菅原朝臣文時所擇上也、
〔改元宸記〕御記　天德五年二月十六日、令延光朝臣仰左(實頼)大臣、今日可行改
元事、兼令行赦事否之由、大臣令申云、火災之後、變異不止、須行赦事云々、令給
文章博士等勘申年號、中納言大江朝臣(維時)撰申年號字文、令定申件字之中无忌
而有便稱謂之字、又令勘申可行赦免罪之程、大臣令奏文時進前年勘文案、外
記勘文、恩詔例文、仰云、以應和可爲年號、又依延喜元年詔法、行赦幷可賜物、

改元詔書

七十以上ノ老人及ビ僧尼ニ穀ヲ賜フ

〔革命〕勘申辛酉年被行例事

應和元年例、

同(天德)五年辛酉二月十六日、庚辰、左大臣以下參入、有改元之事、詔文云、忝(朕脫カ)居握符之名、未知馭俗之道、況比年災異荐臻、去秋皇居孽火之妖急起、此歲辛酉革命之符既呈、懍乎、如垂(乘カ)奔而無轡、方今緬檢虫篇、遠尋烏(鳥策カ)榮、上古帝王、南面稱孤者、或畏警誡而建元、或警咎徵而改號、是則修德却災、與物更始之義也、其改天德五年爲應和元年、大赦天下、今日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正咸皆赦除、但犯八瘧、故敛、謀敛、私鑄錢、强窃二盜、常赦所不免者不在赦限、又老人及僧尼年百歲以上給穀人別四斛、九十以上三斛、八十已上二斛、七十以上一斛、普告中外、俾知朕意云々、○中略、革曆之事ヲ以テ補正ス、

右文簿所注如件、仍勘申、

元應三年二月八日　大外記兼助教周防權介中原朝臣師緒勘申

〔改元部類〕自應和至建久　天德五二十六天曆御記云、天德是火神號也、有其忌云々、又新營宮室、施恩令與物更始、尤可有便宜、仍以今日下改天德五年爲應和元年之詔、

陰陽寮ノ勘申天德ハ火神ノ名尤モ其忌アリ

今年ハ革命ニ當ル

改元ハ革命及ビ內裏燒亡ニ依ル

〔西宮記〕臨時一改錢○前田家大永鈔本　天德(裏書)五年二月十六日、仰左大臣可行改元事云々、陰陽寮申、天德火神號也、可有其忌、仍下改天德五年爲應和元年之詔、大臣令申中務官人、或勅(障カ)申或不參、而大輔忠時朝臣雖進怠狀、來奏聞、且下給詔書、以後日奏彼過狀何、仰依請云々、

〔元祕抄〕和漢年號字難　我朝

天德

火神之名也、應和元年御記云、今年當革命、宜改元、加之天德火神之名也、尤可有其忌、

〔元祕別錄〕一勘文部改年號　天德五年二月十六日改元、應和、依革命幷皇居燒亡也、

博士菅文時兼右少(中カ)辨、　同藤復(後)生兼大內記、

中納言江維時

大輔直幹、權大輔敏通、大納言在衡等進、彼三人勘草雖不見、只中納言大江維時、文章博士等擇申云々、

御記、○中略、上ノ改元宸記ニ同ジ、或抄、御記曰、陰陽寮勘申、天德是火神號也、可有忌云々、

應和元年二月十六日　八三九

紫宸殿清涼殿等ノ柱立

春興殿棟垂木ヲ上グ

藤原在衡等造作所ニ著ク

諸門柱立

此度年號、右中辨兼大學頭文章博士菅原朝臣(文時)所撰上也、

○公卿補任、扶桑略記、一代要記、皇年代記、革曆類、異事ナキヲ以テ略ス、

始メテ、內裏殿舍、諸門ノ柱ヲ立ツ、

〔日本紀略〕村上天皇　二月十六日、庚辰、內裏殿舍始竪柱、

〔改元部類〕自承平至寬治　外記記　天德五年二月十六日、庚辰、今日辰二點、始立內裏殿舍之柱、就中紫宸殿、清涼殿、宜陽殿、春興殿、宣耀殿、登華殿、幷南面廊、陽明門等、刻限立始、但春興殿者、山城國擧棟垂木也、自餘殿舍、或國未運斬材木、大納言藤在衡卿、參議同朝忠朝臣、同源重信朝臣、同早朝著造作所行事、左中辨藤文範朝臣、右少辨平朝臣善理、右大史秦衆賴、佐伯(左少史脫カ)是海、率史生等祗候、

〔山槐記〕治承四年二月十五日、丁酉、○中略

禁忌月被立門例

村上天皇

應和元年二月十六日、庚辰、立內裏殿舍幷諸門、○中略

先例如此、仍注進之狀如件、

二月十二日　大膳權大夫安倍泰親

新造內裏ノ柱ニ蟲蝕ノ歌見ハル

歌ハ圓融天皇ノ朝裏板ニ見ハルトノ說

菅原道眞ノ歌ナリトノ說

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　二月十六日、庚辰、辰二剋始立內裡殿舍門廊柱、幷上梁、○中略世傳云、新造內裡之柱、虫食三十一字、其歌曰、作倫(ツクルトモ)又母屋(マタモヤ)計南(ケナン)菅原(スガハラ)舍棟(ヤムネ)之板間(ノイタマ)不合(ノアハ)奴限(ヌカギリハ)者、○歷代編年集成異事ナシ、

〔大鏡〕左大臣時平○千葉胤明氏所藏　內裏燒て、度々つくらせ給に、圓融院の御時のことなり、工共うらいたともをいとうるはしくかなかきて、まかりいてつゝ、又のあしたにまいりてみるに、昨日のうらいたに、ものゝすゝけて見ゆるところのありけれは、はしにのほりてみるに、よの內にむしのはめるなりけり、その文字は、

つくるともまたもやけなんすかはらやむねのいたまのあはぬかきりは

とこそ有けれ、それもこの北野(菅原道眞)のあそはしたるとこそは申めりしか、

〔本朝續文粹〕一雜詩古調詩　參安樂寺詩　江都督(匡房)以自筆寫之、

康和二年秋、清涼八月時、我詣安樂寺、○中略皇居頻有火、製造課班倕、蟲成卅一字、板上著其詞、○下略

〔續詞花和歌集〕八神祇

つくるとも又もやけなんすか原やむねのいたまのあはぬ限は

一條天皇ノ朝ナリトノ說

ある人、この歌は、一條院御時內裏のやけたりけるをつくられけるあひだ、御殿のうら板にむしのくへりける、北野の御歌となん申、

○內裏木作始ノコト、天德四年十一月二十八日ノ條ニ、小野道風ヲシテ、內裏殿舍諸門等ノ額ヲ書セシムルコト、本年三月二十八日ノ條ニ見ユ、

官歷

十八日、壬午、律師明祐寂ス、

〔日本紀略〕村上天皇　二月十八日、律師明祐卒、

〔僧綱補任〕二興福寺本　權律師名(朝)祐　天德二年十二月廿七日任、律宗、東大寺、內供奉(朱雀下同ジ)八十、同四年八月九日轉正、應和元年二月十八日入滅、往生極樂「八十四」

大安寺別當

〔東大寺要錄〕五別當章戒和上次第

廿七明祐　天曆十一年任、東大寺、八十二、任律師、

〔東寺文書〕甲號外二十八　○山城□□僧明祐

大安寺別當次第

〔東大寺要錄〕四諸院章

天地院師資次第(依古日記)

法系

傳記伊賀ノ人

一生持齋ス

每夜參堂ス

臨終ニ及ブマデ念佛ヲ休メズ

戒律ヲ保ツ

自ヲ死期ヲ豫知ス

觀宿之資明祐、戒和上、應和元年往生人也、明祐資法秀已講、同法仁保、本師光智、

〔日本往生極樂記〕東大寺戒壇和尙律師法橋上人位○法橋以下五字、扶桑略記ヲ以テ補フ、明祐、伊賀國人也、○伊賀以下五字、扶桑略記ヲ以テ補フ、一生持齋、全護戒律、每夜參堂、不宿房舍、及于命終、念佛不休、天德五年二月十八日入滅焉、先一兩日、頗有惱氣、飮食非例、弟子等曰、終日不食、勸粥如何、師曰、齋時已過、命終亦近、何可破乎、重命曰、二月者、寺例有所修之佛事、我慙生而過之也、十七日夕、弟子等誦阿彌陀經、廻向畢後、師曰、如前可調音樂、答曰、無有音樂、何言之相誤乎、師曰、我心神不爽、以前有音樂所陳也、明日卽世矣、

〔今昔物語〕十五本朝付佛法　東今昔、東大寺ニ戒壇ノ和上トテ、明祐ト云フ人有ケリ、此ノ人一生ノ間、持齋シテ、戒律ヲ持テ破ル事无シ、每夜ニ堂ニ詣テ、房ニ宿スル事无カリケリ、然レハ寺ノ僧皆此レヲ貴ヒ敬フ事无限シ、而ル間、天德五年ト云フ年ノ二月ノ頃、明祐和上一兩日ノ程、聊ニ惱ム氣有テ、飮食例ニ不似ス、我レ(四アラン)持齋ノ時既ニ過ヌ、亦我レ命終ラム期近シ、何ソ忽ニ此レヲ可破キ、此ノ二月ハ、寺ニ恆例ノ佛事アリ、我レ此ヲ過サム思テ、慇ニ生タル也ト、弟子等此レヲ聞キテ、貴

弟子ニ阿彌陀經ヲ誦セシム

華嚴ヲ觀宿ニ受ク

死ニ至ルマデ齋ヲ破ラズ

高泉ノ贊

師歿ノ贊

ヒ思フ程ニ、其ノ月ノ十七日ノ夕ニ、弟子等阿彌陀經ヲ誦シテ、廻向畢テ後、師弟子等ニ云ク、汝等前ノ如ク阿彌陀經ヲ可誦シ、我レ只今音樂ノ音ヲ聞クト、弟子等ノ云ク、只今更ニ音樂有ル事无シ、此レハ何ニ宣フ事ソト、師ノ云ク、我レ心神不變ス、正シク音樂ノ音有リト、弟子等此レヲ悋シヒ思フ間ニ、明ル日明祐和上心不違テ、念佛ヲ唱ヘテ失ニケリ、兼テ音樂ノ音ヲ聞ク、極樂ニ往生セル事疑ヒ无シトナム、人貴ヒケル語リ傳ヘタトヤ、

〔元亨釋書〕十三　明戒六　釋明祐、賀州人、精戒律、兼稟華嚴于觀宿、以選爲東大寺戒壇和尚、每夜宿大殿、不寢房舍、應和元年二月病、先死三兩日、飲食不進、徒弟白曰、不食久乞羞糜饘、對曰、齋時已過、況期又邇、生平無之、今豈破齋乎、及晚念佛而化、實十八日也、年八十四、

〔東國高僧傳〕六　東大寺明祐和尚傳〇傳文略ス、

系曰、廬山遠法師、臨終不敢食蜜、疑違佛制、東大寺祐戒師、垂死不過中食、不肯破齋、古人愼行、率多如此、爲人師範、得不宜乎、

〔本朝高僧傳〕五十七　淨律五之一　和州東大寺沙門明祐傳〇傳文略ス、

贊曰、不寢私室、獨宿大殿者、塚間樹下、抖擻之類歟、不破齋而終焉、易華皖簀之

結願寬空加持布施及ビ廢者ヲ賜フ

彗星野火ノ氣ノ如シ

呪願文

守也、達人所養、當如斯矣、釋氏之徒、或至屬纊、手忙脚亂、其形孔醜者、皆失祐公之恆守焉、大慧禪師之天逸也、有臨終堅固之言、矧於凡庸乎、可不愼焉耶、

二十一日、乙酉、御修法、

〔延喜天曆御記抄〕〇柳原家記錄百三十一所收　御修法事付七高山

應和元年二月廿一日修法了、阿闍梨權僧正寬空、率番僧參上加持訖、令右近權中將延光朝臣施御寬空、兼仰賜度者各一人之由、僧等隨喜、

二十二日、丙戌、內供奉十禪師賀靜ヲシテ、西對ニ本命元神供ヲ修セシム、

〔延喜天曆御記抄〕〇柳原家記錄百三十一所收　天供事付星供事

應和元年二月廿二日、令內供十禪師賀靜、於西對修本命元神供事、

二十六日、庚寅、彗星見ハル、是日、臨時仁王會、

〔日本紀略〕村上天皇　二月廿六日、庚寅、仁王會、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　二月廿七日、辛卯、酉時坤方見彗星似野火氣、

〔革曆之事〕勘申辛酉年被行例事

應和元年〇中略

同廿六日、庚寅、被行臨時仁王會、呪願文云、應和未至、疫癘猶繁、革命相當、彗星忽

（應和元年二月）

應和元年二月二十一日　二十二日　二十六日

見云々、

○二十七日、彗星ノコト、便宜合敍ス、天下安穩ノ爲メ、諷誦ヲ修セシムルコト、三月四日ノ條ニ見ユ、

三月　大盡　甲午朔

二日、乙未、直物、

〔日本紀略〕村上天皇　三月二日、乙未、直物、

三日、丙申、御燈、曲水宴、

〔日本記略〕村上天皇　三月三日、丙申、御燈、廢務、御遊、題云、花水落桃源、

〔北山抄〕三拾遺雜抄上　應和元年三月三日、御釣殿、泛觴流水、令侍臣飮、王卿侍臣獻詩云々、

四日、丁酉、天下安穩、息災延命ノ爲メニ、七大寺及ビ延曆寺、東西寺等ヲシテ、諷誦ヲ修セシメ給フ、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　三月四日、丁酉、勅、差遣藏人所雜色各一人於七大寺、延曆寺等被修之、爲去月廿七日彗星○二月二十六日ノ條參看、御祈禱、

尊勝院ヲ以テ、東大寺ノ一院トナシ、僧十口ヲ置ク、

百端、爲天下安穩幷息災延命也、

〔濫觴抄〕下　諷誦　村上十六年、辛酉、應和元、三月四日、遣雜色各一人於七大寺、延曆寺等被修之、爲去月廿七日彗星○二月二十六日ノ條參看、御祈禱、

東大寺等ニ調布ヲ賜フ

慶務詩題　釣殿出御　觴ヲ流水ニ浮ブ　王卿詩ヲ上ル

彗星ノ御祈禱

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下　二月廿五日、己丑、東大寺別當律師光智令奏、以新造尊勝院爲寺宛（家カ）一院、置智行僧十口、令勤修公家御祈願者、仰依請、

〔東大寺要錄〕十雜事章之餘　天德四年十月、東大寺別當光智申、以新造尊勝院爲寺家一院、置知行僧十口、令勤修公家御祈願文、副造十僧名、

〔東大寺續要錄〕諸院篇　尊勝院

太政官符大和國司

應以新造尊勝院、爲東大寺一院、置智行僧十口、令修御願事

建立五間四面、檜皮葺堂一宇　在禮堂、

十三間僧房二宇

奉造金色毗盧遮那佛像一躰

金色釋迦如來像一躰

金色佛頂尊勝如來像一躰

金色藥師如來像二躰

金色十一面觀世音菩薩像一躰

金色延命菩薩像一躰

官符

本堂

僧房

佛像

光智ノ奏狀

梵天帝釋四王像各一躰

右得彼寺別當律師法橋上人位光智去天德四年十一月廿八日奏狀偁、件堂舍佛像、爲奉誓護公家、殊致忠誠所建立也、謹檢案內、東大寺者、感神聖武皇帝發菩薩之大願、爲鎭護國家、利益法界、被建立也、光智幸蒙天恩、拜別當職之後、殊竭身力、勤仕寺務、而間更廻私計、寺內擇地、建立堂舍、刻造尊像、結爲一處、號尊勝院、是專遠期永代、爲奉祈聖朝之寶祚及攘除天下之災變也、因玆以十口僧、於件堂舍可勤仕御願之由、經上奏畢、卽撰定智行僧、始自十月廿八日勤修其事、晝則轉讀仁王般若、夜則轉念尊勝、大日、藥師、觀音、延命、不動眞言、精勤無私、冥助何空乎、望請、特蒙天裁、被賜官符、以件尊勝院爲寺家一院、置十口僧、將期永代、殊令勤仕聖朝安穩、國家豐樂之御願、但其院司、撰智行之者、師資相傳、令勤行件事、抑以華嚴宗爲院住僧者、華嚴教者、抽大日如來之肝心、聚普賢薩埵之行願也、圓融之理、甚深難測、利生之誓、廣大無際、仍爲立第一之宗、興廣大之教也者、左（實頼）大臣宣、奉勅依請者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

從四位上行（下カ）左中辨兼內藏頭美作權守藤原朝臣（文節）ミミ、

正六位上行左少史笠朝臣ミミ、

光智尊勝院ヲ建ツ

智行僧ヲ選定シテ御願ヲ勤修セシム

院司ヲ置ク

華嚴宗僧ヲ住侶ト爲ス

太政官牒　僧名

應和元年三月四日

奉行　同年八月十八日、

守高階眞人〻〻

介橘

太政官牒東大寺

應置尊勝院拾僧事

律師法橋上人位光智　薦年六十七　花嚴宗

傳燈大法師位慈高　薦年七十三　花嚴宗　兼律宗、

傳燈大法師位仁範　薦年五十六　花嚴宗

權大掾佐伯

大掾巨勢

權大掾文

權少掾藤原

仲

置

丹比

尊勝ノ勅印ヲ光智ニ付セヲルル

傳燈大法師位仁鑒　薦年五十二三　花嚴宗

傳燈大法師位法秀　薦年四十一五　花嚴宗

傳燈法師位平州　薦年四十二四　花嚴宗

傳燈法師位法春　薦年三十五　花嚴宗

傳燈滿位僧賴算　薦年二十三八　花嚴宗

傳燈滿位僧神蓮　薦年三十七　花嚴宗

傳燈滿位僧松橋　薦年二十二六　花嚴宗

右同上、

應和元年三月四日　正六位上行左少史笠朝臣〻〻牒

從四位下行左中辨兼內藏頭美作權守藤原朝臣

〔東大寺尊勝院院主次第〕

應和元年三月、被置尊勝院十口僧、補尊勝之勅印、華嚴之供印者、本願皇帝付屬根本僧正、尊勝印者、村上天皇付屬光智給、

○光智、尊勝院ヲ建立スルコト、天曆九年十二月二十五日ノ條ニ、大和國ヲシテ、東大寺尊勝院常燈等ノ料稻ヲ加擧セシムルコト、應和二年

三月二十八日ノ條ニ見ユ、

五日、戊戌、花宴ヲ釣殿ニ行ヒ、擬文章生ヲ中島ニ試ミ給フ、

〔日本紀略〕村上天皇 三月五日、戊戌、天皇御釣臺、召文人、有櫻花宴、花光水上浮、召擬文章生於池中嶋奉試、題流鶯遠和琴、勅題也、又有笙歌之興、文時獻序、□爲講師、文人四位五人、五位十四人、諸司六位四人、文章得業生二人、文章生三人、擬文章生廿人、學生二人、准延喜十六年九月廿八日行幸朱雀院○其條アリ、之例也、

七日、庚子、有勅、召諸儒於仗座、評定去五日擬文章生詩、及第十一人也、

〔扶桑略記〕二十六村上天皇下 三月五日、戊戌、於冷泉院釣殿有花宴、所召文人、文章得業生二人、文章生四(ママ)人、擬文章生二十人、學生藤原公方、同行葛、舊文章生民部大輔保光朝臣、左中辨文範朝臣、因幡守雅規、右衞門權佐偕行、大內記令茂、少外記笠朝望、少內記菅原篤茂、勘解由判官源順等也、式部大輔直幹朝臣等、相率文人參入、各著座、召直幹爲講師、然直幹遲參、仍令文時講詩、○濫觴抄同ジ、

〔小右記〕寬仁二年十月廿二日、辛亥、○中略次式部丞錄率擬文章生十四人、○中略擬生衆等、經文人座前幷中洲、著馬場殿西廊座、文臺紙筆預置、應和元年冷泉院花宴例歟、

釣殿出御、文人ヲ召ス、勅題菅原文時ヲ序ヲ獻ズ、擬文章生二十人、諸儒擬文章生ノ詩ヲ評定ス及第者十一人、源順等參入ス、講師橘直幹遲參、文時ヲ詩ヲ講ズ、

宴夜ニ入ル、

〔本朝文粹〕十木 詩序三 暮春侍宴冷泉院池亭同賦花光水上浮應製 菅三品(文紀)

冷泉院者、萬葉之仙宮、百花之一洞也、景趣幽奇、煙霞勝絕、聖上暫出紫闥、近幸綺閣、以來、○天德四年十一月四日ノ條參看、供奉無暇者、瑞露薰風、扈從猶留者、詩情謌思、及至春輝漸闌、物色可愛、人間之芳菲欲盡、象外之風煙猶濃、爰宴于林下之池臺、誠有以矣、觀其花綻在岸、水清盈科、花垂映而水下照、水浮光而花上鮮、瑩日瑩風、高低千顆萬顆之玉、染枝染浪、表裏一入再入之紅、誰謂水無心、濃艷臨兮波變色、誰謂花不語、輕漾激兮影動脣、嗟呼花之遇時、水之得池(地カ)者歟、夫布政之庭、風流未必敵峴閭(於陵カ)、兼之者此地也、好文之代、德化未必光于黃炎、兼之者我君也、故筆硯承恩、絲竹含賞、卽將閱詩律以爲擇賢之道、播樂章以爲易俗之音也、明聖之事、猗乎盛哉、于時宴入夜景、醉蕩春風、詠謌於琪樹之陰、蹈舞於沙涯之畔、臣文時籍非煙客、名謝風人、謬以詩家之末塵、叨霑樂池之餘澤、記言者昔勤也、敍事者新責也、敢對華塘、聊獻實錄云爾、謹序、

〔江談抄〕六長句事 瑩日瑩風、高低千顆万顆之玉、染枝染浪、表裏一入再入之紅、花光浮水上、詩序、三品、